
STARWORLDONLINEースターワールドオンラインー

ピエロトニワトリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STARWORLDONLINE—スターワールドオンライン—

【Nコード】

N2853X

【作者名】

ピエロトニワトリ

【あらすじ】

廃ゲームではないごく普通のシンベイはVRMMOで農作業をして、時には戦争に出ていた。この世界は八つの惑星があり、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、このゲームはレベル制ではなく、この八つの属性を選び、倒したモンスターの数でスキルを覚えるのである。そんな世界で神様がジャックしてしまった。このゲームで死んだものは本当に死ぬ、無事に帰りたいれば忘れられた冥王星で神様を倒せと言うものであった。星をわたるVRMMORPG開始しました。

暇潰しに読んでください。

1話 STARWORLDONLINE開幕(前書き)

VRMMORPGにチャレンジしてみました。アドバイス、感想、評価、VRMMOはもっとこうでなくちゃなどありましたらバシバシ送ってください。

句読点を直しました。ちよつとずつ眺めて直してゆきます。

2011/10/22さらに修正しました

1話 STARWORLDONLINE開幕

俺の名前は七川新平ななかわしんべい みんなこのゲームを知っているかSTARWORLDONLINE通称スターオンラインは世界規模ではやっているVRMMOである。

全身を包み込むコアというものに入ることによってゲームの世界で面白いことが出来るのである。

まるで、異世界に着たような錯覚を覚えさせるほどに特化した技術は世界では流行した。そして廃ゲームではない俺はいつもこのゲームに参加している。

なぜ廃ゲームではないことを誇示するのかというと昔父親と母親がこれの廃ゲームになって死んでしまった。だからというわけでもなくなぜか廃ゲームになることが嫌いであつた。のほほんがいいなというのがモットーである。

俺は高校生でありちゃんと勉強をしなくてはならない午後の四時に自宅に戻ると早速爺ちゃんからの送金を確かめて晩飯の買いにい く、じいちゃんから郵便受けに約数十万円が叩き込まれているおかげで一人暮らしがなりたっている。

家は昔両親が買ったものである。維持費とかで結構かかるのである。

寝室に巨大なカプセル型のコアが置いてある。そこに寝転がることによってVRMMOが出来るのである。最初は頭だけにつけるやつだったのだが。全身をトレースしたほうが向こうの世界でリアリティーに動けるといっているので貯金して購入したのである。

夕食を近くのスーパーで買い終わると俺は料理をして食べはじめ

た。主にサラダばかりだが。ゆっくりと租借してかむと口の中に広がるマヨネーズの香りがよかった。

ご飯は並盛りで進んで食べていった。食器を洗って風呂にも入って。さて、ゲームを開始しようとしたときには午後の六時であった。これから十二時までプレイするのである。

俺はトイレにいったいだいたいの準備を終えると。コア型のカプセルに入った。寝ていると頭に接続する機械があった。そこに頭を入れる。そして言葉に呟く。

「スタート」

すると、機械が閉じて意識がクリアされていく。

目ざめた場所は一軒屋である。

まずはこの世界について説明しよう。

この世界には八つの属性を選ぶことが出来る。水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、この八つの星を属性と呼ぶ。そして俺は水星である。理由は後ほど説明する。俺は地球に住んでいる。これはここで説明する。

理由はこの八つの星が現在存在することテレポートで向かうことが出来るそこかしらで星という世界が出てくるのである。タイトルどおりである。

何よりも一週間に一度惑星と惑星の間で戦争がありそのときに惑星同士がつながり大きな架け橋が出来てそのうえをプレイヤーが属性を使い罨や砦やらを作り攻撃してはひいては城の主人を倒せば勝者である。

勝者には、その惑星の税金の獲得ができる。

一週間ごとに更新であるためにみんな血気盛んである。

俺は水星属性を使い普通に家の外で野菜を作っている。俺はどちらかというとマイナーな職業で商売が大好きである。のほほんと暮らして生きたい。

この世界はレベル制じゃない。モンスターを倒した数で能力が決まる。

例えばラットを百匹倒して。俺の水星スキルの水撒きを一週間分使用できるとしよう。

それを使用したら水撒きがなくなり、またラットを百匹狩らねばならない。

脳内でイメージするとステータスが表示される。

――七川新平ステータス表

ラット百匹　水撒き。　一週間分

ブラックバッド二十匹　防御力百アップ継続　二週間後に消える。

ホワイトタイガー五匹　攻撃力二百アップ継続　一週間後に消える。

レザーマン二百匹　水属性付与　三日後に消える。

などなどである。現在がこれであり本当ならもつと複雑なのである。俺はどちらかというと生産職、兼戦士であるためにこのような弱腰でも大丈夫なのである。

基本的に安全地帯はないと思っていいだろう。どこでもい

いから犯罪は起こるしどこでもいいから殺害は起こる。安全なのは自宅領域であり侵入禁止と表示すればどんな破壊工作でも侵入できないのである。宿屋や自宅には絶対にワープポイントがあつて逃げられるようになっていいる。

だから、この木造小屋二階建てもワープポイントがある。

俺は外に出るとううんと背伸びした。今は夜中だがこちらでは太陽が昇っていた。

いい天気だ。

柵がありそちらに向かうと畑があつた。俺はアイテムボックスからジョウロを抜き取ると手から水を注入し畑に水遣りをするのであつた。

だいたいの広さはキャベツが二百個取れるくらいでありサツマイモも五十個とれる。玉ねぎは百個で大根は五百個である。

お分かりいただけただろうかこの星では季節という概念はあるが野菜には適応されないのである。野菜は魔法によつて成長するのである。この土にも魔法が与えられている。肥料が魔法なのである。

冬に枝豆を植え成長させるには水星の属性である水を与え続ける必要があるのである。よつて季節は魔法でなんとかなる。だが魔法を使わないプレイヤーにとつては季節は大事である。魔法を使わないということはその場にある魔法力で決まる。

つまり地力である。だから地力がない場合は動物の骨などをまぜて肥料にするしかない。

これでお分かりいただけただろうか俺が水星を選んだ理由は。商

売に特化しているからである。

そして地力は夏になると回復する。

だが俺はある特別なクエストをクリアしてある道具を持っている。

『豊作の鍬』である。これが俺の相棒の武器である。この鍬で畑を耕すと絶対地力があがり魔法が付与される。冬でも夏でも作物を作りたい放題できる。

だからって作物ばかりを作っているわけではない武器をもってモンスター退治や町に襲ってくるモンスターを討伐することだってあるし、この家も森の中にあるためいつなときモンスターが襲ってくるか分からないのである。

しかし基本的にモンスターは畑を荒らさない。食い物は自然にあるものを食っている。そこはログインしていない人のために設定されていた。

何より豊作の鍬でつくった畑で作物を植えれば一日で実がなるのである。

今ジョウロで水遣りをしているがだいたい終わった。

ぐんぐんと巨大化していくのであった。

それを眺めながら次々と収穫ボックスに入れていく。

大体の収穫は。

キャベツ二百個

大根五百個

サツマイモ五十個

玉ねぎ百個。

収穫ボックスはだいたい千個の収穫物を入れることができる。

俺はその収穫ボックスを背中にしよって家のワープを使い近くの

町にとたどりついたのであった。

ここは地球のタリユウの里である。

ここには刀を使うプレイヤーが多くやってくる。刀鍛冶で有名な人がいるのだがその人に関しては今度紹介しよう。俺はアメリカ人の商人の下にと向かった。

ちょっと大きめの屋台にがたいのいい金髪の男がいた。彼がこちらを見るなり微笑んだ。

「よおシンベイじゃないか今日も食料か？」

「そうだよ、この中身見て確認してよ」

「分かったぜ」

背中から収穫ボックスを取り出し彼に渡すと彼が収穫ボックスに顔を突っ込んで調べる。だいたいの値段を産出する。

「だいたいこれくらいだと十万ゴールドだな」

「それでいいよ」

「買ったぜ」

収穫ボックスから取り出して商品を商品台に並べていく入りきれなかったやつは彼の倉庫にしまっているようだ。倉庫ボックスとは冷凍庫のように保管ができるアイテムであり食材などをいためないのに使われる。だいたい十万個くらい入るレアアイテムである。

「今日は戦争だなお前参加するの？」

「うん参加するよ」

「そうか気をつけるよ地球を守るんだろ？ 天界騎士団から」

「そうだよ幼馴染だけどあいつに負けたくない」

「だからって無所属で守る必要はなかるうに確かに地球の水晶軍団は弱いけどさ、ちよつとは考えたらどうだ？」

「でも誰かのしたにつくのはいやだ。俺独自に動く」

「かー、まったくこりや駄目だな」

「セイコブは参加しないの？」

「俺かここで商売するだけだぜ？」

「そうか君は商売人だもんね」

「そうだぜこれでも儲けまくってるんだからなまた売るもんあったらこいよ」

「そうするよ」

俺はそこから立ち去るとタリユウの里のワープポイントに向かっていた。そこでワープして家に収穫ボックスを置きたまたワープした。水晶軍団の基地にたどり着いた。

ざっと見ただけでも数万人は揃っているだろう巨大な城があり地球の城である。まるでクリスタルのように出来ていて宝石のようにも見える。

昔、水晶軍団のギルドマスターに案内されて展望台を眺めたがすごい景色であった。ギルドに入れと口説かれたが謝って辞退した。

水晶軍団とも交流があるが問題は天界騎士団である。あそこにはいき幼馴染がいる。自分の告白を忘れて今は普通にばりばり闘っている。

中学生の頃に告白してふられもしないで無視された経歴であったが。今は無視しよう。

俺はというとその場所に向かい水晶軍団の演説に聞き入っていた。

「我ら地球を守る軍団たちよ立ち上がれ、天界騎士団に負けるな
れ作戦はいつもどおりだ。真ん中に砦をつくる。そこで防衛する
からほかはよろしくなソロで参加するやつらは奇襲を頼む」

それで演説が終わった。顔すら見えなかった。

基本的に戦争で死ねば近くの蘇生ポイントで生き返る。ペナル
ティーは全ステータスの低下である。

だから俺は一回負けたら退いている。

太陽が上りつめているなかようやく空に架け橋が見えてきた。そ
れが城に接続した。がちやりと音がなってそこから無重力がスター
トする。基本的に地面に足をつけないと壁は走れない。

俺は走った。城に入る。

ゴングが鳴った。

みんなが慌てて走る。俺は城の階段を登り走りまくる。屋上に出
るとクリスタルの城を眺めながら思いつきり壁に向かって走る。垂
直の壁を走っている。そのまま架け橋にたどりつきそこを走ってい
るプレイヤーたちが沢山走るなか自分は背中から相棒の鍬を抜き取
る。早速、土星の属性を使って砦の建設を始めている。

基本的に属性は星占い屋で変えることが出来る。

属性によって使える属性技が違うのだがそれを発見するのがプレ
イヤーたちの宿命でありその情報のやりとりで金儲けするプレ
イヤーもいるのである。

その中で一番すごいのは土星の技であり無から土を生み出し土を
砦に変えるという技である。確か使用には。

シシオウドリを五百匹倒さなくちゃ駄目だった気がする。持つのは二時間と聞いている。戦争は大体一時間で終わる。

俺は片っ端からすれ違う人に鍬を振り下ろす。頭上に地球のマークが付いていない人物は敵である。敵を倒すのじゃああ。俺は叫びながら鍬を振り下ろした。

一人の頭上を潰してポリゴンの欠片になって消失した。一人チエスト！！

隣を見た。にやりと笑う。男がいた。だが無視しよう。

鍬で倒すのみこれぞ俺が強い理由である。

走っていたのだが。周りから人氣がなくなった。垂直に入るのは気持ち悪い反対側を走っているようである。ということは。

頭上を見た。そこから弓矢が一斉に放たれた。

甘いぜ？ 俺はそんな簡単に死なん。

「水撒きじゃあああ」

鍬から放出される水の大量のごとく矢のスピードが落ちて落下していった。俺はそれでも走る。アーチャー部隊かふんこそくな農奴に勝てるとおもってかあああ。

俺は走りながらただ。片っ端から悲鳴をあげる。女性アーチャーを仕留めていった。後ろを振り返った。歓声が聞こえる。

『あいつは着たぞ伝説の農民だああああ』

水晶軍団の掛け声とともに生きる伝説の農民が動き出した。

走れ、俺は闘う農民だ。

敵兵を発見いまだに上昇を続ける。天王星まではるかにとおいしい敵を見つけた。砦が出来ているしまった。

空から弓矢が飛んできた。魔法の効果をおびているためにとてつもない威力である。ついに俺は死んだのであった。

1話 STARWORLDONLINE開幕（後書き）

拙い文章ですがよろしくお願いします。

2話 神様からの挑戦（前書き）

ゆっくりと更新すると思いますのでよろしくお願いします。

句読点を直しました。

2011/10/22さらに修正しました

2話 神様からの挑戦

俺は戦争を終えて一人寂しく自宅に戻った。さすがに砦から矢は受け切れない。天王星の属性を付与された魔法ならさらに無理である。

今回は地球の敗北に終わった。次の戦争に期待するのみである。

まだ。十二時まで時間があるので外に出た。

風が気持ちいい。何を探そうか？ というわけでもなくそろそろスキルを習得する必要がある。モンスターを狩っていこう、ということ森の中をゆったりと歩いていた。

モンスターがいないかなーと探していると一匹、二匹とラットが現れた。

鋏を引き抜いて振り落とす。何度も叩きつけるとラットは動かなくなつた。毛皮を剥ぎ取るとアイテムボックスにしまった。

うーむまだ足りないな。

このラットの肉を餌にして敵をおびき寄せることにした。しばらく待つこと一時間ホワイトタイガーの五匹の群れがやってきた。一回分のスキルである。だが、敵を甘く見てはいけない。

冷静になりながら気配を消してホワイトタイガーがラットの肉をかぶりついた瞬間。躍りかかった。鋏を振り落とす。タイガーの脳を砕くように粉碎する。あまりの衝撃でポリゴン片となって消滅した。

忘れていた。即死させると材料を残さずに消滅するのである。

残りの四体を値踏みして構える。タイガーがかじりついた。右腕が悲鳴をあげる。それを振り落として何度も鍬で叩きつける。そのうち動かなくなった。

そして鍬を振りまわし三体を牽制する。

ジャンプして一体に近づき鍬を連打で叩きつける。また動かなくなった。

もう二体である。

甘く見るなよ、これでも鍬の達人なのだ。

敵が近づいてくる。冷静になれ。クールになれ。そして敵が目の前に着たとき俺の頭は吹っ飛んだ。

勢いつけて鍬を振り下ろす。タイガーが悲鳴をあげて動かなくなる。もう一体にも同じようにして止めをさす。

一撃で仕留めないように気をつける。
五体のホワイトタイガーを仕留めた。

ステータスを確認する。

ラット百匹 水撒き。 六日分

ブラックバッド二十匹 防御力百アップ継続 二週間後に消える。

ホワイトタイガー五匹 攻撃力二百アップ継続 一週間後に消える。

レザーマン二百匹 水属性付与 三日後に消える。

ホワイタイガー五匹 攻撃力二百アップ継続 十日後に消える。

ラット二匹 まだ能力未定。

という感じである。

その数に達しないと能力が未定と表示されるのである。

俺はホワイタイガーの毛皮を取るとアイテムボックスにしまった。

ゆっくりと歩くこと二分でエレファンを見つけた。それも十頭の群れである。確かどんな能力だったか思い出せない。

だが、倒すに限るが象みたいな大きさである。

確か草食モンスターだからすぐに逃げるはずである。よく考えて闘わねばならない一匹だけ子どもがいる。

ということは、母性本能を利用させてもらおうか。

俺は鍬をかついでまた近づく子どもめがけてジェストー！。

動かなくなったエレファン俺はそこに近づき素材は何があるか確かめたが何もとれないみたいである。

子どもの死に気付いた親たちはいきなり襲い掛かってきた。

やはり仲間意識は強かったか。

俺は右に左に避けながら、
エレファンをいなして鍬を掲げる。

「うおりゃ」

叩きつける。はじかれる。くそ強いな。

レザーマンの水属性付与を使う。
鍬の周りに水がまとわりつくとエレファンに向かって叩き落した。
つるつとすべったかとおもうとそのまま直撃した。

すべることによって威力があがる。

エレファンが動かなくなった。

放っておいて残りの八頭を見据える。なんだか強いなこいつら。
エレファンが一匹ずつ突進してくる。

俺はそれを避けながら。何度も精神を集中させていた。

俺はいろんな戦場で名をはせている。こういった。危険な戦いにもなれている。何よりも、この鍬を手に入れたのがその証拠である。

俺は跳躍すると鍬を叩き落した。一匹のエレファンがポリゴン片になって消滅する。クリティカルヒットのようだ。
もういっちょ。

エレファンに叩きつけて何度もやると動かなくなった。
右によけてまたエレファンに叩きつける。
またまたたたきつける。

残り五体になっていた。

彼らもバカじゃない強い敵に何度もはむかって勝てると思わないだろう。

だが子どもを殺された怒りがある。そう簡単に退かないだろう。俺はやつらと向かい合って殺気をみなぎらせる。

そして鋏を片手に跳躍した。

着地したとき二体のエレファンが消滅していた。

一撃が強かったか？

残りの三体に向かって鋏を振り下ろす。まずは一匹叩き伏せる。

倒れた。次は意外と強かった。ボスだったのか？ 何度もはむかってくる。そして、ようやくしとめた。

最後まで同じように仕留めるとぜいぜいと息をあらげて疲れ果てていた。

なんという強さだろうか疲れもリアルである。

俺はステータス表を確かめた。

ラット百匹 水撒き。 六日分

ブラックバッド二十匹 防御力百アップ継続 二週間後に消える。

ホワイトタイガー五匹 攻撃力二百アップ継続 一週間後に消える。

レザーマン二百匹 水属性付与 三日後に消える。

ホワイトタイガー五匹 攻撃力二百アップ継続 十日後に消える。

ラット二匹 まだ能力未定。

エレファン五匹 水鉄砲 百回分。

エレファン五匹 水鉄砲 百回分。

なんか不思議な力を授かった。

俺は今日の狩りは終わりにした。エレファンからは材料は取れない。

ということで放置し家に戻った。モンスターの死骸は二時間たつとポリゴン片になって消滅するのである。

家の中の椅子に座ってぼうつとしてお茶をいれてゆっくりと味わっていた。この世界での食べ物はある種の娯楽にすぎないのである。

だがそれでも俺は満足していた。

そういえば作物の種を買うのを忘れていた。

俺は立ち上がってワープがある場所に立ってワープした。

タリユウの里で俺は周りを確かめながらセイコブのお店にと向かった。まだ閉店していなかった。もう夜中の十一時であるが。

俺はセイコブのところに向かって微笑んだ。

「ご活躍は聞いたぜ無残に死亡したんだってな」

「ごらんの通り死亡したぜそれで作物の種ってあるか？」

「あるぜさっき土星属性で作物を種に戻してくれるやつに頼んだか

らな」

そうである。土星属性で作物を種に戻す魔法があるのである。例えば大根一個で種に戻すと十個になるのだ。

「じゃあ大根百個、サツマイモ百個、キャベツ百個、玉ねぎ百個、そして白菜百個頼むよ」

「あいよ五千ゴールドになるぜ」

「あいさ」

俺は財布から沢山つまった札束の中から金を抜き取ると彼に渡した。彼が大量の種を倉庫から取り出すと俺はアイテムボックスにしまったのであった。

そして今日も疲れたからここでログアウトしようとしたとき異変に気付いた。

「おいログアウトできないぞ」

「んだって？」

「だってログアウトがなくなってる」

「本当だどうなっていやがるGMに聞こうぜ」

俺はGMに連絡を取ろうとして異変に気付いた。空が輝いたのである。宇宙があまりの光にスパークした。空自体に液晶が浮かんだ。そこにはカウントが表示されていた。

――一億二千五百人――

この数字を見ていまこのゲームに取り残されている人だと悟った。そして巨大な声があたりを支配した。

『きらびやかな星に集う若人たちよこの世界はジャックさせてもらったふはははは残念だなわしは神様じゃお主たちに修行を与えようこの世界で死んだ者には本当の死を生きるものには本当の生を忘れられた星冥王星に住んでいる。わしを倒したらこの世界の君たちを解放しよう』

そしてその連絡は途絶えた。

いきなりの出来事にあたりがパニックになる。

どういうことだ？

さっぱり理解できなかった。本当に死ぬのか？

神様がこの世界をジャックしただって？

リアルの体はどうなってる？

色んなことが脳裏をかすめた。

そして俺は隣の商人を見つめた。

「参ったな俺家に嫁さんいるんだよ」

そこかよ俺は声にならない悲鳴をあげたかった。廃ゲーマーにはなりたくなかった。なのにこんなゲームの世界で暮らすなんて。あの意味最悪であった。

だけど心のどこかで喜んでいる自分がいた。

俺はセイコブと別れをつけてワープポイントで自宅に戻った。

何事もなかったように畑を鍬で耕しそして種を植えたのであった。やっぱりこれからは食材が大事だろうな？

そんなのほほんとしたことを考えていたのであった。

それから、一週間が経った。

相変わらずログアウトできなかった。そして何よりも俺は死を恐れて狩りにもいかなかった。毎日畑で作物を耕しそして食っていた。おなかはもちろん減った。減ったら食うしかなかった。けどたまには狩りにはいくしかなかった。

何よりもセイコブの商売は繁盛していた。どうやらタリユウの里に引きこもったプレイヤーが沢山いるらしくみんなおなが減っているとのことのために俺は沢山の野菜を植えている。

今では完全にタリユウの里の生命線になっていた。

俺はタリユウの里で農場を開いて数名の人を雇い沢山の農作物や果樹園を作った。なぜかNPCは本当の人間のように考えて発言するのである。

お金はセイコブが出してくれた。俺は数十名の農民プレイヤーを雇って畑にいそしむのであった。今は自宅には畑はあるが植えていない。こっちで生活したほうが安心であった。NPCには随時農作物を与えることによって無料で宿屋に泊まらせてくれた。

十名の農民プレイヤーたちは一生懸命に畑を支えていた。
俺もその人であった。

いつしか俺たちはこのタリユウの里の完全なる生命線となっていた。

「ブロッコお前一人立ちできるんじゃないか？」

俺が尋ねたその人はまだ少年であり火星属性の若者であった。彼は赤い髪をしている。まだ痩せているが。何よりも印象的なのはその発言力と農民の力である。

俺がいなかったのために葉っぱを燃やして肥料にするという案を出したのが彼であった。

「そうですねだけどまだまだです。シンベイさんに教わる必要があります」と

「まあ、ないんだけどね」

「いやあると思います。シンベイさんはすごいですよ」
「そうか？」

そうだ近況としての報告、戦争に参加する人は極端に減った。死ぬつもりがないために今ではNPCが戦争をしている。なんだかおそろしい状態になっている。

そもそも冥王星にどうやって行くのかすらもまだ分かっていないためプレイヤーたちはのほほんと引きこもっている。スキルが使えなくなったら集団で狩りに向かう。

集団で倒したらちゃんと一人一匹とカウントされるため。パーティーを組む利点はある。

俺もたまにそういったパーティーに参加している。

俺が最低限倒さなくてはならないのはラットである。これはたまにタリユウの里の地下倉庫に大量出現するので片端から倒す。そのときにNPCから金をもらえるので一石二鳥である。

俺が八つの星があるのに地球に固執するのは単なる気まぐれである別にべつな星でもいいのだがやはり住み慣れた場所がよいほかの星だと色々と天候が違うのだとか。

現在タリユウの里の人口は一万人であった。未だに上昇を告げていた。

2話 神様からの挑戦（後書き）

ついに神様からデスゲーム開始が告げられました。一億二千五百人がどのくらい減るのか、ちよつとドキドキです。

3話 レッドプレイヤー（前書き）

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。感謝しています。これから書き続けるのでどうか遠い場所から眺めてください。天国ではありませんよ！

句読点を直しました。本当に読みづらかった。書いていて気づけなかったのは修行不足でした。

3話 レッドプレイヤー

ここでレッドプレイヤーについて紹介したいと思う彼らは人を平気で殺す。それもデスゲーム開始してから平気で殺している。なぜなら酒場の壁にレッドプレイヤーが懸賞金をかけられて張られているのである。しかも顔写真付きで。

その中でも飛びぬけて危険とされているのは。

―血のスズメ―である。彼は今のところ現在進行形で百人近くの人を殺しアイテムを回収している。そのことからプレイヤーたちが危険視して隠れて顔写真を取って酒場に懸賞金をかけたのである。

カメラはスキルとして使われる。主に、海王星の属性である。水を利用したレンズなのだから。

そのことから俺もレッドプレイヤーの危険性については知っていた。

今そろそろ水撒きも切れるので酒場でパーティーメンバーを募っていた。

その中に一際目立つ。男と女が二人いた。

二人ともお酒を飲み豪快に笑っている。

一人の名前を。

―サファイア―である。こちらは丈夫そうな胸板に分厚い鎧を身につけている。どうやら戦士職のようである。このゲームにも職があり、選べる。俺は基本選んでいないがサブ色に農家を選んでいる。

職はクエストをクリアしないと身につけないものである。戦士職は意外と難しいクエストだったと記憶している。一方で女性のほう

はという。

「フルーである。こちらは踊り子職のようである。踊り子は基本踊って周りのプレイヤーのステータスを上昇させる。薄着なために胸がうつすらと見えそうなのはおあいにくだけど見えないのがいいところである。」

俺は二人にかけよった。

「あのう、パーティー組みませんか？」

するとサファイガにやりと微笑んだ。

「いいぜ何を狩るんだ？ スキル覚えたいんだろ？」

「できれば大量にラットを狩りたいんです」

「なるほどなお前サブ職に農民を選んではるだろしかも水星属性だ」

「はい」

「ちょうど腹ごしらえも終わったことだしフル行こうぜ」

「あいよ」

二人と一緒にあってパーティー勧誘を受け俺は受諾した。

その後俺たちはダンジョンに向かうことになった。

まずはタリユウの里から外に出る。崖のような縁取りはある意味危険である。架け橋を渡るとしばらく歩く森にたどり着いた。森の中をゆつくりと進みモンスターが出ない街道を歩いた。しばらくすると大きな祠が見えてきた。入り口には情報屋が貼ったのか情報がぎっしりと記されていた。

「海里の祠——出現モンスター——ラット、ブラックバッド、マミーマン、ブルースネーク、ボスモンスター、伝説のグール。」

こんなところである。俺はラットが狩りたいからここにくることは大歓迎であるのだが。

「ここってレッドプレイヤーが発見されたところですよね」

「そうだぜもし血のスズメがいたら懸賞金を取るうとおもってないだろ」

「いいですけど死にますよ？」

「俺たちを甘く見ないでほしいよそれに今日いるとは限ってないだろう？」

「そうですな確かにもしいてもかかわらないようにしましょう」

「それは駄目よ私は彼に友達を殺されたのよ」

「ですけど俺たちだって命危ないですよ？」

「大丈夫よサファイアがいるからね」

「そうですけど」

駄目だこの人たち自分に酔っている。レッドプレイヤーが現れたら早速逃げようと決めていた。

そして俺たちは祠の中に入ることにした。ゆつくりと扉をあけて中の空洞を歩くこと二分でラットが五匹出現した。俺たちは片端から切り崩した。俺は鍬で何度も叩き潰した。毛皮を剥ぎ取って皆、後で換金することになった。今は俺が預かることになった。

どうやらアイテムボックスを持っていないようである。小さなミニアイテムボックスをサファイアとフルは持っていた。一応アイテムボックスも中級のレアアイテムである。

俺はというとほとんど歩き右回りになった。道を回り。そこでマミーマン五匹と鉢合わせした。俺は鍬を握り締めて包帯人間にタックルした。そのまま鍬で何度もたたきつけた。命がけである。死んだら終わり。

俺は必至な形相で何度も叩きつけ動かなくなると次に目標を定め

た。バトルアックスを握り締めているサファイがひたすら斬りかかり一撃で粉碎していた。フルは何度も躍っていた。みんなのステータスが上昇している。

素材は包帯であった。

しばらく歩くと広間に出た。俺たちはそこで各自持参しているドリンクを飲み干した。俺はトマトジュースである。彼らは料理人が一生懸命に発見したスポーツドリンクを飲んでいた。

俺はなんで彼等がこんなに強いのか疑問に思っていた。

「なんで君たちはこんなに強いのにこんなタリユウの里にいるんだい？」

「それはな？」

するとサファイが暗い目をした。

「俺は友達を血のスズメに殺されたその復讐のために星を渡ってここまで着た。あいつは、俺たちのいやリールを殺した。許せないあんな外道なやつは」

サファイが手を握り締めていた。リールとはフルとも友達だったのだろう。

「レッドプレイヤーは基本的に街に入る事だつてできる。街に待ち伏せして殺すことだつて出来るんじゃない？」

「それも考えたさだがあいつはぬかりなかった。大抵は野外のワイプポイントで済ましている。しかも星を渡って片端から人を殺してそこから食料を得ている」

「すげーななんか考えられない」

「俺も最初は疑ったさだがなああいつはそうやって金をもつける。闇

ギルドに売りさばいてるんだよ闇ギルドは知ってるよな?」

闇ギルドそれはレッドプレイヤーの盗品を売りさばくことである。基本的に盗品は売れない。だが闇ギルドでは売ることが出来る。しかも闇ギルドは殺人の依頼をすることがある。今分かっている闇ギルドは。

――鉄格子の鬼――である。彼らはレッドプレイヤーではないが一応プレイヤーである。商売に長けている。彼らの居場所は今のところ分かっていない。

そして何よりも血のスズメは危険である。

「だからもし血のスズメが着たらお前は逃げる俺たちでなんとかする」

「そうさせてもらいますよ」

「私もそう願いたい生き残るかなんて分からないのだから」

「はい」

フルが不敵に笑った。その後、さらに奥に向かった。

奥のほうになると敵も強くなってきた。ブルースネークが十匹くらい出てきてわコンビネーションでひたすら叩き潰した。右に避けでは左に避ける。唐突に鍬を振り落とす。がちんと音がなつてブルースネークが消滅する。クリティカルヒットのようである。俺は鍬を握り締めて次なる獲物を見定め躍りかかる。次なる獲物が動かなくなるとまた次と見定める。体中が沸騰するように熱かった。息が苦しかった。

どうやら毒に犯されたようである。右腕を見ると傷のエフェクトが光っていた。

俺はアイテムボックスから毒けしを取ると、飲み下した。

一気に毒が引いていく。

まだまだ奥に向かった。敵を探すようにして奥に入るとラットが五十匹いた。フルが悲鳴をあげたが。ひたすら俺とサファイはバトルアックスと俺は鍬で攻撃していった。敵が減っていく中体中から闘志が芽生えてきた。これこそ戦士だ。いや農民だけだね。

戦士職のサファイは悠然とひたすら斧でラットを倒していた。そういえばブルースネークから鱗が取れていた。

俺はラットを一通り片付けると毛皮を剥ぎ取った。

そして俺はラットの死骸を眺めながらさらに奥のほうを見定めた。ほんのりと光が輝いている。この祠の中は壁の光によって見えな
いということはない。ちゃんと見えるようになっていく。

何よりも奥のほうからすごい気配を感じる。いや威圧であろうか。

俺たちはただひたすら前へと進みようやくたどり着いた。

そこには巨大なグールがいた。

俺たちは息を潜めた。

「フル踊りを頼む」

サファイが冷静に告げるとフルがひっそりと躍り始めた。

攻撃力防御力がアップした。

そして俺とサファイが敵の近くに着たとき敵が踊りかかってきた。俺は鍬を握り締めてグールの猛烈な打鍵をガードした。その隙に。

「いけサファイ」

「おう」

サファイがバトルアックスでグールの脳天を打ち砕くそれでもヒットポイントは残っているらしくいまだに突っ立っている。

俺は距離を開けると鍬を振り落とした。確かな手ごたえがあるが。やはり、効果がないようである。

俺は冷静になりながら敵を見定める。
試してみるか？

俺はアイテムボックスから聖水を抜き取るとそこにぶちになった。いきなりのアクシデントにグールが悲鳴をあげた。ぶすぶすと炎をあげながらのたうちまわっている。

「いまだサファイ」
「任せろ」

サファイがバトルアックスで叩き潰す。俺もそれに加わって袋叩にする。しばらくすると動かなくなった。ポリゴン片になって消滅するとそこには一本の剣が置いてあった。

拾ってみて確かめると。

――聖なる剣――

「これは？」
「レアアイテムだな前が持ってる後でオークションしてみんなで分配するぞ」
「あいよ」

俺はアイテムボックスに聖なる剣をしまった。

俺たちは着た道を戻った。

途中で四十五匹のラットとブラックバットを二十匹倒した。安心したのはブルースネークがでなかったことである。

現在のスキルは。

ラット百匹 水撒き。 一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続十日後に消える

ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続十日後に消える

ブラックバッド二十匹 防御力百アップ 継続十日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 百回分

エレファン五匹 水鉄砲 百回分

ホワイタイガー五匹 攻撃力二百アップ 継続 二日後に消える。

グール一匹 火星属性耐性二ヶ月分。

グールにいたってはすごいことになっていた。

そしてようやく祠からでようとした。まさにその時異変に気付いた。

祠の前で誰かが待ち伏せしているのである。

俺は寒気を覚えた。だが、サファイはにやりと笑った。

そして俺は隠れているといわれた。俺は、祠の入り口の隙間から眺めながらサファイとフルが出て行くのを見ていた。

そこには真っ赤なローブを身につけた。名前がスズメの男がいた。長身であり何よりも目が黒かった。髪の毛は長髪であり髭はなかった。まだ少年と言ってもいいほどである。

彼がこちらを見て笑った。俺には気付いていないようである。

サファイとフルを見てやはり笑うのであった。

「あんたらかまあいい死んでもらうあんたらで今日の獲物は終了にしよう」

「そうしてくれ今度こそお前を殺すリールを殺したことを忘れたとは言わせないぞ」

「は、あんな餓鬼を殺したくらいで何怒ってんだよこれはゲームなんだよ」

「ゲームじゃないわこれは真実にデスゲームよ」

「なら死んだんだろそれで終わりじゃないか」

「終わりじゃねー」

「あんたが死んで終わりよ」

サファイがバトルアックスを引き抜くと一方でスズメも二本の刀を引き抜いた。あの刀は、タリユウの里でしか作られていないものである。有名な鍛冶職人が作ったやつだろう。なんで、あの人はこんな人に売ったんだろうか？

スズメが跳躍した。一本の刀を振り落としよう一本でガードしている。

バトルアックスがぶつかった。火花がちる。右肩を斬られた。サファイは平気そうにしてバトルアックスを力任せに振り落とした。刀でガードしきれずに後ろに跳躍する。

サファイが追いかける。

スズメが笑った。

フールが躍っている。

そして刀を投げた。フールの胸に突き刺さった。フールが悲鳴をあげた。まだ生きている。

フルが刀を抜いて地面においた。だが、刀が糸のようにたぐりよせられスズメの元に戻る。

「貴様なぜフルを狙った」

「ジャマなんだよ」

「お前のほうがジャマだお前のせいでリールは死んだ。お前のせいでなここでお前が死なないと俺たちの願いが叶わないんだよ」

「あっそうじゃあ死んでください」

するとスズメがにやりと笑って刀に火属性をまわりつかせた。

あれは火星属性である。

ということはスズメは火星属性なのだろう。

スズメが刀を振り下ろした。そこには、バトルアックスを構えた。サファイがいて、はじくとサファイが一歩進みスズメの顔面に向かって振り下ろした。

だがバトルアックスが目標を捕らえることなくサファイの右腕が消滅した。バトルアックスも原型を溶かしている。

なんといつてもあれは火星属性のマグマのようだ。

つまり、普通の武器では相手にならない。

右腕が消滅し状態でエフェクト光を乱射しながらサファイが悲鳴をあげている。

フルが悲鳴をあげる。刀がまた投げられ、マグマの剣がフルの心臓を突き破った。フルがエフェクトとポリゴン片を撒き散らして消滅した。

そして、サファイが、涙を流しながら、叫んでいた。

「貴様まああああ」

「じゃあ、さよなら」

ばごとマグマの刀でサファイの脳天を突き破るとサファイは消滅した。

スズメはにやりと笑ってとほとと Dropdown アイテムを拾っていた。俺は震えていた。こんな滅茶苦茶に強いやつには勝てない。頼むから祠には入るな頼む。心のどこかで祈っていた。

「あーあまたレッドドラゴンを五匹殺さなくちゃならないよマグマは使いたくなかったけどな」

彼が笑いながら立ち去った。そして、俺は三時間くらいここに立っていた。そして、ようやくスズメがいないことを確かめて外に出震える足で走った。猛烈に走ってタリユウの里が見えた。タリユウの里に入ると早速震えながら宿屋の中に入って鍵をしめ閉じこもった。涙が止まらない震えも止まらないこのとき初めて自分ほもっと強くなるうと決意したのであった。

3話 レッドプレイヤー（後書き）

ついに最初の犠牲者が出ました。設定ではスズメの弱点は主人公なのかもしれませんが、永久のライバルかもしれません、主人公が成長するのを見守ってあげてください。拙い文章ですが努力して参ります。

4話 修業を始めました（前書き）

ここで魔法スキルの説明が入ります。スズメが使っていたのは上級のようです。

句読点を直しました。

4話 修業を始めました

俺はあれから色々と考えた。レッドプレイヤーを倒すにはどうしたらいいかということで沢山のことを思案したと思う。まずは畑仕事をしながらブロッコと雑談にふけったりそんなもって朝早く素振りをした。

材料はセイコブに大体二万ゴールドで売れた。聖なる剣は武器として使おうと思ったので取っておいてある。サファイとフルの選別だと思った。

何より彼らのことを忘れない思い出として取っておこうと決めたのである。

俺は空気をすいながら畑仕事にいそしむ。収穫物はセイコブに売るがそのセイコブからプレイヤーたちが買っていたりNPCが買っていたのである。最近になってわかったことはNPCも購入することであるまるで生き物のように。

俺は昼休みの時に昨日の出来事を振り返った。あまりにも沢山のことがおきすぎて処理できないでいたが。今ならなんとなく見えるものがある。火星属性のあいつと太刀打ちできるのは水星属性の俺だけである。サファイとフルがなぜ属性を使わなかったのか？

たぶん、土星属性だったのだろう、ステータス向上に向けていて魔法とかは使わなかったのである。フルは踊りにスキルを使っていたのだろうしフルにいたっては何属性かは分からなかった。

俺は水星属性であることを生かす必要が生じた。

だから昼休みの時に商店街に出て行った。

俺はあたりを確認しながら情報屋のショップに入った。

そこには壮年を超える老人が一人で座っていた。

このゲームはリアル顔とそっくりなため性別を偽ることもできないのである。よって老人がこのゲームをやったら正確に老人になるのであった。

だから目の前のセイハツ老人がこちらを睨み何かを探るようにこちらをじーっと見つめる。

「何の用じゃ」

「えっと水星属性の攻撃技スキルの情報誌がほしいです」

「ふんそこにある一冊二万ゴールドじゃぞ」

「はい買います」

「お主昔は農作物スキルを買っていったな、あとはステータス向上のやつばかりなぜ攻撃技に固執する？」

老人がこちらを睨みながら何かを値踏みするようにたずねた。

「大切な者を見つけたらそれを絶対に守るそういったものがほしかったんです」

「ふん面白い、いいじゃろうこのセイハツお主に直伝してやろうわしも水星属性じゃて」

「本当ですか？」

「本当じゃてそれで攻撃なら何か覚えてるのないか？ 水鉄砲とか」

「ああ、ありますよエレファンを倒したときに授かりました」

「それが初歩じゃそれと水星に行くことをお勧めするよあそこには沢山の水星属性の攻撃スキルを覚えさせてくれるモンスターが生息している。野腹だけでも宝の山じゃて」

「なるほどまずは水鉄砲から教わってもいいですか？」

「いいじゃろうほれだせ」

「何を？」

「だから二万ゴールドと一万ゴールドじゃただで直伝するわけには
いかんぞ」

「分かりました」

三万ゴールドを渡して一冊の情報誌を渡される。分厚い本であった。ぱらりとめくると沢山の水星属性の攻撃スキルと習得するモンスターもかかれてあった。

俺は老人につきあつて情報屋ショップの裏手の庭に出た。そこには、的が沢山あった。

俺はセイハツ老人を眺めた。

セイハツ老人が剣を抜き取るとロープがはらりと揺れた。

セイハツ老人の剣から水がしたたり鉄砲のごとくスピードで発射されると的を射抜いた。

それですら驚きなのにセイハツ老人は剣を地面に置くと掌五本をつかつて五連射したのである。まるで早打ちガンマンのようである。

「まずはこれを受けて大丈夫だというプレイヤーはいないだろうな
これはショットガン級の威力じゃそれも確かめる方法はないが元軍
人のわしが言うのだから正確じゃろう」

「これはすごいこれが初級？」

「お主バカか？　ほかの属性も初級はこれほど強いぞ」

「はい」

「まずはそこがわかつたらんな中級になると、精霊級のモンスター
を倒さなくちゃならない上級だとドラゴンだとか怪獣だな超上級だ
とボスモンスターだぞ」

「でもボスモンスターの伝説のグールを倒したとき火星属性耐性しかもらせませんでした」

するとセイハツ老人はこいつバカだろうというしぐさをして馬鹿笑いだした。

「その耐性がとてつもない防御力なんじゃよお主単なるちょっとした防御力だとおもってないか？」

「いえ」

「じゃあ試そう今松明をもってくる」

しばらくしてセイハツ老人が松明に火をつけてもって着た。いきなりそれを顔面に押し当てたのである。あまりの出来事に悲鳴をあげたのだが。痛みすらダメージすらなかった。

「これが耐性じゃ」

「無敵じゃないですか」

「そうじゃだからボスモンスター級なんじゃぞ」

「なるほどでもマグマとかなら食らいますよね？」

「もちろん食らうがダメージは減るぞ」

「なるほどなんかまだまだ俺って初心者です」

「初心に帰るのが大事じゃぞそしてわしの中級を見せてやろう」

「はい」

「この名前はな霰球じゃ」

「霰球ですか？」

「そうじゃ見ておれ」

すると老人が巨大な岩を指差した。そして、そこに向かって指を振るった。

空気が塊だした。霰の塊が大きくなり岩に向かっていった。掌サイズの霰球が岩にぶち当たった。岩が粉々に砕け散った。それで終わるならまだしも霰の破片が地面に張り付きしばらくすると氷だした。岩が空中で固まっている。

「これが中級の攻撃魔法じゃ」

「なんたる豪快すごいです」

「これを覚えるにはセイレールを狩らねばならんこれは中級の中で弱いぞして水星にいくのか？ 行かないのか？」

「出来れば地球で暮らしたいのですが」

「駄目じゃお主には希望がある。だれか、ここの畑を任せられる人はいないのか？」

「お爺さん知ってたんですか？」

「バカにするなタリユウの里の生命線がお主たちということはもちろん知っておる」

「はいブロッコに聞いてみます」

「そうせよわしも同行しようそろそろわしも弟子に独り立ちさせるときじゃお主わしが同行してもいいじゃろう？ この大賢者職のセイハツが同行する」

やはり大賢者か大賢者は自分の職業を他人に隠すことが出来るしかも俺から彼を見て分かったことは単なる。商人としかサブ職が表示されていなかった。

まったく無茶苦茶だ。だけど確かな手ごたえがあった。

明日に出発する約束をして俺は畑に戻った。一冊の本はアイテムボックスにしまっておいた。

俺は畑作業をしながら数十人の部下を引き連れてみんなに告げた。

「みんなすまない俺は、ちょっと水星にいつてくるだからブロックを筆頭にして畑作業を頼みたい」

「何いつてるんですか親方ちょっとくらいはめはずしてくださいよここは任せてください」

一人の若者が笑いながら告げた。

ブロックが下を見ながら。

「そうですここは任せてくださいもし何かあったらテレパシーで送るので」

このゲームには友達登録をすればテレパシーで情報のやり取りができるのである。

「数日に一度は俺に連絡してくれブロック頼むぞ畑は生き物だ」

「はい」

「そして畑には地力が必要だ。分かっているだろうが俺がいないぶん水撒きと豊作の鍬がなくなる。だからお前たちは自力で地力をつけなくちゃならない」

「それですが前から試したかったものをやってもいいでしょうか？」

「なんだ？」

「NPCの家畜の糞尿を畑に混ぜるのです。落ち葉を燃やしたくらいじゃ足りないと思って」

「それは俺も知っている、やってみ」

「はい」

「ブロックほかにはないか？」

「後は命を大事にしてください噂は聞きました。サファイとフルが死んだってシンベイさんは責任感が強いからなにか罪悪感を抱く

んじゃないかって思っていました。だって、目の前で殺されたんでしよう?」

すると俺は苦笑した。

「そうだな罪悪感かちよつと違うな俺はこのまま弱いままじゃ駄目だって気付いたんだ。のほほんと暮らすのはいいかもしれないがな? もしも大切な人が現れてそれを守れないようなやつにはなりたくない」

ブロッコがこちらを見て、微笑んだ。

「その意気です。がんばってください」

「それとその情報はどこから出ていた?」

「どこって宿屋ですよ」

「そうだったな」

宿屋のおばちゃんには説明していたのである。俺が泣き続けている理由を情報収集にNPCというのも考えねばならないようである。もうゲームだけの話だけではなくNPCはちゃんとした人間なのだと。

俺は畑仕事を終えて宿屋に向かった。宿屋でおばちゃんに明日でていくことを告げると、めいっばい悲しんでくれた。

俺は途方にくれながら微笑んだ。

その後に眠った。深い眠りだと思つ目が覚めたら真っ先に情報シヨップに向かった。

入り口で老人がほくそ笑んでいた。

そして、俺は老人に連れられて有名な鍛冶職人の場所に向かった。

「なるほどな聖なる剣があるのかわしからの選別として随時水属性付与能力をつけさせてやる材料はウンディーネの皮だ一匹で数十万ゴールドする借りじゃない老人からの手向けじゃ」

俺は感謝を述べておいた。

有名な鍛冶職人の入り口には巨大な、看板があった。

煙突があつて煙がもうとでていた。

中に入ると一人の若い男が鉢巻をしていて筋肉が隆起していた。
ひたすら刀を研いでいた。

「こりやまたセイハツ老人じゃないか」

「ブルコックどうじゃ景気は？」

「ぼちぼちだよ」

ブルコックが微笑んだ。大体セイハツ老人が話しを進めてくれた。

「いいだろう面白そうだ。俺様に任せな金はどっちが出す？ 五千ゴールドに負けておくぞ」

「あ、俺が出します」

「そうか兄ちゃん景気よさそうだな」

俺は微笑んだ。こいつが血のスズメに刀を売ったのか？ 俺は疑いの眼で見つめていた。

しばらくして出来上がった作品を眺めた。聖なる剣の表面に水でぬれていた。これが、水属性なのだと分かった。これも武器として使うために腰に下げられるような道具を買った。鍬は、背中にしょっている。

鍬と剣が不思議と様になっていた。

俺は最後に尋ねた。

「なんで血のスズメに刀を売ったんですか？」

「刀？ ああ、ありやな盗まれたんだよ最近スズメの噂は聞くけど俺様の刀を使ってるってな昔な最初の頃作った作品が闇ギルドに盗まれてたぶんそれじゃないか？」

「安心しました。あなたがレッドプレイヤーに商売しているんじゃないかとひやひやでした」

「バカいわないでくれよ俺は健全なる普通のプレイヤーさ」

そして俺たちは別れを告げてローブ姿の賢者様についていった。

巨大な広間にたどり着くと、ワープに入った。

行き先を水星にした。場所は、首都である。

俺とセイハツ老人が意識を集中したのと同時に目が開けた。

首都にはとてつもない巨大な水流があり下から上に向かって流れている。ここは台の上である。隣にはセイハツ老人がいる。

何よりも空を見上げると太陽の位置も違う気がする。大きな時計台があり水色である。マーメイドが泳いでいた。信じられない光景を見るように俺は驚いていた。

ここにはNPCとしてマーメイドがいる。クエストをマーメイドから受け取るのは当たり前のことである。何よりも俺たちは酒場に向かった。まずは情報収集とレッドプレイヤーがここらへんにいないかを確認するためであった。

酒場は水色に輝いていて入り口に入ると、カウンターは水浸しに

なつてマーメイドが酒瓶をそろえていた。中には沢山の猛者たちがいた。広々としている。

そして俺は確かに強くなるために一歩を刻んだのであった。

4話 修業を始めました（後書き）

セイハツ老人は賢者ですが頼もしい味方であり。師匠です。ここでNPCのマーメイドが出ますが、マーメイドの正しい情報がありましたらアドバイスとしてお願いします。著者は人魚みたいだとは思っておりません。勉強不足で申し訳ありません。

5話 ジャイアントヒロイン（前書き）

ついにヒロインが主人公はロリコンではありませんのでよろしくお
願いします。

句読点を直しました。これからもよろしく願いします。

5話 ジャイアントヒロイン

酒場のマーメイドをウィキスンと読んだ。ウィキスンは饒舌に色々語ってくれる。

「それでねあたいはびつくらしちゃったんだよ巨人が歩いてたの」
「巨人？」

俺がそう尋ねると彼女は何か気に食わない虫を見るようにして俺を見た。

「そうよ巨人よなんたってこんなところにはここは水の王国なのよ」
「水だが野腹もあるんじゃないの？」
「ここは海だよ」
「そうよ海の上よ」
「海の上だがなぜか野腹とつながっているんだな」
「うるさいな爺」

ウィキスンは饒舌にセイハツ老人をいなしたのであった。セイハツ老人は下を見てしょぼんとしていた。ウィキスンはさらに語る。

「だからここらへんにはレッドプレイヤーはいないよいるとしたら奴隷商人くらいかしらね」

「なぜ奴隷商人なんだ？」

「あらか知らないの？ 奴隷商人はプレイヤーもなれるのよ？ 珍しい生き物を捕まえて見世物に売るのがよだから巨人を捕まえるために動き出したの」

「そりゃな巨人は見世物になるかもしれないが人間だぞ？」

「だけどね食われるより怖いことはないのだから速く見世物になっ

てほしいの」

「でもなあ見世物になったからって巨人が救われるのか？」

俺の疑問にウィキスンはさらに饒舌にかかってきた。しかもしつこいくらいに。

「レッドプレイヤーはいないけど傭兵ならいるわよここらへんの国を守るために闘うのNPCだけどね戦争が始まりそうだから天王星と」

「それでプレイヤーはやっぱ一人も参加しないんだろう？」

「いんや一人だけカイザーって女の子が参加するみたいだよ」

「そんな子いたっけ？ お師匠、何か知ってますか？」

セイハツ老人が立ち直ってこちらを見た。頭が剥けている。床がびしょびしょで、海の酒場という感じで不思議と親しみを覚えた。

「うむカイザーなら知っておるな超上級者じゃよ戦争のためならなんでもする。しかも不思議とカイザーは人を殺さない致命傷を負わせて立ち去り戦争を有利に向けさせる」

「なるほどねヒーローだ」

俺が尋ねるとセイハツ老人はにやりとそう口を尖らせた。

「そう思うのならそうかもしれんだがカイザーは多額のお金で雇われているとも言われているただ民が税金で苦しむのを嫌うために闘っているというものもある。カイザーは列記としたプレイヤーだよ」

なんだかちよっぴし興味がそそられた。そのカイザーの気持ち力イザーが何を目指しているのか？ しかし今は強くなることである。

セイハツ老人がただ一言呟いた。

「その巨人どこにいる？」

すると女主人である酒場の亭主はにやりと笑って親指を吊り上げた。

「払っておけ」

セイハツ老人が唸る。

俺は懷から一万ゴールドを取り出すと渡した。すると彼女が唐突に語ってくれた。

ウイスキンはやはり饒舌であつた。

■ ■ ■

「それでここに着たけどさ何をさせたいわけ？ お師匠」

「考えても見れ巨人がいるんだぞ？ そそられるだろ？」

「で俺の修行は？」

セイハツ老人がにやりとまた微笑んだ。そして指を指した向こうには巨大なそうビル二十階立てくらいのゾウガメがいた。信じられるか？ そんな巨大なゾウガメがいるんだぜ？

「あれを倒せ」

「無茶言つなよ俺なんかあれオブジェクトとしか捉えてなかったんだぞ。信じられねーだろ」

「あれは真実の亀だよ超上級の技が二十回も使える優れものじゃ」

「そりゃ見たけどさ確かに見たけどさ」

確かに上級魔法の習得の覽を一通り見つめて一番危険だと思ったやつだった。

「なんで一番危険なやつくるかな？」

「まあ勝負あるのみじゃ行ってみよ知っているか？ 真実の亀は敵の心によつて強さが変わる。お前の心が弱ければ弱い強ければ強いただそれだけだ」

そういつてセイハツ老人は水びたしの草原に座ろうともせずアイテムボックスから椅子を取り出すとよっこらせといつて座つてしまった。

そもそもあんな巨大モンスター今まで誰か狩つたことあるのか？それ以前に狩つたとして、湧き出るのにどのくらいかかるんだ？十五分とかか？ありえーねだろ。

俺は嘆息しながら水星属性の聖なる剣を取り出すと右手に鍬を握り締めて走りだした。はあはあと息をすつて至近距離まで二時間かけた。どんくらいでけーんだよ。

俺は呆れるしかなかった。

何よりも巨大でその足元には鏡みたいなのが無数にあつた。

そこに一人の俺より三倍くらいの少女が泣いていた。なんだろうと近づくと。

巨人だった。それもビューティフルにナイスバディーの女性であ

った。金髪ブロンドである、イギリス人っぽかった。

「あああ私の愛しいダーリンなんで振り向いてくれないの？」

「あああ私の愛しい真実の亀なんで振り向いてくれないの？」

「そりや振り向かないだろそいつはずっと空を見ているよ」

「その声はあなたはなんと旅人私と同じ旅人」

「そうだけど？」

「なら私が誰か当ててください」

「なんで？」

「クエスションタイムさあさあチャレンジャーどうするの？
そんなにいいの？ いいの？ こんなでいいの？ さあさあ、
ツツシヨータム

1 巨人 2 美女 3 巨乳美人 4 変態 5 私は変態です。

さあさあ、どれだあああ」

「1で」

「はい正解おめでとうそれで私はプレイヤーそれともNPC？」

「たぶんプレイヤーだろうな」

「それも正解まったく」

「で何の能力だ？ あれだろ？ 殺しすぎてのろわれたタイプの能力だろ？ 俺も知ってるぜ」

「話が早いですね亀を殺しすぎたのです。それでのろわれてしまい巨人になっちゃってしまっ解除するにはこの真実の亀を殺さなくちゃならなくてでもどうすればいいのか？ こんな巨体だから、口説くしかないとおもってでも振り向いてくれないの」

「分かったよパーティー申請するから受け取れ今からこいつ倒すから」

「本当いいのありがとうなんか悪いわねこれからもよろしくえ？ 彼氏？ いないわよもうあなたなら考えてもいいわよでもねちょっと考えさせて駄目？ なんで大胆だから」

「って話はえーわ」

「すみませんいつもの乗りで乗り降りしちゃっているんです頭くるくるパーさんなんです。天空の旅人みたいな空を旅しているんですよ？」

「天空の旅人っているのか？」

「さあ空を歩く人は見ませんでしたけど？」

「そりゃ見ないだろうな」

「こんの大胆なんだからもうちょっと頭使ってよどうやって倒すの？」

「いいからパーティー申請受け取って」

「はいよーういうい、ほほい」

俺は頭をかきながらパーティーメンバーになったのを確認してまずは呟く水鉄砲である。

水鉄砲が炸裂した。剣から飛び出てきて、それが硝子を突き破った。

いきなり大きな巨体が動き出すようにして何かがどよめいた。

ぶおおおおおおおお。

大きな叫び声である。

そして俺と巨人を隔てて闇が襲ってきた。

俺は後ろに走った。それも心臓がばくばく言うのも構わずにひたすら走り距離をとると巨人も後ろに避難していた。倒れたようである。俺と巨人は一緒になって真実の亀の顔まで走った。甲羅を上ったりした。顔まで到達したところでさっそく水鉄砲を放とうとして異変に気付いた。

小さな亀が沢山出てくる。それも皮膚から浮かびあがってくる。

俺は仰天しながら片端から潰していく、水鉄砲がなくなる。

それもゾンビ級に雪崩のようにやってくる。これが俺のレベル？俺の強さ？

後ろを見ると巨人が棍棒を握ってひたすら叩きのめしていた。それもプロの技である。片端から叩き潰すと動かなくなった亀に向かってチェストーと叫んでとどめを刺している。無残にもクリティカルヒットで消滅していた。なんだろう、この違和感一撃ダメージが多くても消滅するのかわつきり一撃で仕留めたときだけだと思って

いた。

新たな発見などどうでもよかったのだが。俺はひたすら剣をふり、鍬を振った。

そこから水鉄砲も雪崩のように乱射される。

いつしか敵の小さな亀がいなくなった。次に異変が生じたのは亀のほうである。むくりと立ち上がった。俺は巨人に背中をつかまれて亀に乗った。

そのまんま揺られる。亀が暴走しているのである。

俺と巨人は走った。それも心臓が爆付くのも構わずにそして頭まで到達してそこに深く武器を突き出した。その瞬間何かが体に湧き上がった。

そう初めての本当の強き敵への勝利だとおもったのだがまだ死んでいなかった。

真実の亀はさらに暴走を続ける。一体どういうことだ？

こいつ化物だろう真実じゃなくてモンスター亀じゃないか。そこには巨大がつくでしょう。

俺はしがみつくらつと巨乳に手がすべったが気にしない。

「脱げるから離して」

「離したら死ぬ」

彼女の亜麻布の衣服にしがみついていた。彼女はゴリラのように

怪力で亀にしがみついている。亀はいまだに暴走をしている。

「お前何属性だ？」

「水星だけど？」

「なら、水鉄砲を乱射しろ」

「そんなの覚えてないよそうだ。バズーカなら覚えてる」

「なんで、それを使わないんだよおお」

「だって気付かなかったなんだもんそれバズーカ」

ズキーンと吹き飛ばした。甲羅が消えた。俺は口を開けて啞然としていた。なんじゃこりやあああ。

「あ、駄目だ玉切れえええ」

「お前史上最強の武器を外してんじゃねー亀さんが素っ裸じゃねーか」

「本当だ。全裸だねいやらしいそんな目で私を見てたの？ 最低いいい」

「お前に言われたくねーわ。よし俺がなんとかする。お前は駄目だ。もう最悪だ」

俺は聖なる剣を滑らせる。ただ滑らせまくる。もちろん巨人の衣服から手を離れた。つるつとすべったまんまどんどん威力があがつ

ていく足も速くなるつつる。すべる。剣が亀の皮膚を突き破る。まだまだ。つるつとスベル。もつとだ。もつといけつるつとスベル。師匠の頭のようにつるつる。

もはや音速を超えていた。つるつる。いやまてこれ単なるスケートだろ。

俺は平全としながら剣を勢いのままに脳天に突き破った。ばくんといって大きな亀が消滅した。エフェクトになって、消え去った。

俺は空中に放りだされた。ぬれている草むらにつるつと滑り込む。

まさかこんな使い道があるとは知らなかった。ありがとう師匠そしてその頭のつるつばげ具合にありがとう。

俺は巨人を見据えた。巨人は小さくなっていった。これまた小さくて可愛いサイズになっている。それも、膝丈サイズ。

「お前は、幼稚園児か！！！」

当たり前の突っ込みであった。

「幼稚園児で何が悪いのだ。私は幼稚園でもVRMMOをやる権利をと母親に贅沢に言っただのであるのだそれこそ私の特権いつでも私の巨大サイズを見て堪能するがよい」

なんか性格変わったな彼女がまた巨人化した。

「どうやら呪いが常備スキルになっちまったようぢゅね」

彼女が赤ちゃん言葉で继げた。

「すげーむかつくけどそれで大丈夫だろじゃあな俺は修行があるから」

「そうだ私もついていくぞこの際お前と一緒に楽しそうだ。あのつるつるをもう一度見せる私も滑ってみたい」

「あれは遊びではありません」

そうですねあれは遊びではありませんやりたくなくてもやらなくちゃしょうがない現状なのです。

■ ■ ■

「というわけですお師匠」

「はしよりすぎじゃろ」

セイハツ老人が抜け毛を気にしながら頭を池の反射具合で確かめていると。

「なるほどなモンスターにのろわれたかそういったスキルがあることは知っているが見るのは初めてだ。常備スキル？ 初めて聞いたぞ」

「だってね私はいつでも巨大化できるし今のまんまでも闘えるよ」

「幼稚園児だけどね」

「そこお黙り」

「へいへい」

俺は頷きつつも。

「それでどうじゃった。倒した後に能力を覚えたじやろう？」
「はい変な能力がです」

俺は振り返って頭の中のステータス表を確認するのであった。

ラット百匹 水撒き。一週間分
マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続九日後に消える
ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続九日後に消える
ブラックバッド二十匹 防御力百アップ 継続九日後に消える。
エレファン五匹 水鉄砲 八十回分
ホワイタイガー五匹 攻撃力二百アップ 継続 一日後に消える。
グール一匹 火星属性耐性五十九日分。
マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 二十回分。

「それでマッドサイエンティストの亀ってなんだ。真実の亀じゃなかったのか？」

「あれは仮の名前倒したものは本当の名前が分かるように仕組まれている」

「それまでは許容範囲だったがこれは範囲外だ。ウォーター人化ってなんじゃこりゃああなんじゃこりゃああ」

「そんなに叫ぶなまだ使うなよこぞという時に使え水星ではそれがあるのとないのとは違うそれ以前にお前は知っていたのではないのか？」

「知っていたさだけど突っ込むしかない」

しばらく間をおいて。

「どう違うんだよ」

「水の中でも六時間は息が続く」

「なんか意味あんのか」

「そして火星属性の技を無効化する」

「ほう」

「そしてかつこいいというわけじゃ」

「てめーいちど、頭洗っておけ」

というわけで俺は変な能力を身につけたのであった。まだまだ俺の変な修行は続く俺は断じてロリコンではないだからこの幼稚園児の娘をつれていくのはいたし方ないことなのである。

「それと私の名前はリリカットよ」

「じゃありリカット俺はシンベイでこっちがセイハツ老人だよ」

「シンベイでセイハツはげじゃな」

「んじやと」

乗り突っ込みがきたのであった。

セイハツ老人は実はカツラをかぶっていて最近はげていることに気付いたのであった。もう俺は昨日から気付いてるぜ。

とか呟いたりした。

5話 ジャイアントヒロイン（後書き）

大きくなったり小さくなるヒロイン、そんなヒロインを書いてみたかったのです。あとは伏線でカイザー辺りなど。お楽しみにしてくれると嬉しいです。拙い文章ですが努力して参ります。

6話 水星の首都をインバーサル聖都（前書き）

句読点を直しました。指摘本当にありがとうございました。バシバシ直してゆきます。

6話 水星の首都をインバーサル聖都

俺たちは修行を終えてあの酒場に戻ってきた。紹介が遅れたがこの首都の名前をインバーサル聖都と呼ぶらしい水星の中で海と直結している首都である。戦争の時は近くにある城を使うのだとか俺はやはりおながすいた。いくらVRMMOでもおながすくものはすく。

俺は疑問に思っていた。肉体は向こうにあるのにおながすく原理理由はコアという機械にある。コアという機械は全身をトレースしている。よってコアによって満腹中枢などを刺激する。今俺の肉体を管理しているのは誰なのだろうか？

そして、神様はそのことを考えているのだろうか？

最近になって新聞師という職業が開業された。それは新聞をつくる職人たちである。彼らは最近の出来事の情報に秀でている。

―噂その一肉体はべつな空間に飛ばされているのではないか？ それが現在の肉体ではないか？

―噂その二時間が止められておりその時間の中で俺たちは戦いそして死んだものは本当の世界に戻れなくなるように仕組まれているのではないか？

この二つに分かれる。

俺はドツチも付かずという感じである。

なるほどな。そして今酒場でワインを飲みながらセイハツ老人に視線を向ける。ビールを飲みながらリリカットが豪快に牛乳を飲んでいる。

NPCの若奥様たちがリリカットをなでては出て行くリリカットはまんざらでもなさそうであった。

俺はふーむと先ほど買った。新聞紙とにらめっこしていた。

「師匠やはりカイザーのことばかりですよ」

「そうじゃなカイザーは只者ではないぞ」

「それは分かりますけど何かこうインパクトがほしいじゃないですか写真とか」

「ふむそれは考えたな写真かだが今は必要なかうカイザーは仮面をつけているという噂だからな目だけを隠すやつだよ」

「なるほどしかし師匠このワインは上手いですな」

「わしはビールじゃがな上手いやっぱりこれに限る」

「私は牛乳だがなうふふ」

「お前は黙って飲んでれ」

「あつそクソ爺」

リリカットとセイハツ老人のやり取りは見ててもヒヤヒヤするものであった。俺は嘆息した。するとマーメイドの尻尾を器用に動かしてこちらににじりよってくる気配を感じる。そこにはあのNPC ウィキスンさんがいた。

「あんたたち良い情報はないかい」

「あるけど買う？」

「買うかは後で決めるそれでなんだい」

「巨人はここらへんからいなくなった」

「なんで分かるんだい？」

「巨人はのろわれていたのさそれでそれを解除してきた」

「そりゃ特種だ。三万ゴールドで買おう新聞にも載せるよ?」

「それと呪い」常備スキルにつながるとも言ってくれると情報に拍車がかかるぜ」

「サービスは受け取っておくわ。こちらサービスで送るわね水星のボスメルクリウスが解禁されたそうよ」

「なにそれ」

「知らんのかい水星を支配していた。メルクリウス水星の名前もメルクリウスと呼ばれているがそこはモンスターの名前なのさメルクリウスはね水中にいるモンスターなのみんなどうやって倒すかで検討しあっているよ」

「それで倒したらなんかあるの?」

「鍵が手に入るそうだよあんたも見ただろ? インバーサルの首都の真ん中には八つの鍵穴があったってね一つ串刺しにするとべつな星ともつながるのさ」

「なんでウィスキンさんは知ってるの?」

俺が当然の疑問を投げかけると。

「そうさねあれはさかのぼること二日前だったかな若いやつがやってきたんだよ三人組でねそいつらは天界騎士団と名乗った。一人は美少女二人は男と女その三人組がまるでコントのように笑いをつくりながら現れてそう囁いたそうさ。鍵があるつまりそれは埋められる。そして、ボスが鍵だ」

「へえその人は誰から聞いたんだろ?」

「話によると情報を集めて噂を具現化しただけだそうだよ」

「そりゃすごいな」

そいつにめっさ心あたりがあった。俺の中学生の時代の苦い思い出彼女に告白して振られた経験である。そいつが今そこにいる。水

星か？　だがべつな星で調査してくれることを願って。俺はワインを飲み干したのであった。

「また来るよ」

「わかったよ」

「もう行くのか？」

「リリカットいつまでも牛乳を飲んでも成長しないぞ」

「私はもう成長してるからいいのだ」

セイハツ老人が何かにやりと微笑んだ。

「そろそろ教えようと思っておったわい夜も遅いし寝ようか」

「寝ることを教えるの？」

「そうじゃそこから基本が大事だからな」

「基本？」

「わしらはここに寝てやってきているそしてそこはべつな世界である。よって夢とは操作すれば力になる」

「何を言ってるんですか？」

セイハツ老人がにやりと微笑んだ。

「まあ教えてやる」

そして宿屋に向かった。百ゴールドを払うとなぜか三人一部屋にされてしまった。俺はああと呟いて見せたがまあ遅かった。

みんなで寝ようかというときにいきなり師匠が立ち上がった。

「まあ二人とも座れ」

「はい」

「今から教えるのはバグだ」

「バグ？」

「この世界はゲームだ。そして神様に乗っ取られている。考えたことはないか？ ゲームにはバグはつき物じゃと」

「はい」

「バグはな宇宙空間に生ずるそれなのじゃよ宇宙空間での無重力そして今ある可能性じゃて」

「何がいったのかわからないわ」

「リリカットによゆく考えても見れこの世界は夢の中の一部じゃと」

師匠が確信をついた。

「現にわしはバグの製造法を見つけた。そのバグの名前はスターマンじゃ」

「スターマン？」

「そうじゃおぬしはスターウーマンじゃがな」

「はいはい」

リリカットが頭を抱えている。

「今から。お主たちに説明する。まずはベッドに横になれ」

「はい」

「そして自分の属性を思い浮かべてよゆく眠れ」

「はい」

「それからどんな力がほしいのかを思い浮かべろ」

「どんな力？」

「考えるのじゃリリカットおぬしはどんな力だ。水と関係のあること限定じゃぞバグにも限度がある」

「それじゃあ私はこれにするさつき使った水のバズーカの強化版」

「まあいいじゃろう」

「して俺はということですか？ お師匠」

「そうじゃ」

どんな力がいいのか？ ようく考えてみよう頭をフル稼働させてみんなを守りたい力みんなを守る力みんなのダメージを自分に受けてそのダメージを力にする業。

捨て身カウンター脳裏に色々なものがめくるめく。

そして結論がでた。

「では寝てみる明日の朝会おう」

そして俺の一日は終わった。色々あったけど疲れた。

■ ■ ■

ラット百匹 水撒き。 一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続八日後に消える

ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続八日後に消える

ブラックバッド二十匹 防御力百アップ 継続八日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グール一匹 火星属性耐性五十八日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 二十回分。

仮想『水移動』 使用回数 ∞

「それがその力じゃ一つしか今のところつけられない分かっているのはこれが限度じゃいくら大賢者として無理がある」

師匠が朝に説明してくれた。宿屋で朝飯のパンを食べながら師匠がもぐもぐと語る。

「だから、変えたかったらまた昨日みたいにやればいいぞ」

「はい」

「だがなやりすぎるなこれはある種のお前たちの時代というチートだ」

「チートですか？」

「ゲームの中にはないシステムいや空想だから仮想なのだろうな」

「だけど現に言葉としてでているじゃないですか」

「それはある種のまじないだ。一定のアルゴリズムがあれば大丈夫だ。例えばA Bとあれば、その文字を拾って作り出す。これは言葉を拾ったにすぎないこのゲームが神様に乗っ取られる昔からわしが使用していた。これが、カイザーの強さの秘密じゃ」

「あんた知ってたのか」

「カイザーはわしの孫じゃからな」

「まったくあんたは」

「それでこの力でどうすれと？」

「守りたいものを守れお前にそれを託す後は修行の時に死んでもらうてはただでゴールドをもらったことになるだろう？」

「たった一万ゴールドです」

「それでも金は金じゃ、昔のやつは金にはうるさいぞ？」

「はい」

すると二階からどたと落っこちてきたのはリリカットであった。

「なんか変な力ついてた」

「それが力じゃ」

「うつむ素晴らしい。って常備スキルと同じくらい素晴らしい」

「変更できるってさ」

「素晴らしいセイハツ老人よおぬしは只者ではないぞ」

「そりゃありがとうなこれでもゲーム開発の腕はあつたんじゃがな」

「だからゲーム当初から使ってたんですね？」

「そうじゃなゲームを作る。そこに抜け道があればそこにチートをつくる。それ基本じゃて」

「ありがとうございます。師匠これ大事にします」

「そういつてくれるとありがたい」

そしてセイハツ老人は立ち上がると。

「さて実践から始めようかのう次はチームプレイじゃわしは水鉄砲しか使わないお主たちは近接じゃ」

「はい」

そこには二人の弟子がいた。

俺たちは立ち上がってリリカットが食べるのを待ち外に出た。海の野腹を歩くと気持ちよかった。

たどり着いた野腹で俺たちはスロールというスライムと闘うことになった。

「いけリリカットお前なら出来る」

「無茶いうなよこっちきたわよ」

「まったくお前は」

その時である。俺はこの世界にはいなかったのである。俺は水中を歩いていた。水に映る世界に飛び込んだのである。だから水移動。俺を倒すには水に剣を突き出し引つ張らなくてはならない。そ

んな設定も考えたのである。

そしてスロールまで近づくと水に映る俺に気付いたのかこちらに攻撃してくる。その前に、リリカットが手鏡を取り出す。水に反射させる。その反射で俺は現実に出てくる。別に鏡が無くてでもでれるのだがゆつくりであるため鏡があればすぐに出てこれる。

でてきた瞬間に聖なる剣で串刺しにする。水星属性が付与されているためにやはり重芯は重たかった。一応説明しておくがここで水属性と水星属性の違いについてそれは明確にはないのである。同じ言葉であつてどちらとも解釈できるようになっている。

時たま水属性といたりきたま水星属性といたりプレイヤー次第で変わるのである。

そして俺はその付与されている剣でスロールを串刺しにして中に水を注入した。爆発した。俺は微笑んだ。これで一体目である。

俺たちは悩み苦闘しながら色々な修練を積むリリカットのするどい怒声やリリカットのするどいドアほやりリリカットのバカとか色々なことを考えながらセイハツ老人が手ほどきしてくれる。

そして何よりもリリカットの力はやはりバズーカが。なためにいくらかでも使える恐ろしいものであった。正確には水の大砲である。だから水を何度も開放するため海の量が変わるので師匠に止められていた。

俺たちは幾度も立ち向かう。いつしか五十体を倒していた。ドロップアイテムは全部スライムの肉片である。これをポーシヨンに造る人がいるのである。

そして俺はそれらを回収する役目を担っている。

ゆつくりと歩いて、欠伸した。
屈伸もした。

空気が冷たい。そして、何よりも暖かい。

追加された。能力は、

ラット百匹 水撒き。一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続八日後に消える

ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続八日後に消える

ブラックバッド二十匹 防御力百アップ 継続八日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グール一匹 火星属性耐性五十八日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 二十回分。

スロール五十体 ウンディーネ召喚 五回分。

仮想『水移動』 使用回数 ∞

ウンディーネを召喚してどうするのだろうか？

俺はために使おうと思ったけど代わりに師匠が使ってくれた。

「こんにちわーっす」

「久しいの、ウンディーネ」

「はげボーイ、ひさしいな」

「お前、男なのか？」

俺が尋ねるとウンディーネが笑った。だけど女であると分かった。

「さて仕事だねなるほど魂が五十体分あるねあとは一体強大なやつもある。ここらへん一帯のプレイヤーに付与している魂はそれくらいだ。変換するかい？」

「ああ頼むよ」

「はいよ回復ポーション小五十個、回復ポーション超大二十個だよ」

「って超大ってすごいレアじゃないですかすごい素材じゃないと作れないってやつでしょう？」

「それはあれだ。マッドサイエンティストの亀の魂だよ」

「へえ」

「ほら、受け取れ」

「え？」

「二人で半分個しろ」

「ありがとう」

俺は頷いてリリカットにも配ったのであった。そのあとウンディーネが消えた。

「あの通りモンスターを大量に倒してその次に召喚して魂と交換する。これがレベル上げの基本じゃほれこれもじゃ」

そういわれ二十五個ずつに回復ポーション小を分けたのであった。

リリカットは喜んでいた。これなら、瀕死になってもすぐに超大を使えばいいから安心だろう。

俺はほっと一息つくと思ったんだけど。

「なあ俺たちならそのボスモンスター倒せるんじゃないのか？」

すると師匠は爆笑した。

「無理だよ水中の中だし倒すには祈祷師が必要だよ水中に対して祈祷する。すると二十四時間その区域にいるプレイヤー全部が水中で息を吸えるって仕組みだ」

「なるほどな別にマッドサイエンティストの亀は必要なくね？ あ
のスキル意味なくね？」

「いや意味がある、あのウォーター人化は水中でほぼ無敵になれる。
お前の水で反射させる力も合わせると無敵だよ水中に鏡を作ればい
いわけだからなある種の召喚と同じだろうな」

「そうかな？ 反射させて水に映る自分に入り込むそして出るとき
はゆっくりとでるが鏡があれば猛スピードで反射して出る。デメリ
ットもあるな」

俺が頷いていると。

「お前の能力は分かりづらいこれからは鏡があればすぐに召喚でき
ると思うようにする。それでいいな」

「いいけど俺がその区域にいないと無理だからね水世界での俺の立
ち位置つてもんがある」

「わかったわよもうややこしい能力じゃなくてばしゃーつといける
能力にすれ」

「悪かったな」

それから俺たちは、インバーサルの草原を越えて水の森に向かつ
たのである。修行をするため守りたい人を守るために俺は前を進む
後ろを振り返るなそこにはサファイヤやパールたちがいる彼らを見る
ことは今はないだろう。

6話 水星の首都をインバーサル聖都（後書き）

水星はボスを水中にしました。天王星だと空だったりします。それぞれ星の名前で考えております。ここまで読んでいただきありがとうございます。

7話 海の森と告白（前書き）

すれ違いを書いてみました。

句読点を直しました。 2011/10/13

7話 海の森と告白

海の草原から木々が生えている。そこが海の森である。水星はあたり一面が水浸しでありどこまでが海でどこまでが陸地なのかの区別が難しい基本的に地面が見えるところが安全である。

地面は茶色でありちゃんと足で確かめることを最初NPCに進められるものである。

俺はというとその森の中で歩きながらモンスター狩りをしている。モンスターが湧き出てくる瞬間を狙って片端から卑怯なチートみたいな方法で狩っていくもちろんリリカットにも活躍してもらう。

沢山の方程式をつくるのではなく一つの方程式を見つけ出したような学者の気持ちを味わっている。

今日の前を通り過ぎたのは。スカイシャークである。スカイシャークは二頭のつがいが主に多いそれを倒すにはコンビネーションが必要である。スカイシャークは海の表面を泳ぐ。平べったい生き物であり通称ヒラメとも言われている。

そのシャークが襲ってきた。

俺とリリカットがたくみに動く。セイハツ老人が水鉄砲を構える。

俺はまた水の世界にと旅立った。その反対側で俺は歩くそして、表面をスカイシャークが泳いだ瞬間ずぶりと手を突き出し剣で串刺しにする。エフェクト光を光らせて消滅する。次にもう一体を倒すために次の行動パターンを考えるがリリカットが俺の後ろを歩くようにしている。ということはスカイシャークはリリカットを襲うためにまっすぐに進み俺の上を通るのである。

俺は鋏を取り出してゆつくりと叩き潰した。スカイシャークが動かなくなると素材を剥ぎ取った。

スカイシャークの皮は高値で取引される。と聞いたことがある。そして何よりも皮は料理に使われるのだとか武器に付けられることもある。この世界にある全部の皮は装備品に付属できる。鍛冶屋に頼めばできるのだがその中でもスカイシャークは防具に水星属性を付与させることが出来るといわれている。

俺はそれには興味がなかったためアイテムボックスにしまうと。また進み始めた。

何度もスカイシャークを倒し俺たちはインバーサル聖都に帰還したのであった。現在のスキルは。

ラット百匹 水撒き。一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続八日後に消える

ブルースネーク十匹 毒性アップ 継続八日後に消える

ブラックバッド二十匹 防御力百アップ 継続八日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グールー匹 火星属性耐性五十八日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 二十回分。

スロール五十匹 ウンディーネ召喚 五回分。

スカイシャーク二十匹 敏捷力二百アップ 一週間後に消える。

仮想『水移動』 使用回数∞

スカイシャークは敏捷力がアップするのだそうだ。

俺は一安心して酒場でみんな酒を飲み渡す。リリカットだけが牛乳である。

「ウイスキンさん料理を頼みます」

「はいよ」

しばらくして三人前の海魚料理定食が出てきた。魚を骨ごと砕き食べるとおなかが膨れた。満腹になって米も食べると幸せだった。

みんなで黙々と食べながら色んなことを考える。このまま脱出できないのか？

だが結論は見えている。冥王星の神様を倒すことである。そうすればこの世界から脱出できる。

レッドプレイヤーとかそんなこと言っている場合ではないのだ。どうして、レッドプレイヤーは分からないのだ。人間同士で争っている場合ではないということになぜ気付かない？

まあ彼らの娛樂があるのだろう。ゲームだと思っているのだろう。

だけど俺は信じられない。ゲームでも死ぬのだ。

俺は途方にくれながら食事を終えると空気を吸った酒を飲み下しセイハツ老人を見つめる。彼が思索している。

酒場の扉が開かれ一人の人間が入ってきた。そいつは目の前に座るなりこちらを見てにやりと笑った。

目だけに仮面をつけていた。

そして彼がにやりと笑った。いや彼女が、胸がある。全身を黒のマントとジャケットを羽織まるで若手ガンマンのような西部劇に出てきそうな衣服をしていた。

「爺、呼び出したな明日戦争があるっちゅうのにわかってないわね」

「すまんなカイザー仕事だ。この惑星のボスを倒す」

「やる気になったのか？ 爺」

「まあな久々にやる気のである若手を見つけた」
「ほうそいつか」

彼女がこちらを見る。こちらを下から上まで見つめると。

「出来そうじゃないかまあいいさお前私が戦争に出てるのは知ってるな？」

「知ってますよ」

「ならはえー見てみないか私の強さを見てみてどう思うか？」

「どうも思いませんよ強いものは強い」

「なるほどなあ見てみる今日も遅いだろ？ 明日の朝っぱらから戦争が始まる。まあ、宿屋の二階から見える。これを貸してもいいぞ」

「なんですか？ それは？」

「双眼鏡さ自作だがね」

「すごいですね」

「まあ、受け取れ」

俺はそれを受け取ってアイテムボックスにしまった。

「じゃあ日付を決めて水星のクエスト表にボス討伐って出すしかないぞ最低でも百人は集まらないと無理だからな」

「分かりましたよ師匠どうするんですかそんな無茶言って」

「考えておるがまずは天界騎士団と接触を図らねばならん」

「そつかよ」

めっちゃいやだった。考えたくも無かった。でも彼女とは友達登録していた。

「心あたりはないか？ まずは探す必要があるが。天王星に行くし

かないかのう？」

「いや、俺が連絡する」

「ほう？」

「知り合いが騎士団の団長をやってるんだよ」

「なるほどな」

「まったくあまり会話しなくなかったよ」

「嫌なやつなのか？」

「ちよつとな中学生時代に痛い思い出があるくらいだ」

「なるほどなまあがんばれ」

カイザーがこちらを見てにやりと笑って、立ち去った。

俺たちは宿屋に戻ってさっそく友達登録している彼女に連絡した。彼女との会話はあまりにもときどきした。

『こんにちはいやーひさっしーなひさっしーシンベイはスケベイってね何のようかな？』

「出来ればけど水星のボスを倒すの協力してくれないかな？」

『あらま不思議なこともあるのねそっちも協力してくれない色んな星のボスを倒すために情報を集めてるの今のところ情報が固まったのは水星と天王星後はまだ不明ね』

「そうか」

『どっち？ 水星を倒したあと協力してくれる？』

「うんそうだねそれで前から言おうと思ったんだけど俺が中学の時にいったこと覚えてる？」

『うん覚えてるよ私のこと好きだってあれでしょっても幸せすぎてぶっ飛んじやったけどさ今も私あんなのこと好きだよ』

「へ？」

『だからなんか好きだって自覚したらあわせる顔なくなっちゃってさ』

『師匠なんているんだ。不思議』

「そりやいるさ俺だつて強くなりたいたからね」

『じゃあ明日の昼に待ち合わせしようよ水星の酒場ねウィスキンさんがいるところ知ってる？』

「知ってるよ」

『そこでね』

「じゃあ」

通信が切れた。むつつりスケベもいいところでむつつりしすぎてお互いの気持ちに気付いているけどあわせる顔がなかったという落ちであった。俺は笑いをこらえ切れなかった。今までの会話を見ていた。師匠とリリカットが顔を赤らめて笑っている。

「今の聞いたことにするなよ！」

「聞いちゃった」

「わしもな」

その日羞恥プレイにあった。

■ ■ ■

朝の八時に目ざめると早速おきだして八時半から始まる戦争を眺めるために宿屋のベランダに出た。案の定空から架け橋が出現し、べつな惑星とのマッチングを完了したのである。そして、轟音が響いた。

開始を告げたのである。

遠くの城でうごめく人たちがほとんどがNPCである。俺は双眼鏡を眼につけて見つめた。先陣を斬っているのはやはり仮面の娘であった。

彼女は弓矢を使って片端から敵の急所を狙っている。水星の属性付与が見られた。当たった敵は倒れて動けなくなっている。そこま

では普通だったのだ。そこまでは、いきなり、カイザーが、弓矢で接近戦をやったのである。

それも水の剣みたいなのが弓に備わっていて変幻自在に変化していた。不思議な光景である。それがあつという間に巨大化したり鋭くなったり敵兵を次次とほふっている。そのまま雲をも突き破って敵の中に突っ込んだ。そのまんま奥深くまで向かっているようだ。

双眼鏡を雲の隙間に当てて眺めた。

砦が出来ている。カイザー一人ははどうにもならないだろう。だが甘かった。

カイザーの弓が変幻自在に変化して巨大な弓のハンマーをつくり水の塊を振り飛ばした。それが砦に突き破りぶち壊した。矢が飛来する。水の盾でもって制御していた。

そしてようやく戦争が終わった。

今回は同点のようである。

俺は何が起きたか信じられなかった。

すると椅子に座っている師匠が微笑んだ。

「あれがカイザーの力水変換だよビンいっぱいの水で空気中の水分を掴みそれを強化したり鋭くしたりはたまた投げ飛ばしたりそういった力だ。コントロールも加わっている」

「すごいです」

「彼女だからできる。彼女は絵描きでね想像が得意だった。君が水変換の能力をバグとして作ったとしてもああまでコントロールはできないだろうな想像力が必要だ」

「まったくです。俺には無理ですよ」

俺は座ってぼーっとしていた。そして、リリカットに怒鳴られて、朝食にした。

■ ■ ■

まず第一に顔を合わせずらい彼女は、美男子の男性カウボーイの帽子をかぶり釣り目の彼はどうやら副団長のようである。レイピアを吊り下げている。もう一人は女性でありちよつと魅惑的な魔術師といったところかこちら副団長だった気がする。赤髪が印象的である。一方でカウボーイの男性は黒髪である。

赤髪の女性はちよつと貧乳であるがあまり気にしてないみたいである。彼らの後ろに小さくなりながら彼女がいた。

彼女は必至に俺の顔を覗き込もうとしている。びくびくしていた。

俺は微笑んだ。

「ルミ行けがんばれハルスカットが応援するぞ」

カウボーイの男性が応援した。

「ルミ行つてらっしゃいダーリンがお待ちよこのヘイブンが応援するのだから行きなさい」

「無理——恥かしい」

俺はもう我慢ができなくなって前に出た。二人に握手していきなり彼女を抱きしめた。いきなりの出来事に全員がきよんとしている酒場の前とはいえ大胆の行動である。抱きしめて顔を見つめた。そのくつきりとした睫と瞳がこちらを捉える。くりくりとしたポニーテールがたなびき栗色の髪の毛からほんのりとシャンプーの香りがする。軽装の鎧に身につけその下には白いワンピースをつけてい

る。

ひらりひらりのついた、衣装である。

「俺はずっと勘違いして君を恨んでいた。今なら謝れる本当にごめん君に振られたとおもっていた」

「あわわ違うの振ってないのいきなりのことです頭がパニックになって今だって心がときめいているのこんなに幸せなことってない本当に幸せゲームに閉じ込められてもいい現実に戻ってもいいから私と恋愛しようよ」

「もちろんだ恋愛をしようじょじょに距離を縮めようルミやり直そう！」

「はい！」

「ちょっといいかい、これは何かの劇場かい？」

カイザーが不敵に笑っていた。

俺と彼女はばさつと距離をあけて手を握り締めた。そして、手を離し、酒場の中に入った。そうして会議は始まった。

7話 海の森と告白（後書き）

水星のメルクリウスを倒すためにプレイヤーたちが動き出します。倒せるのか？評価だけでもくれると著者のやる気に火が付きます。

8話 作戦会議のあとにメルクリウス討伐開始（前書き）

もつとVRMMOはこうした方が面白いだとかアドバイスがあれば
願います。著者なりにゲームを参考にして書いております、妄
想も含まれておりますけど。どうか見てやってください。

句読点を減らしました。 2011/10/13

8話 作戦会議のあとにメルクリウス討伐開始

「では、このハルスカットが状況を説明いたします」

美男子カウボーイが語りだす。

「まずはNPCから情報を集めました。メルクリウスの情報ですが半漁人だということが分かっています。どうやらNPCに情報が流れるようなシステムになっていたようです。ね情報源は狩人というNPCです。そのほかには伝説が住民に残っておりまして。そこから導きだされる結論として八つの鍵を埋めたとき冥王星の道が開かれると推測されます」

「なるほどなということは祈祷師とか雇わなくちゃならないな」

「そこは心配しないで私のギルドに祈祷師が五名いるから」

「よかったルミお前のギルドって今のところメンバー何人だ？」

「五百人よ」

「よしお前のギルドで倒せるな」

「無理よまだ初心者が多いしせいぜい戦えるのは五十名残りの五十名は募集するしかないわね」

「うーむ困ったな」

俺はうなだれている。募集をかけたとしてもすぐに集まる保障はない。俺は頭をひねり出して栗色のポニーテールを見つめる。

「な、なにそんなに見つめて」

「やっぱり可愛い」

かーっと赤くなるルミを見つめながら感想を述べる。

「良かったじゃないですかルミ！ このハイブン安心してお嫁にいます」

ハイブンさんは貧乳の女性である。赤髪が印象的であるが。

「それで弱点は分かってるのか？」

カイザーが尋ねるとその場の雰囲気の様変わりした。

「いえ分かっておりません」

ハルスカットがそう言うとその場にいる全員がため息をついた。

「わかっていないのにどうやって倒すんだよ無茶だよ」

リリカットが悲鳴をあげるが。そこにやはりセイハツ老人がにやりと笑う。

「まずは百人で攻撃する。水星なのだから水星属性の攻撃は利くだろうそのほかにも試してみたいが水中の中では水星技しか使えないということとは水星属性が弱点だと推測できる。どのスキルが弱点かわからないし行動パターンだって読めない考えるほど難しいことだがまあ気楽にいこう」

「なるほど師匠それは推測できませんでした」

「まだまだ甘いな弟子よ」

「ですがそう考えると天王星技を持つ私たちはどうすれば？」

ハイブンさんが尋ねると。

「それなら心配はいらない祈祷師にそれぞれ祈祷してもらえそしたら水中でもべつの惑星のスキルが使えるはずじゃ」

「よかった」

「しかし問題は利くかだが利くじやろう心配はない一番の心配は行動パターンじゃどのくらい弱ったらどんな行動に移すのか？ できれば死人は一人たりとも出たくないタンク役の人は最低でも二十名はほしい」

「それなら私のギルドにプロがいる」

「わかった。お前たちは天王星で応募をかける百名を越えてもいいからとにかく集めろわしたちは水星で応募をかける」

「分かりましたわセイハツ老人」

ハイブンさんがにやりと微笑む。

「さて解散しようか」

俺がそう言うともみんな立ち上がった。

俺たちは外に出るとみんな会釈していた。

「日時は集まったら明後日でいいか？」
「いいわよ」

ルミが微笑むと。

「ルミ絶対生き残ろう」

俺が手を差し出すそれをぎゅっと握り締めるルミ彼女が暖かい視線でこちらを見つめている。

「そうねがんばろうねじゃあ行くわ」

「いつでも合いたかったら連絡してくれ」

「もちろんよ」

そうして、俺たちの作戦会議は終了した。

俺たちはその後ウイスキンさんに頼んでインバーサル聖都のいたる施設にボス討伐の応募を貼った。さらにそこにはこの世界を脱出する鍵となることを書いたのである。

そうして俺たちは残りの日時をボス討伐に向けてモンスター狩りを始めたのであった。

■ ■ ■

約束の二日目にて聖都の広場には沢山の人が集まっていた。みんなそれぞれの武器を握り締めて上級プレイヤーのような微笑でもって立っている。それぞれ防具や武器がとてもカッコいいくらいに光っている。俺が鍬と聖なる剣という普通に対して彼らはドラゴンソードとかかつちよいいものを身につけていた。

俺はウイスキンさんが用意してくれた。壇に登った。隣にはルミがいる。

俺が大きな声で尋ねる。

「みなさん死なないためにそれぞれ班を決めます。いいですかその班でちゃんとチームプレイをしてくださいパーティメンバーの最

大メンバー十人で組みます。バランスよく組むのでマークのにおいてある場所に座ってくださいAアタッカー、Tタンカー、W魔術師、Sサポート、Yユニーク、この五つに分かれてください、ユニークは特殊な能力の方に限ります。何か質問がありますか？」

俺が尋ねると一人のおっさんが手をあげた。

「いいかこれは一回で倒せるのか？」

「まず無理でしょう一回目は弱点を見定めることからです。その後に二回目、三回目と倒します。話によりますとある一定のエリアから外にはボスは出ませんなので、安心してください」

次は青年が手をあげる。

「水の中が戦場だと聞いたが泳げないやつはどうする？」

「大丈夫です。祈祷師のスキルに泳げるようになるものがあります」

次に一人の少女が手を上げる。

「タンカーは誰がやるの？」

「それは天界騎士団の人がやります」

そうして質問が終わりみんなそれぞれマークのついている場所に座り始めた。

俺とルミとセイハツ老人とハルスカットとハイブンさんがパーティーを作っていくそして、リーダーを一人選んでパーティーを抜く最後の一人をバランスよく選んでもらおう、パーティーを組んだ人は立ってもらおう。

全員がパーティーを組み終わると、

全員に共有指示チャットを配る。

全員の目の前にチャットが表示されそこにパーティーリーダーたちの名前が表記されリーダーが言いたいことを言つとそこに表記される。無駄口は表記されない。

ちよつと便利な代物である。こういったものは強いボスモンスター討伐のときにやるものである。共有指示チャットはそのときによく使われる。

共有指示チャットのいいところはメンバー数を確認できることである。

今のところ全員で三百五十二名と表記されている。誰も減らないことを祈っている俺としてはこの数字が変更されないことを願う。

祈祷師はパーティーに入れない。インバーサル聖都の海の入りに立つてもらい二十四時間経ったら戻ってきてまた祈祷をかけてもらう。

でも二十四時間もかかるつもりはない。

俺たちは海の入りに向かった。一人一人ずつに祈祷をかけてもらう。

全員の祈祷がかけ終わったのは三十分後である。

俺たちは海の中に突撃して泳ぎ始めた。

俺のパーティーメンバーは師匠、リリカット、ルミ、ハルスカット、ハイブンである。リーダーは俺と副リーダーとしてルミがやっている。副リーダーを作ること可能なのである。共有指示チャットで言葉の発言権が必要なときはよく選ばれる。

ルミ―このまま進んでください海のモンスターは見つけ次第倒してください。

ロウセン―海のモンスターってどんなやつがいるんですか？

ルミ―さほど強くない蟹だとか海蛇だとか亀だとかです。

ロウセン―分かりました。

さつそく共有指示チャットが活用されている。最初のところに名前が表記されるのがわかりやすい利点である。

「なあルミあの岩の向こうにいるんだろ？」

「いるわよ岩より向こうが敵のゾーンあそこに入れば戦闘が始まる。だからそこより前にいかせないようにしてちょうだい」

「わかったよ」

海の景色は不思議だった。まるで、水色の空間に色々な海草が生えている。魚が泳いでいたりモンスターが現れたりしてすぐに討伐されていた。

なだらかな緑色の海草は柔らかさそうであり海の香りが鼻をくすぐる。

そして何よりも安心できた。

今のスキルの状態の確認をしておこう。

ラット百匹 水撒き。 一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続五日後に消える

ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続五日後に消える

ブラックバッド二十四匹 防御力百アップ 継続五日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グールー匹 火星属性耐性五十六日分。
マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 二十回分。
スロール五十体 ウンディーネ召喚 五回分。
スカイシャーク二十匹 敏捷力二百アップ 六日後に消える。
偽マーメイド五十匹 防御力五百アップ 六日後に消える。
バッドカエル五十匹 攻撃力二百アップ 六日後に消える。
仮想『水移動』 使用回数 ∞

これが現在のスキルで現在の状況でもある。
俺は戦闘が始まったら終盤あたりでウォーター人化を使う。水移動でもって水の反対側に移動するつもりである。

ようやく岩のところにとどり着くとみんな整列していた。地面に足をつけている。だいたい、みんなの顔は張り詰めていた。
そして岩の向こうが見えなかった。

ルミ―サポートをお願いします。

全員が頷くとサポートスキルが作動した。全員にかけられていく。大体、攻撃力が五百あがれば二倍三倍と考えてくれたほうがいいだろう百だけでも相当強いのである。

それだけスキル上昇は効果的なのである。
サポートは大抵が千くらい上がるので重宝されている。

ルミ―タンカー前へ二十名で弱ったら交代してくださいヒール係りは絶対に目を離さないくださいポジションがなくなったらヘイトをやめて逃げてください。

ハイブーン―W部隊前へ。

ハルスカットーA部隊前へS部隊後方へY部隊横にずれるように。戦いが始まるうとしていた。岩の向こうにそいつはいた。俺たちは一歩進んだ。

カイザーは一人で行動している。今日の前にいないが人々の群れの中に隠れている。

リリカットは心臓を押さえている。今、巨人化していた。大きな胸が見える。眼の抱擁だ。

そこには魚の顔をして魚人の尻尾をしている。ニメートルの男がいた。そいつがこちらを睨むなりさっそくものすごいスピードで泳いできた。T部隊がヘイトをかける。ひたすら、ヘイトをかけるなり半漁人がそちらに向かった。

ヘイトとは魔法の一種で敵の注意を自分に向けさせることができる。ヘイトの強さによって、攻撃魔法や攻撃よりも上回りちゃんとタンカーに攻撃を向けさせることが出来る。

ルミ―W部隊魔法を放って。

魔法が次々と炸裂した。まず最初に水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、という順番で魔法が炸裂していく水星と金星のときだけ半漁人がひるんだ。

ルミ―みんな水星と金星の攻撃技でお願いアタッカーは二分後とに交代してヘイトポイントが上まったら危険だから。

シンベイ―二分後とに交代してその隙にW部隊が魔法をかける頼むぞ。

するとアタッカーが続々と突撃を果たした。群れのように動くそれぞれ最高の技でもって攻撃する。水星技と金星技のときだけ半漁

人がひるみそのほかはびくともしなかった。

何度も攻撃を与える。タンカーがなんとか無事である。

アタッカーが退くと次にW部隊が攻撃をかける。火花がちらように、爆発する。

そして次にアタッカーと思いきやカイザーが動いた。

みんなでカイザーを追いかける形で向かうカイザーが水中の水を利用して弓矢を鎌に変えて思いつき振り乱した。半漁人の腕にあたり腕がエフェクト光となって消滅した。半漁人が悲鳴をあげてカイザーに目標をかえた。

カイザーがさっそく逃げる。みんな啞然としていた。

カイザーはものすごいスピードで泳ぎながら半漁人と併走している。

ルミ―カイザーあなた何をやってるの？

カイザー―心配は無用ちよつと弱らせてからお前たちに任せる。

カイザーが泳ぎながら矢を連発している。一発一発が重たいのか半漁人がひるみ弾き飛ばされる。水星属性が付与されているようだ。カイザーが逃げ切るとタンカーがヘイトをかけた。

俺はというと今この世界にはいなかった。水の反対側にいる。

泳ぎながら半漁人の隣にやってくると水中の中から水中にと現れて剣を突き出す。水星属性が付与されている剣で思いつき半漁人の腹を突き刺した。思わぬ事態に半漁人が悲鳴をあげる。大ダメージのようである。そしてもちろん、ヘイトが切れて俺に向かってきた。

これは予測してなかった。

半漁人が残っている腕と手で俺を引っ張りだすと何度も鋸で攻撃してくる。それを聖なる剣で防ぐのに手いっぱいである。

ルミ―あなたまでバカやってないでよ。

シンベイ―すまん。

ルミ―ヘイトをかけて。

するとみんなでヘイトをかけて俺から目標を変えた。リリカットが棍棒で叩きのめす。セイハツ老人が水鉄砲で攻撃する。ハイブンさんが見たこともない天王星の魔法で攻撃しハルスカットさんはレイピアで攻撃する。みんなそれぞれの技を使っている。そしてW部隊に変わったとき異変が生じた。半漁人が大きくなっているのである。

どうやら弱ったから強くなったのだろう。二倍になった。半漁人がタンカーに攻撃する。タンカーがよろめいた。すぐに交代した。

リル―一撃が重たい他のパーティメンバーでヒールできるひとタンカーにしてあげて。

カーサ―了解した。

ルミ―一度撤退して体制を整えましょうもう三時間たったわ。

そして俺たちは岩の向こうまで撤退してタンカーがこっちにくると全員がほっと一息をした。

全員が岩の向こうにいる半漁人に思いを寄せている。

ルミ―三十分後にです。それまでにサポートの方お願いします。もう切れそうです。

今のところ死人は出ていない。だが、あまりの強さに怖がっているものまでいる。カイザーは不敵に笑っていた。あいつの行動パターンは予測が付かない。

そして第二ラウンドが始まろうとしていた。

8話 作戦会議のあとにメルクリウス討伐開始（後書き）

Aアタッカー W魔術師 Sサポート Tタンカー Yユニーク
などがありますが、ユニークは弓だとか特殊な技や武器をもっているひとたちのことです。主人公はアタッカーです。リリカットはユニークです。巨人化があるので、ちょっとずつ説明していきます。
これから面白くなりそうです。

9 話 頼もしい味方（前書き）

句読点を減らしました。 2011/10/13

9話 頼もしい味方

第二ラウンドはあっけなく始まった。みんなが武器を構える。W
「魔術師が火を放つ。A」アタッカーが武器を振り落とす。巨大化
した半漁人ことメルクリウスが暴走を始めた。鉈で何度もタンカー
を攻撃する。連続コンボである。

俺は冷や汗をかきながら水のもう一つの世界に身を隠しいきなり
現れて背中とかを攻撃しては逃げた。本当に怖かった。俺が攻撃す
るたびにメルクリウスがこちらを睨むのである。それもものすご
い形相で。

俺はじつとりと生唾を飲み込むとまた剣を構える。

ルミ―全部隊落ち着いて行動して。

ハルスカット―アタッカー部隊がんばれあともう少しだ。

ハイブーン―魔術師部隊もうちょいだがんばれ。

みんなの雄たけびが聞こえる。俺もルミと一緒に現実の水の世界
に現れて一緒になって攻撃した。ルミの武器が閃くそれは鎌であっ
た。二本の鎌は無事に敵を捉える。俺も一緒になって何度もメルク
リウスに攻撃をした。

するとメルクリウスがさらに強大な目をした。何だ？

今度は、腕が二本増えたのである。それで攻撃してくる。タンカ
ーが持たない。

俺はとっさに叫んだ。

「カイザーなんとかさっきの技で腕を破壊してくれ」
「任された」

カイザーがぐいぐいと泳ぐ。弓矢が鎌状に変化した。タンカーが撤退を始める。べつなタンカーに交代した。みんなで一斉にヒールを与えている。死んだら終わりなのである。みんな必至だ。

カイザーが鎌を振り上げた。

「みんなどけるおおおおおお」

その叫び声でみんながしゃがむ鎌が振り下ろされた。二本の腕が消滅した。エフェクト光になって消える。一本だけの腕でなんとかメルクリウスは暴れている。それもスピードが上がった。

ルミ―タンカー危なくなったらポジションのんで連打で飲んでいいから出費は私たちが出します。
チット―ういっすなんとかがんばります。

タンカーが踏ん張る。メルクリウスはそれでもしっこかった。何たるしっこさだろうか。半漁人畏るべし。

「やべー死ぬ」

チットが悲しい声を上げた。その瞬間、ルミが突撃した。お前はバカかタンカーが後ろに下がる。もう変わりのタンカーはいなかった。ルミが天王星のヘイトをかける。お前はタンカーじゃないのに覚えてたのか。

ルミにタゲが回る。

俺の脳内に何かがスパークした。ルミが死ぬ。

メルクリウスが何度も攻撃をルミに向けようとした。攻撃を受けるルミ構えている。何度も攻撃をその武器ではじいている。もはやブレイヤースキルの問題であった。

何度も敵の一本だけの腕の攻撃を退ける。

ルミの鎌さばきは恐ろしかった。

俺はさっそく背後に回って剣を突き出した。何度も串刺しにする。鍬でも殴りかかる。水圧がかかって体が思うように動かないがそれでもなんとか動かす。ルミの武器がはじかれた。俺は悲鳴をあげた。

ルミの胸を貫こうと鉈が閃いたその瞬間。

俺の全身系が麻痺した。

俺の全感覚が研ぎ澄まされた。

何が起きたのか理解できなかった。

だが分かること大切な人を守るために強くなる。その決意だけがあった。

俺はサファイさんとフルを思い出した。あんな思いは二度としない。

その瞬間寝てもいないのにありえない現象が起きた。

バグが修正されたのである。

俺の能力が変わった。

仮想『水移動』 使用回数∞
が。

仮想『水爆発』 使用回数∞

に変更されたのである。俺は剣を握りそして振り落とす。

「うおおおおおおお」

大きな腹のそこから出し切る声をあげて剣を突き出し爆発させた。爆風が体を打つ。そして、エフェクト光に光って分解される。メルクリウスがいた。どうやらヒットポイントが尽きたようである。

腕が痺れる。痛い。

剣は無事である。爆風でルミも吹き飛んだようである。彼女が鎌を握ってふわりと体が痺れているようである。一刻も早くそこにいたかった。体が動くゆつくりと漂ってルミを抱きしめた。

そして俺は体が痺れる中。確かに実感した。あれがバグだ。人の願いをかなえてくれるバグだ。夢とはつまり希望を持つ夢のこともあったのだ。

俺の夢は大切な人を守るために力がほしいから。
だから、夢をかなえてくれた。

ルミはこちらを見てにつこりと笑った。

「助けてくれたね」
「もちろんだよ」

「信じてた」

「そりゃな」

「うおおほん」

セイハツ老人が微笑んでいた。三百五十二人の面前で恋愛ごっこをしていた。俺たちは羞恥プレイにあっていた。

みんなが爆笑した。

みんなが頷き会ってセイハツ老人の手には巨大な鍵が握られていた。

俺たちのボス討伐はここに幕を閉じた。まだ七つのボスがいるがそれは後のことだ。

ボス討伐にかけた時間八時間、死傷者0、けが人十名、ドロップアイテム、水星の鍵。それと不思議なスキルがみんなに身についたそうである。討伐に参加した全員、祈祷師も含めて。

そのスキルは。

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇。∞

それがみんなに付与された力である。岩を持てなかった人は岩を持てるようになり魔法のレベルが低かった人はレベルが上がり何よりもスピードが速くなった人もいる。知恵もあがり言葉がたくみになった人もいて人それぞれであった。

みんながそれぞれのプロになったのである。

この噂は全惑星に広まるのに時間が必要ないだろうと俺は感じて

いた。

そして三百五十二名の面前でインバーサル聖都の首都で鍵を刺したのであった。その時に、空が水色に輝いた。俺たちはそれを一新に見つめていた。

彗星が沢山降った。次に起きたのは信じられない光景であった。沢山の星が輝いたのである。まだ夕方なのに太陽より星のほうが光っていた。

そのまぶしい中で一人の老人が映し出された。その老人はしわくちゃで見るも無残であった。老人はにやりとわらった。ちよび髭が生えている。

『皆の者真実に気付いたようだなようやく一つかさてあと七つ君たちの命のもし火が消えるか敵が消えるか。最後にわしが待っている。わしを倒したら、この世界から開放されようさあ、神を待たせるなどどんくリアせよメルクリウスの全ステータス二倍はお前たちの褒美だ。それを知った他のプレイヤーたちよそうだ。ボスを倒したやつらには信じられない報酬がある。それは参加した者にしかわからない。みんなの参加をお待ちしておるぞ。残りのボスは七体、ラスボスがわしじゃでは次に会うときはどこかのボスが消滅したときだ』

そうして神様の発言は終わった。全惑星で見られているだろう。

そして俺たちの一つの戦いに幕を閉じた。

みんなそれぞれの別れを告げて、また旅を始めていった。

ウイスキンさんの酒場の前で俺とルミは談笑して笑っていた。

彼女は次に天王星のボスを倒しにいくのだそうである。
そして俺たちも参加することを決めている。

「ねえまた闘ってくれるでしょう？」

「もちろんだ。君が行くところにはどこにだって行くさ」

「でもしばらく休憩かな一カ月後に再挑戦しましょう次は天王星よ」
「よし分かったぜ」

すると彼女はもじもじしながら抱きしめてくれた。俺も抱きしめ返すと二人で笑って、離れ離れになってしまう。

彼女は天界騎士団の団長であり部下の修練がある。こういうときじゃないとよく顔を合わせられないのかもしれない。

「私行くから待ってるからね何かあったら連絡して」

「お前もな」

そうして俺と彼女は別れた。ルミの背中はとてもさびしそうであった。

「俺お前のこと好きだから忘れるなよ」

「私も好きだから」

彼女が叫んで泣いていた。

隣にはハルスカットとヘイブンがいた。二人が微笑んでいる。俺の隣にはカイザーとセイハツ老人とリリカットがいた。みんな仏頂面で考えている。

「なんか劇場みたいだ」

カイザーが仮面をつけたままにやりと微笑んでいる。

「本当に君には助かったよその水変換の力で相手の腕を消滅させるんだから」

「ああ、あれかいちよつとこつがあるんだよ部分破壊っていつてね教えるかい？ 一週間くらいは暇だから手伝ってやろうか？」

「本当か頼む」

「えー私も教えてよ」

「おチビちゃんにも教えるね」

「チビじゃないもん」

リリカットが膨れていた。

セイハツ老人が顎をなでながら。

「さてわしたちは天王星に行くのでしょうかのう」

「でも水星でまだ行っていない街とか結構あるんだろ？」

「ああ、あるなそれにお前にはスキルを覚えてもらわないといけなしそうじゃなもうちよつと水星を探索しようダンジョンとかもあるしそこを攻略してから天王星に向かったほうがボス対策にもなるしな」

「そうだなそれと俺たち普通のやつらより二倍は強いからな」

「そりゃいえてるね」

カイザーが笑っていた。俺も苦笑する。

普通プレイヤーのマツチヨな人に腕相撲したらリリカットが勝利したのはここだけの内緒である。今日であるがそのマツチヨプレイヤーは元気をなくして酒浸りである。今、ウイスキンの酒で慰

められているはずである。

俺は心の笑いをかみ締めながら告げた。

「よしまずは町で情報集めだ。どんなダンジョンがあるか探すぞ」

「それなら、お勧めの宝地図屋があるぞ」

「本当か？」

「ああ、なんだかレアアイテムの宝地図しか集めて無くてなほとんど高額なんだがある条件をのめばただ同然でくれる。ダンジョンででてくるモンスターの材料をすべて献上すると宝はこちらでもらうていいことになってる。宝がすでに無かった場合は宝の地図を返すだけで材料はやはり渡さなくちゃならないある種のギャンブルだよ。契約書にサインもしなくちゃならないよそれをやぶったらお尋ね者になるシステムだ」

カイザーがながったらしく説明してくれた。おそろしい仕組みである。お尋ね者は知っている酒場とかで張られているレッドプレイヤーのほかに詐欺行為を働いたものはその首に懸賞金が賭けられるのである。

ちよつと怖い。

俺は苦笑しながらカイザーにつれられて宝地図屋に向かったのである。リリカットとセイハツ老人は壁にかけられている地図を眺めては笑っていた。

「なんだか海賊になった感じじゃな」

「まったくよ本当に宝探しはすきよ」

「餓鬼の遊びだもんな」

俺が皮肉をいうと。

「うーお前むかつく」

「こりゃ失礼」

俺は笑うと宝地図屋の男が出てきたNPCのようである。

彼の名前はルードンである。なんだいかめしい名前だな。

「おお、カイザーさんご贔屓に」

「おお、ルードン久しいななんかいい宝地図手にいれたか？」

「それがですねさきほど海賊船から入手したものがああるんですよ海賊はプレイヤーたちが討伐してくれましたがねあなたたちがボス討伐をやつてるときNPCの海賊たちがこの聖都に侵攻してきたんですよ？」

「初耳だな」

俺がそう言うと、彼が苦笑した。

「そうですけど二隻だけで聖都の住民とちようど居合わせた。プレイヤーたちで討伐しましたよその時に手にいれた宝地図ですが買います？」

「ああ、もらおう」

「購入AとBがありますがどちらにします？」

「説明を頼む」

「はいAは五万ゴールドです。Bはダンジョンで手に入れる材料をすべてくれると宝の地図は無料になります」

「じゃあBで」

「契約書にサインをお願いします。これを破った場合はお尋ねものになります。それを取り消したい場合は宝の地図を地図屋に返すことです」

「どんな行為がやぶったことになるの？」

リリカットがずばりと聞いた。

「そうですね材料を持ち逃げしたり地図を持ち逃げしたり地図をべつな人に売り渡したり宝を手に入れて材料は持っていないと嘘をいつたりそうした行為がばれるとお尋ねものになります。一応いつておきますがばれないですよ？ 確かに、ですが材料をショップに売るとそのショップの人が出所を確かめます。材料には出所があるんです。それで大抵がばれてお尋ねものになりますね武器に装着しても鍛冶屋でばれるしあるNPCだと鑑定技があつて見ただけでどこで手にいれたか分かるような人もいます。そう言う人を監視人と呼んでいます。ばれるとやはりお尋ね者です。ですが安心してくださいお尋ね者になつても、地図さえ返せばなんとかなりますから」

なんだか罪が重たいような軽いような不思議な罰だなと思つてい

「どうします？ 海賊の地図にしますか？」

「それにするよ」

俺がサインを押すともらつた。

地図は見やすくされているようで大陸の名前とかが書かれてあつた。俺の地図は、無人島のようにである。

「まさか泳いでいくのか？」

「いや船があるよお金ででてくれるじゃろっ」

セイハツ老人がにやりとした。

そして俺たちは宝地図屋から出て今日は色々と疲れたのでそれぞれ宿屋に戻って、就寝することにした。太陽も沈んだことだし。

俺は大きな欠伸をかみ締めようく目をつぶった。

ベッドでゆらりと眠った。リリカットもセイハツ老人もべつの部屋にいるカイザーも眠った。

俺たちの長い一日はやつと終わった。

明日から新しい出来事が始まる。恐怖よりわくわくが強かった。

9 話 頼もしい味方（後書き）

ひとつのボスが消えました。次のボスまで時間があると思います。それまでに主人公たちがたくましくなるでしょう。拙い文章ですがよろしく願います。

10話 無人島（前書き）

評価くれた方ありがとうございます。これから面白いものをかけるように努力して参ります。お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。

句読点、誤字脱字修正 2011/10/15

10話 無人島

船は一人五千ゴールドで乗れた。小さな船で食事も取れる場所もある。俺たちは船にゆられながらコバルトブルーの海を眺めていた。NPCである船乗りは地図の場所を見せると分かったと言っただけでさまたちが発見したのであった。一応俺たちは、各自、食料を持参してきた。俺はクッキーを食べていた。ステータスが上昇するのがたまらない。

風が気持ちいい、カモメが飛んでいる。巨大な竜も飛んでいる。大きいな。しばらくすると、海を漂っていたのだが突然雨が降ってきた。

俺たちは、船の中に避難したのであった。

「大丈夫かな？」

リリカットが当然の疑問を投げかける。カイザーは豪快に笑っていた。

「そんなの大丈夫に決まってるだろ？ 心配性なんだからリリカットは」

「そんなもんじゃよ、この海は危険が大きいからな海坊主がいるとか聞いたぞ」

「巨大な人間だよな」

「ここにもいるけどな」

俺が苦笑してリリカットを指差すとそれをがぶりとかもつしたのでかわした。

俺はしばらく、仮眠を取ることにした。ちょっと船酔いではきそうであった。

みんなよく堪えられるな。俺は網マットの寝室に入るとゆらりと包まれた。

しばらくすると音が響いた。

目が覚めた。外に出ると雨がやんでいた。

何よりもエメラルドやらパープやらいろんな色の木々が見えた。次に石やら岩やらが沢山置いてあった。俺たちは船から降りると、水をばしゃばしゃさせて無人島にたどりついた。船乗りがこちらを見て頷く。

「一週間だけ待つ。それを過ぎたら、帰らせてもらう」

「分かったよ」

俺は地図を広げた。無人島がある場所をクリックすると拡大された。無人島の地図がそこには広がっていた。一応宝の地図なんだけどね。

「ここをまつすぐだ」

「あいよ」

セイハツ老人がにやりと笑った。俺たちはトレジャーハンターみたいなわくわくしながら前へと進んだ。途中でモンスターが現れては、倒すはめになった。

俺の水爆発はどこでも使えるらしく空気中の水分を爆発させるために強大な力になっていた。自分で気付けなくて大切な人を守りたいときに勝手に勝手に本能で作りに出した力である。

何よりも全ステータスの二倍がいつもより効率よくモンスターを倒せた。

リリカットが棍棒をふるって叩き潰すとめぎゃつといって、消滅してしまうのである。

モンスターは、主にゴブリンとハーフゴブリン、ミドルゴブリン、ドリルゴブリンがやってくる。どうやら、これらをあわせてオールゴブリンとなるらしく今スキルはこんな感じになっている。

ラット百匹 水撒き。一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続四日後に消える

ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続四日後に消える

ブラックバッド二十匹 防御力百アップ 継続四日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グールー一匹 火星属性耐性五十五日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 二十回分。

スロール五十体 ウンディーネ召喚 五回分。

スカイシャーク二十匹 敏捷力二百アップ 五日後に消える。

偽マーメイド五十匹 防御力五百アップ 五日後に消える。

バッドカエル五十匹 攻撃力二百アップ 五日後に消える。

オールゴブリン二十匹 知力五百上昇 六十日後に消える。

仮想『水爆発』 使用回数 ∞

お気づきの通りどうやら、スキルも二倍になってくれるらしい。オールゴブリンは二十四匹で一ヶ月といわれている。よって二ヶ月に延ばされたのである。俺は一安心した。

そして気付いた方俺は、ボス戦でウォーター人化を使わなかった。なぜか？ 使い忘れていたのだ。いや覚えていたのだが。いざ使お

うとしたときルミが死に掛けて使うことをまったく脳内から消えていた。水爆発を使用していたのであった。

でも知力があがったからどうのつていうのは主に思いつかないんだけどな。

大きな洞窟にたどり着いた。どうやら、自然に出来た洞窟のようである。中に入ると地図もさらに拡大された。道とかが、表示されている。

間違った道を通らないように地図どおり進んでいく。

十五分もしたら、妙に寒いことに気付く。

氷のような温度である。

俺はアイテムボックスからマントを取り出してはおった。

リリカットもカイザーもセイハツ老人も同じようにしている。

「まだか？」

「さつきからウォームバエルがジャマよこんなザコ倒したって何の意味があるのよ」

ウォームバエルとは、蝙蝠が大きくなったやつである。

ここまでで。

ウォームバエル五十匹 水の盾 五十回分。

こんなものが身についたのであった。

俺たちは複雑な道を通っていくいつしか時間の感覚が分からなくなってくる。モンスターがいない広場でみんな食事に行き始める。

た。

みんな持ち込んだジャムパンを食べながら。ステータス上昇を感じていた。

二倍になる前は、ちよつとしたステータス上昇であつた。しかし二倍になってからとんでもないステータス上昇になるから食べ物もバカにはできなかった。

「なあ、あとどのくらいだ？」

「だいたい二日くらいだね」

「げええ、そんなに深いの？」

「リリカットそんなにいやなら一人で戻ってもいいんだぞ」

「いいもん、いくもん」

「はいはい」

「それで、問題はこの寒さの原因が何かだよな」

カイザーが当然の疑問を投げかけてくる。俺もそれには頷く。

「確かに気になるな、なんでこんなに寒いのか？ 地下に水星属性のモンスターでもいるのか？」

「いるんじゃないかな例えば、水流のドラゴンとか」

「は、バカじゃないのそれ、この水星の五つの小ボスにわけられるじゃない」

「私も半信半疑なんだがねNPCによる伝承では、そのドラゴンがいる場所は極端に寒いといわれている。それで、導いただけだよ」

リリカットの顔が青ざめる。

「それでも二十人でやつと倒せるモンスターってことかな」

「シンベイ帰ろう無理だ。私たち四人しかない」

「まあなんとかなるさ」

俺が苦笑しているとリリカットが涙をふきとって笑い出した。

「ああ、私の人生は終わった。このシンベイというスケベイによって終わらされたのだ。のろってやる」

「勝手にのろつとけ俺は進むから俺の腕を試すいい機会だ」

「うぬぼれるでないぞ」

セイハツ老人がにやりとして焚き火をつくりながらこちらを指差した。

「お主はまだまだ未熟者ワシから見たら、まだヒヨコじゃ」

「そのヒヨコでも闘う。倒されてもひよこながらに闘うんだよ」

「お主なら闘えるじやろう安心して見物させてもらおうか」

「見物じゃなくてあんたも闘うのよ」

リリカットの突っ込みにセイハツ老人が一本取られたな。

と呟いた。

それから俺たちは、薄暗い洞窟を歩き続けた。壁が光っているために道が見えた。壁の光の原因はどうやら光を貯める鉱石のようである。

風がひゅうつと吹いてくる。

巨大なワームが出現した。

俺は鍬と聖なる剣を構えた。

カイザーが弓矢を引き絞ると解き放った。

矢がワームに突き刺さる。それでもワームが突進してくる。リリカットがチビのまま棍棒で叩き伏せる。ワームがぐによりと跳ねた。

セイハツ老人が水鉄砲を撃つとワームが消滅したのであった。

また進む。またワームが出現した。

俺は、剣で叩き伏せると一撃で消滅した。

また。ワームが現れた。叩き伏せると動かなくなった。材料を剥ぎ取る。一応、分かりやすいようにメモ帳に取った材料を記してある。それを宝地図屋に渡すのである。

俺たちはそれでも進み続けた。

沢山のウールラビットが出現した。暗い目をしていて体は一メートルはある。子どものような大きさと肉食獣である。合計で二十匹はいるだろうか？

俺が剣と鍬を振り回し腰を低くすると上空を矢が飛んで行った。円を描いてウールラビットの心臓を突き破り動かなくなった。

剣を叩き伏せて一匹が動かなくなり回転して鍬で二匹を仕留めた。しゃがむとまた上空を矢が飛んでいった。

剣を構えそして、一撃で仕留めないように気をつける。なぜなら、材料があまり少ないと宝地図屋も儲けがでないだろうボランティアとしてやっている。

そしてこれは商売でもある。俺は売るわけではないが。

宝をもらつた材料を渡す。これこそ商売。

いやちゃんとした道だ。

俺はつき進む。剣を叩き折る勢いでねじりウールラビットの腹を切り裂く。動かなくなる。鍬で何度も叩き伏せる。

両手を使って器用に動き回る。体がしなやかに動く。

横に移動すると水鉄砲が飛来して五匹のウールラビットが動かなくなる。

そして巨大化したりリカットが棍棒で、次々と叩き伏せている。大きさを調整できるみたいである。洞窟の天井ぎりぎりである。

まだまだ出現する。俺は横にまた移動して、剣と鍬で何度も攻撃する。手が痛くなるのがエフェクト光で消滅していようが構わずひたすら、たたきにじりそして伏せる。

矢が飛来する。

一時間が経過した。

その場には沢山のモンスターの死体があった。

俺たちは一匹ずつ材料をはぎとって、俺のアイテムボックスにしまった。俺が渡す役目になっている。沢山の材料が手に入った。主に、ウールラビットの毛皮が多かった。全部で百匹分はあるだろうか。

そして、俺たちは洞窟の奥深くに進。風が下から吹いてくる。坂が急になってきた。体が落ちないようにアイテムボックスからロープをつかって体を固定しながらゆっくりと降りていく。岩にロープをつけておいて帰りのときもなんとか登れるようにしておいた。

地面に到着すると。

また道があった。

今度は坂である。

俺たちは坂を上り続けた。

壁が相変わらず不気味に光っていた。暖かい気持ちよりどんどん寒くなつていく凍えるような寒さである。

いつしか一日が経とうとしていた。

長い探検である。

廊下の中で、俺たちは休憩をすることにした。

「ふう、きつい遠くないか？」

「地図では後三時間後くらいにつくよ合計で二日がたつけどね」

「もう一日半も過ぎたのかこの洞窟で」

リリカットのため息。

「そんなもんさすごいダンジョンだと一週間かけるものもあると聞
いてるよ？」

カイザーが出し抜けに言い出した。

「そんな地獄には行きたくない」

「まあ、いつかは行くでしょうな」

セイハツ老人がリリカットをたしなめると。

「腐れ爺黙れ」

「お嬢さんわしのことばかりいじめるのはやめてくれんかのう？」

「爺は爺だ」

セイハツ老人が頭を抱えている。

「念のためにデモンストレーションをしておく水流のドラゴンが現れた場合フォーメーションを決めておくお師匠、助言をお願いします」

「そうじゃなお前とリリカットが前衛で、わしとカイザーが後衛だ。二人が弱ったらカイザーと交代する。カイザーは接近もできるからなそれとリリカット、間違ってもバズーカは使わないように洞窟がくずれます」

「ちえ」

「リリカットの能力はイザという時につかえるがこんな洞窟では使えないのが痛いな」

俺の呟きにリリカットがうなだれる。

カイザーがふうんと呟き。俺たちはアイテムボックスからチーズを取り出しもしゃりと食べた。ステータスが上昇した。

ふうと一息つくと。俺たちは、前へと進み始めた。

しばらく歩いていけると風が強くなった。まるで氷のような息吹のようにちよつとずつ呼吸をしている。生き物のようだ。俺たちは、身長に歩を進めた。大きな広場にたどり着いた。空は月が支配していた。

大きな巣のようである。そこには、水色のドラゴンがいた。体の表面に水が漂っていて水星の魔法がかけられていることがわかる。地図はその向こう側に位置する宝箱を指差していた。

「みんな静かにちよつとずつ近づくぞ」

俺の眩きにその場にいたリリカットが鼻をむずむずさせていやな予感がした。

「へええええええつくしょん」

「ぐおおおおおおおおおん」

大きなドラゴンが目ざめてしまったのであった。しかも一頭ならまだ良かった。空からそのつがいらしきもう一頭が現れたので俺たちの脳みそはスパークした。

11話 水流のドラゴン（前書き）

こちら辺で一区切りかもしれません。

少し修正しました。 2011/10/16

11話 水流のドラゴン

ラット百匹 水撒き。一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続二日後に消える

ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続二日後に消える

ブラックバッド二十四 防御力百アップ 継続二日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グールー匹 火星属性耐性五十三日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 二十回分。

スロール五十匹 ウンディーネ召喚 五回分。

スカイシャーク二十四 敏捷力二百アップ 三日後に消える。

偽マーメイド五十匹 防御力五百アップ 三日後に消える。

バッドカエル五十匹 攻撃力二百アップ 三日後に消える。

オルゴブリン二十四 知力五百上昇 五十八日後に消える。

ウォームバエル五十匹 水の盾 五十回分。

ワーム二十四匹 人魚化 二回分

ウールラビット百匹 氷柱攻撃 百回分

仮想『水爆発』 使用回数∞

これが現在の俺の力である。二頭の水流のドラゴンがこちらに向かつて吠え声をあげる。威嚇ですかまったく、よく見ると右端と左端に水池があった。俺は使いそなた力を使ってやろうとこのとき決心した。

「リリカット、巨人化してくれ次にカイザー、一頭は任せた。セイハツ老人はリリカットの護衛だ」

「……よし……」

そして俺は走った。うおおおおお。叫んでやる。水の中に飛び込んだ。まずは人魚化を使用、足にヒレが生まれる。手にも鱗が現れる。気付いた。ここは洞窟になっていて、反対側の池につながっている。

ウォーター人化、体を水が覆う、息が吸える。

体がとてつもない軽いそれもありえなくらいにどんどん心臓がばくばくいつている。泳いだ。聖なる剣を取り出す。そこにもウォーター人化が加わっている。

地面にすべらせる。水星属性はすべらせることによって攻撃力が上がる。

すべらせまくり俺は泳ぎまくった。上では戦いの音が聞こえる。すべらせて反対側の池から飛び出た。

とんでもないスピードで反対の池に向かう。そこにばっさばっさと水流がホバーリングしている。しめた。

俺は、大きな声をあげた。叫び声といってもいいだろう。体がばしばしと水をはじく。聖なる剣を水流の頭に叩き伏せた。ばしんと音がなつ、鱗が砕けた。ひしゃげた。ドラゴンが、地面に落下した。俺はそのまんま、また水中にと戻った。また水中の中で、聖なる剣をすべらせる。ウォーター人化は六時間は息が続くのである。水星属性のアップもつくようである。

俺はまたすべらせ勢いあまって外に出た。ジャンプする。足がヒレだから地面では不向きである。リリカットが優勢である。カイザーが前にと進み水変換で器用に闘う、なによりもリリカットはセイハツ老人の援護のおかげで進んでいる。

たぶん、俺が攻撃して直撃したのはリリカットと向かい合っているドラゴンだろう右耳がつぶれているようである。なんかびくびくしながらあたりをきよろきよろしている。俺を探しているのだろう。空中で旋回しながら聖なる剣を叩き落した。目を潰した。ぐしゃりと音がなつて目がエフェクト光となつて消えた。

船の中でカイザーから部分破壊についてのレクチャーは教わっている。部分を破壊するにはその部分に集中して強大なダメージを与える必要がある。全体ではいけないのである。その一つの場合に集中させる必要がある、

そのために何度も同じ場所を狙うとかそういった方法がとられる。だが、ある一定の力があれば一撃で破壊できるそうだ。

俺はまた池に戻った。すると背後からドラゴンが追いかけてきた。この池はドラゴンも入るくらいでかいのである。俺は聖なる剣をすべらせながらくると回る。

海の中で人魚に勝てるとおもつてかああああああ。

俺はドラゴンを翻弄しながら隙を見て右足の部分破壊をする。ばしんと音がなり右足の筋肉が切れる音が聞こえる。

水流のドラゴンが雄たけびを上げる。

水が泡立ち氷始めた。

まずい、俺は外に出るとそのまま聖なる剣をすべらせながら外のドラゴンに、タックル顔負け聖なる剣で胸を刺し貫いた。

一撃でエフェクト光となつて消滅した。

どうやらカイザーが弱らせていたようである。ここまでで数分の

出来事である。

俺は地面に降り立つと人魚化を解いた。剣を構えてもう一体のドラゴンがでてくるのを待つ。どうやらそっちが本命らしい。

もう一体はまだ幼かったようである。

そちらは成熟している。

俺は剣を構え凍った池を見つめた。そこからでてきたのは水流のドラゴンである。一匹が雄たけびをあげてタックルをしてくる。

俺は剣を滑らせジャンプし上段斬を浴びせる。体の表面に水が漂っている。これはウォーター人化の影響である。そして、恐らくこのドラゴンもウォーター化を使っている。同じ技どうしでぶつかりあい俺は剣を何度も刺し貫き鍬で何度も叩く。

「しゃがめ」

しゃがんだ瞬間。カイザーが弓矢を鎌状にし振り落とした。ドラゴンの右腕と左腕が部分破壊され動けなくなったようである。だが、それでも立ち上がり牙で攻撃してくる。

俺は、剣を構えリリカットの肩に上った。巨人なために結構な視線になる。

「投げろ、リリカット」

「分かったよ」

リリカットが思いつきり俺を投げた。

俺は空中で旋回しながら上から思いつきり聖なる剣を叩き落した。

頭を砕くはずであったのだが。ドラゴンが旋回した。翼で移動しているようだ。

俺は翼の右を潰した。部分破壊が成功する。ドラゴンはばしんと音がなつて、地面に叩き落される。リリカットが何度も胸を叩いている。ばしんと音がなつて胸が部分破壊されたようである。いたるところが部分破壊だらけなのに水流のドラゴンは未だに首だけになるうが動き回る。

俺は啞然としていたが。水流のドラゴンの執拗な強さに感嘆するしかなかった。

俺は着地すると。走った。

「お師匠、リリカットに上空に向かいバズーカを撃てといってください」

「なんじゃと？」

「考えがあります」

「よし任せろ」

セイハツ老人が叫んだ。

俺は距離を開け走った。聖なる剣を滑らせる。水星属性の力とは滑らせることにより攻撃力をあげることである。

リリカットが空に向かいバズーカを打ち鳴らした。空から雨のような水が大量に降って来た。

俺は聖なる剣を宙に向けると宙に浮く水を聖なる剣で滑らせ聖なる剣に纏わせる。その勢いのまま、足がとてつもなく速くなる。

「うおおおおおおおおあああああああ」

勢いのまんま突っ込んだ。

剣をジャンプして叩きのめす。

水爆発を行う。

ドラゴンの頭上で爆発が起きドラゴンの首がエフェクト光を発した。首の部分破壊に成功したようである。それでもドラゴンは頭だけで、動き回る。体がついてくるだけのようになり、ぐねりぐねりとしている。

俺は、剣を構えてただ呟いた。

「ごめん」

頭に剣を突き出しエフェクト光になって消滅した。そこにはドロップアイテムがあった。これも渡さないといけないのだろう。なんだろうと見てみると。

「水流の鱗」であった。材料だから渡す必要があるのだがもう一体のドロップアイテムを見つめる。水流の盾であった。ふむ困った。材料でなければ渡す必要はない。

「一応、宝地図職人に知らせるけど俺が持つておく？」

「そうしてくれ」

カイザーが微笑む。

「それに持っていたほうがいいのはリリカットかお前だけだよ」

カイザーがやはり不敵に笑う。

俺たちはようやく宝箱にたどり着いた。箱を開くと、そこには黄金が詰まっていた。信じられないくらいのお宝だった。お金に変換するだけでも相当な額がいくだろうだが俺の眼に入っただのは一本の剣であつた。

握って確かめる。
ぴったしだ。

―ウォータードラゴンソード―

「これ俺もらつていいか？」
「いいぞ」

リリカットが頷くとセイハツ老人もカイザーも頷いた。

「私はこれをもらおう」

―ウォーターコンボウ―

水をまとつたウォーターの棍棒であつた。

リリカットが大事そうに掴んでいる。どうやら折りたたみ式らしく大きく出来るみたいである。

「じゃあ宝は、カイザーとセイハツ老人で山分けでいいか？」

俺が尋ねると。

「いんや、莫大な金になるから四等分しよう」

セイハツ老人がもつともなことをいった。

「まずは換金してからじゃアイテムボックスに入るか？」
「入ると思うよ」

俺が頷きアイテムボックスにひたすら宝を詰め込んだ。
相当な数だろう。

そして、俺たちの宝探しは終わった。

■ ■ ■

今は船に乗ってインバーサル聖都に戻ったところである。向かう先は宝地図屋である。俺たちは宝地図屋に入るとやはりルードンさんが待っていた。

俺は材料をアイテムボックスから取り出すし水流の盾も取り出した。

「いえそれは結構でお持ち帰りください」

「でもドロップアイテムですし」

「一応宝です」

ルードンさんが微笑み、盾を返してくれた。四人で誰が持つかということを決めて、俺がもつことになった。

「では受け取りました。水流の鱗はレア度が高いです。こんなにもらってもいいのかと疑問に思っちゃいますがそっちもぼろもつけできました？」

「「「はい」「」「」」

四人が全員頷いた。ルードンさんは微笑んだ。

「では換金所は隣です」

「分かりました」

「今後ともご贔屓に」

「今度もお願いします」

俺が微笑むとルードンさんが微笑みつくしていた。

そんなに材料がほしかったのだろうか？

疑問に思いながら全部引き渡したことをチェックメモで確認しアイテムボックスに残りがないかを確認した。

換金所では若い男がいた。

彼がこちらを見た。

「で、あるの？」

ちよつとなまいきであった。

「これをお願いします」

どさつと宝をアイテムボックスから取り出すと若者が仰天した。

「て、店長、とんでもないのがきたああああ」

若者が逃げていった。代わりに老人がやってきた。しわくちゃである。

「ふむ、これまたすごいのがきたな」

「では、お願いします」

「三十分ほどお待ちください」

それから俺たちは椅子に座りそこらへんにある本を読みふけていた。すると、三十分がたったのか老人がやってきた。そこには数え切れないほどのゴールドが積み重なっていた。

「合計で二百万ゴールドです。四人に分けますか？」

「お願いします」

「それにしてもすごい宝ですね、わしも見たことが無い」

「いや海賊が持っていた宝の地図でねそれが宝だったんですよ水流のドラゴンが二匹もでしたがね」

「かー、まったくすごい、たった四人で二頭を倒したのですか？」

老人が顔を蒸気させてこちらを見る。

「はい」

「まったく、根性がありますな今後ともここを活用してくださいサ
ービスしますよ」

「また来るかもしれませんがよろしくお願いします」

俺たちは一人、五十万ゴールドを手にいれて財布をにぎやかにさせたのであった。

それから、カイザーが頷いて。

「教えることは教えたし次合うときは天王星かな」

「そうだな」

「それまでここで修行するんだろ？」

「そのつもりだよ、このセイハツ老人がいるかぎり俺たちは修行から逃れられない」

「まったく爺もほどほどにな」

「こやつにほどほどにしたら、駄目になるわい」

「じゃあ、私はそろそろ戦争とかあるからね」

そういつて、カイザーは立ち去った。

また三人だけになってしまった。

俺たちはとにかく、疲れたので宿屋に向かい食事にありついた。

みんな無言であつた。

「やつぱり修行する？」

「もちろんじゃ」

「そのつもりよ」

やはりめんどくさかった気がした。

ラット百匹 水撒き。 一週間分

マミーマン五匹 素早さ百アップ 継続一日後に消える

ブルースネーク十匹 毒耐性アップ 継続一日後に消える

ブラックバッド二十四匹 防御力百アップ 継続一日後に消える。

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グールー匹 火星属性耐性五十二日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 十九回分。

スロール五十体 ウンディーネ召喚 五回分。

スカイシャーク二十匹 敏捷力二百アップ 二日後に消える。

偽マーメイド五十匹 防御力五百アップ 二日後に消える。

バッドカエル五十匹 攻撃力二百アップ 二日後に消える。

オイルゴブリン二十匹 知力五百上昇 五十七日後に消える。

ウォームバエル五十匹 水の盾 五十回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

ウールラビット百匹 氷柱攻撃 百回分

仮想『水爆発』 使用回数 ∞

これが現状スキルであつた。

11話 水流のドラゴン（後書き）

拙い文章ですがよろしくお願いします。バシバシ評価くれると嬉しいです。

12話 天王星の環境（前書き）

ここから新章です。空の素晴らしさを描けるように努力して参ります。

2011/10/18 少し修正しました。

12話 天王星の環境

ラット百匹 水撒き。一週間分

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グールー匹 火星属性耐性二十二日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 十九回分。

スロール五十体 ウンディーネ召喚 五回分。

オルゴブリン二十匹 知力五百上昇 三十日後に消える。

ウォームバエル五十匹 水の盾 五十回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

ウールラビット百匹 氷柱攻撃 百回分

仮想『水爆発』 使用回数 ∞

水流のドラゴンの後からほぼ一ヶ月が経とうとしていた。修行の成果で得たスキルは次の通りである。

水流のドラゴン五匹 水の槍 五百回分。

水流の獅子五匹 水星属性五百アップ 五十日後に消える。

水流のワカメ二百匹　ワカメ斬　二百回分。

ウツドクジラ二匹　全ステータス二割上昇　四十日後に消える。

サイエンスイルカ二百匹　呪い　体感スピード二倍　解除方法ブラックイルカを倒せ。

ブラックイルカー一匹　体感スピード三倍　常備スキル。

フグドリ三十匹　トゲフグになる　五回分。

ビッグカラス百匹　敏捷力千アップ　三十日後に消える。

モブ竜十匹　攻撃力千アップ　三十日後に消える。

水ゾンビ五百体　聖水　五百回分

以上が身についたスキルである。どうやら水流のドラゴンは未定の中に位置していて気付けなかったようである。五匹でちゃんとしたスキルになったようであるし。

一回のろわれたことに俺はびつくらこいた。イルカを殺しすぎたのである。サイエンスイルカだがその後にブラックイルカを倒し呪いを解除した。体感スピードを三倍にできるようになった。のろわれていたとき体感スピードがずっと二倍だったから全部スローに見える会話が大変であった。

ウツドクジラは池で暴れていたのをぶっ殺した。水流の獅子はクエストで倒した。なんか、水流の獅子の鬣がほいというコレクターがいたのである。もちろん回収した。大きさはライオンの五倍く

らいだろうか？　ぶつたまげたね。

水流のワカメにいたっては、ただ漂っているだけ触ると痺れるので剣だけで攻撃した。

フグドリとビッグガラスはセットでやってきたため片端から倒した。

モブ竜はインバーサル聖都に襲ってきたのを倒した。防衛クエストのようであった。大きさは水流のドラゴンの二倍くらいでぶつたまげた大きさであった。死傷者はださずにプレイヤー同士で協力して倒した。

水ゾンビはある村に訪れたとき村人が全員ゾンビだというアクションに見まわれ倒したものである。

そうやってなんとか一ヶ月がたった。水星の色々な都市にもいった。

一つ目がアトランスという都市であった。大きな都市で水の船が車の変わりになって店めぐりをしたものである。

二つ目がリュウグウであった。そこは色々な海の生物が経営していた。モンスターではないのを確認して色々と会話したりもした。

そのほかにも個性的な都市やら村やら町をたどった。

そして、俺たちはようやく天王星にワープしたのであった。

『天王星のボスを倒すのにまだかかりそうだから天王星で準備しておいて空船が必要だね、天王星のボスの名前はウーラノス、天王星って意味だけど巨大な天使が巨大な空船に乗ってるのいつも移動してるからそれを突き止めるだけで時間がかかるからもうちょっとまってね』

ルミの説明はこうであった。ウーラノスそれは天王星という意味でギリシャ神話と関係があった気がするが。天王星には着たことがないどうやら空船という道具があって空を飛ぶようである。

ワープが終了して目の前に広がる景色に俺は啞然と口を開いてしまった。空だ。空が目の前にある。雲が下方にある。信じられない。柵があるだけで架け橋がある。そこから落ちたら地面に直下か？と思いきやどうやら、地面自体がないみたいである。

惑星自体がガスっぽくなってる。いや、空洞のようで真ん中に核があるようだ。心臓のように赤く光っている。何かの生物を連想させられる。柵から身を乗り出してみていたが俺は気付いた。落ちたら確実に死ぬ。

すると目の前にリリカットが笑っていた。

「お前、天王星始めてだろ」

「そうだけど？」

「落ちても死なないよあそこの核に吸い付いてワープさせられるだけだから」

「そっか」

「だけどガス状になってる雲の中には生き物がいてねそれに襲われたら終わりだよ」

「ははは」

俺は苦笑するしかなかった。

「さて、空船を予約しにいくぞ」

「予約？」

「知らんのか？ 天王星では予約しないと空船が手に入らないくらい混むんじゃよ別名天使の世界とも言われている。雲の上にある都市だからな見てみる霧で見えなかったじゃろうが」

霧が晴れていった。そこに広がっているのは無限に広がる都市。いたるところ架け橋をつむいで、つながっており空に浮いていた。いたるところから水が流れそれがべつの島上になっている架け橋の向こうの地に流れその水が下に落ちるのかと思ったら今度はべつの島に向かって流れ上に上がっていつている。

「あれはどんな原理なんだ？」

「原理は魔法じゃよゲームじゃかな」

老人が笑った。

柵がかけられ沢山の島と島とつながり架け橋一つ一つの島には沢山のいえがありそれが都市になっている。酒場も見えたり俺たちはゆっくりと観賞しながら歩いた。

船着場があった。空を見ると沢山の船が飛んでいた。信じられない光景であった。

船着場には屈強な男がいた。

「あんたら、空船を予約だろ後二日まってくれ」

「二日も？」

「今ボス討伐で予約が沢山殺到してるんだよ造船所でも大量につくつてる」

見てみるとNPCじゃなかった。名前があり光っている。頭上に表示される名前が光っていればNPCでないと判別できるのである。

「俺たちはボス討伐なんだけど」

「それなら天界騎士団に言えばすぐに取り寄せてくれるだろう向こうにあるから」

指を指された場所は沢山の建物がある場所であった。分かるわけがないが頷いた。

俺たちは船着場のおっさんをあとにして街に向かった。この都市の名前をエンジェルスタッフ首都というらしいエンジェルたちが昔住んでいた伝説が残っているのだとかすごい向こう側に城が浮いている。あれから、空にと架け橋ができて戦争がはじまるのである。まだデスゲームが開始していなかったころ天界騎士団があそこを拠点に沢山の星を制覇していたのである。

今ではそんなことはしていらないらしいが。

友達登録を利用することにした。

「着ただけどさ空船が借りられなかったんだけど」

『あ、まってね場所はどこ?』

「ワープからでたところの近く」

『そこでまって』

しばらくするとルミがやってきた。彼女がこちらを見てにっこりと微笑んだ。相変わらず可愛かった。もうたまりません。

もちろん俺と彼女の抱擁がはじまった。じつくりと抱きしめあつてから離すと、彼女がこほんと咳払いして。

「ようこそ天王星へ空船はギルドの船着場に大量に用意してあるわ今ボスを探してる最中なのボス討伐の人にはもうパーティーを組んでもらって探してもらってるわ合計人数は二千人よ」

「結構集まつたな」

「どうやら、神様の発言が功をなしたようなの」

「そりゃ、特別なスキルが身につくって言えばみんな飛びつくわな」

「募集はもう終わってるけどあなたたちは特別よ」

「ありがとうございます」

「それとカイザーさんならもうボスを探してるわ彼女、空船じゃなくて竜に乗ってきたのよ」

「まじか」

「手なづけちゃったみたい」

「どんだけ、ミラクルなんだよ」

モンスターをてなづけるためにはそのモンスターを最低でも千匹は倒していないと駄目である。そして千匹を倒したあとに肉類など好物を与え続けているとチェスの駒みたいになる。それが手なづけた証なのである。

チェスの駒になったモンスターはそのチェスを置くだけで召喚することができる。召喚したモンスターはいつでも一緒に戦ってくれる。一度倒されるとチェスの駒に戻って二時間は召喚できないシステムである。

一応スキルでの召喚もあるが手なずけたほうが効率がいい、スキルだと回数が決まっている。のろわれれば別なのかもしれないが。

俺たちは彼女の先導を元にギルドに向かった。羽かざりのついたギルドの看板がありそこにはいると数百名の人たちが忙しく動いていた。みんな大きな地図に矢印をふっている。

ハルスカットさんが机で寝ていた。隣ではハイブンさんが地図とにらめっこしている。

「見ての通りボスが見つからないの」
「ふむ」

俺は頷いた。どうやら、物事は簡単には進まないようである。折角強くなったのに宝の持ち腐れではないか。

「でも目撃情報はあるんだよな？」

「うん、あるわ」

「なんでいきなり姿を消したんだ？」

「たぶんサイタルがあるんじゃないかしら一ヶ月に数度しかでてこないとかそれまで、どこかの場所で隠れているのだとか」

「うむ」

俺は頷き思案を続ける。どこかに隠れる？ 空の中で隠れる場所？

俺は考え続けていたが埒があかなかった。

俺たちはギルドの裏手に回されて空船を貸してくれた。

俺とセイハツ老人とリリカットでちょっとこらへんを探検することとなった。ルミは慌てて戻っていった。

空船の操縦の仕方は至ってシンプルである。上の棒を倒すと前に進み下の棒を倒すとブレーキがかかる。右の棒と左の棒をずらすと旋回するのである。ちょっと操縦するのに時間がかかった。

空を漂いながら右の棒をちょっと上に倒すと上昇を始めた。

「なあ、どこに行く？」

「そうじゃなちよつと知り合いをたずねたい大賢者仲間じゃ」

「なんか嫌な予感しかしねーんだけど」

「まあ、気にするな」

そして、セイハツ老人が棒を先導してコントロールしてしまった。セイハツ老人は手馴れたしぐさであつという間に前へと進んでいくすれ違う船たちを追い越し追い越され色んな角度から通り過ぎ。さらに上へ上へと向かう。

気付いたら天王星の領域から出そうになっていた。空いちめにバリアーがあつて通れないようになっていた。

だが、セイハツ老人はにやりと笑つてそこをぎりぎりの状態で進み始めた。

しばらくするとぎりぎりの場所に小さな島が浮いていた。そこは大きな塔があり空にと向かつていた。

バリアーぎりぎりまで塔がつながっていた。

俺たちはそこに空船を停泊させると一人ずつ下りていった。もちろん縄で固定するのも忘れない。

セイハツ老人が塔の中にノックもなしで侵入するとまず真つ先に目についたのは巨大な地図であった。階段がカタツムリみたいにぐるぐる巻いてあっていたところを書物だらけであった。ワープ所みたいな場所も見つけた。どうりで船がないわけだ。あそこから、街に食料やらをかい出すのだろう。

セイハツ老人は階段を上り続けた。

そして、たどり着いた場所は望遠鏡がおいてあるところであった。一人の老女が望遠鏡を覗いていた。

「これは、セイハツ久しいな」

「ミミジヨよ久しいではないか」

ミミジヨと呼ばれた老女はにやりと笑って、こちらを向いた。

手をひらりと動かすとお茶のポットが宙に浮いてそれが、台所に向かつて現れると次にお湯を沸かし始めた。お湯が沸いたらポットに注がれ、ハーブが入れた。カップが浮いてきて一人一人の手におさまりポットから茶が注がれた。もちろんミミジヨは手しか動かしていない。

椅子に座って微笑んでいるだけ。

「こいつはな意思の手を使える。天王星のスキルだよ、確かエンジンエルバッドを5百匹倒して一ヶ月だけ使える代物じゃったな」
「その通り」

彼女が微笑んだ。

「わしは、天王星の大賢者ミミジヨだよ。そっちは水星の大賢者セイハツ、一つの惑星に大賢者は何人もいるその一人だとおもっておくれ」

「紹介はいいからまずは、情報を知りたいお主もボス討伐に参加しておるのじゃろう？」

セイハツ老人がずばり聞くと。

「もちろんじゃ。今情報を集めておったところじゃよ、NPCから色々な伝承を聞いた。天界騎士団め探すことばかりして伝承を探すのを忘れておるわ。いつの時代にも語り手がいるものだ」

ミミジヨが笑った。

セイハツ老人が頷く。

「その通りじゃ」

「分かったことを今述べよう。わしもそろそろ天界騎士団に報告しにいくところじゃったのじゃよ、そこにお主セイハツが現れた。久しぶりで笑える」

ミミジヨが微笑んでいる。元恋人って仲なのだろうか？
ちよつと不思議に感じたが。

ミミジヨがただ告げた。

「ウーラノスは、一ヶ月に三度訪れる。天王星の位置で満月するとき

にだけ姿を現すと伝えられている。そして、それまでウーラノスは、雲の中で眠っているといわれている。その雲の場所を、エンジェルクラウドと呼ばれており巨大な雲じゃ、そこに侵入するのは普通に考えて無理じゃ、次の満月は三日後じゃそれまで待つしかないがただ待つのではつまらんちょうどエンジェルクラウドの場所は見つけておいたわい」

すると望遠鏡を壁に向けた今まで空だったが。

「見てみる」

俺は頷き、望遠鏡を見つめた。

そこには、はるか空まで続く無限大で巨大な雲がそびえていた。まるで核爆発のきのこ雲のようなあの大きさの雲がそびえており幻想的であった。

「あそこで待ち伏せをしたらすぐに倒せないか？」

老女がにやりと微笑んだのであった。

12話 天王星の環境（後書き）

水流のドラゴンから約一ヶ月後のお話です。彼らは成長したのでしょうか、これから見つめてあげてください、見てくれるだけで嬉しいです。

13話 ミミジヨ会議（前書き）

ウーラノスが暴れます。主人公も暴れます。見てくれると嬉しいです。評価くれると嬉しいです。感想くれると感激します。著者の妄言はほおってストーリーへどうぞ。評価くださった方がありがとうございます。お気に入り登録してくれた方も感謝です。

2011/10/18 少し修正しました。

13話 ミミジヨ会議

ラット百匹 水撒き。一週間分

エレファン五匹 水鉄砲 八十回分

グール一匹 火星属性耐性十九日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 十九回分。

スロール五十体 ウンディーネ召喚 五回分。

オルゴブリン二十匹 知力五百上昇 二十七日後に消える。

ウォームバエル五十匹 水の盾 五十回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

ウールラビット百匹 氷柱攻撃 百回分

水流のドラゴン五匹 水の槍 五百回分。

水流の獅子五匹 水星属性五百アップ 四十七日後に消える。

水流のワカメ二百匹 ワカメ斬 二百回分。

ウツドクジラ二匹 全ステータス二割上昇 三十七日後に消える。

サイエンスイルカ二百匹　呪い　体感スピード二倍　解除方法ブラックイルカを倒せ。

ブラックイルカー匹　体感スピード三倍　常備スキル。

フグドリ三十匹　トゲフグになる　五回分。

ビッグカラス百匹　敏捷力千アップ　二十七日後に消える。

モブ竜十匹　攻撃力千アップ　二十七日後に消える。

水ゾンビ五百体　聖水　五百回分

仮想『水爆発』　使用回数∞

ミミジヨの調べた結果の内容が天界騎士団に伝わり全部隊がそのエンジェルクラウドの前にて野営することとなった。俺たちは一応大きな船に乗っている。戦艦型空船と呼ばれるそれにパーティーリーダー数名と俺とセイハツ老人、リリカット、ルミ、ハルスカット、ヘイブンさんが乗っている。

みんな机に座って会議を待っている。ミミジヨさんも後でやってくる。ミミジヨさんがくるまでみんな待機であった。みんないかめしい顔をしている。

しばらくすると一人送れてやってきた。

タンカー部隊のリーダーで。チットである。あの時死に掛けたのをルミが助けた人物で今はリーダーとなっている。他のパーティーリーダーは数十名乗っている。本当はパーティーリーダーだけでも

数百は越えるために代表者を募ったわけである。

みんなが考えごとをしている中、ミミジョが入ってきた。彼女は黒板みたいな場所に名前を書いた。

「ミミジョじゃ、よろしゅうなこれから説明する。お主たちが探してばかりいたときわしは伝承を調べておった。RPGの基本は情報集めじゃぞ？ ルミよそれを忘れてはおらんか？」

ルミが真つ赤になって謝る。

「申し訳ありませんマスター」

マスター？

セイハツ老人が耳打ちしてくれる。

『もともと、天界騎士団を率いていたのはミミジョなんだよその後継者としてルミが選ばれたそうだよ、わしは知っていたがルミって子に後を譲ったとは知らなかったよ』

セイハツ老人が唸っていた。

そんな話があったとはまったく知らなかった。

「では聞いてくれウーラノスの弱点は天王星のスキルと土星のスキルじゃて」

「マスターなぜ分かったのですか？ 水星のときなんかぶつつけ本番だったのに」

「まあ、聞けまずはNPCに伝承に詳しいやつが数名いた。やつらが語ったのはウーラノスが避けていた道じゃそこから導きだしたまじや天王星スキルは当然としてなぜ土星か、この星には土があまりないそして、なぜやつは空ばかりを漂うのか？　そこから導きだした結論じゃ」

「はい、違っていたら？」

「違っていたらその時はその時じゃ」

ミミジヨが不敵に笑った。

ルミの発言をたしなめると。

「では、やつの行動パターンについて知っていたNPCの言葉を借りようか」

すると、ミミジヨの口からまったく別人の声がした。

『あれは満月の時だった。巨大な天使が巨大な船に乗ってエンジンスタッフ首都にやってきた驚いた旅人が攻撃したらウーラノスは逃げるふりをして空中戦にもっていき船に引き込んだ。旅人は戻ってこなかった。戻ってきたのは骨となった死体であった』

「というのが伝承に残っておる。この旅人はどうやら防衛だと勘違いして責めたようじゃな、恐らくウーラノスは人間と会話したかったのだろう」

「なぜそう思うのですか？」

俺がそう尋ねると彼女が微笑んだ。

「ウーラノスは天使だ。つまり神の使いじゃそれから考えて民の声

を聞く役目がある。それをやろうとして攻撃された。怒ったのじゃないそれ以来ウーラノスが人に近づくことはないそうだ」

「なるほどな」

チットが頷いている。

他のパーティメンバーも頷く。

「気になるところがあるのですがその旅人ってプレイヤーですか？」

「いや、NPCじゃプレイヤーならエフェクトになっているな」

「なるほどです」

ハルスカットが頷きみんな黙り始めた。

「問題は空船から落ちたら赤い核に引き寄せられて首都に帰らせられることじゃ、またエンジェルクラウドまでいくのに数時間はかかる。戦力の低下を防ぐため全員腰に縄をつけ空船につなげるようにしておけ、縄はショップで買える。今すぐ連絡してくれ夜まで時間がない今日は満月の日じゃ」

全員が頷いた。さっそく他のパーティリーダーに連絡しているものがある。ヘイブンが外に出て行った。他のメンバーに連絡するようである。

俺たちは全員がここにいますから大丈夫だろう。

問題はショップまで買いにいったとしても数時間はかかる。でもまだ朝だから夕方までには戻ってこれるだろう。

ここがエンジェルスタッフではなくエンジェルクラウドなのだと実感させられたのである。

それから会議はお開きになった。

俺たちは空船を使い首都まで戻った。ショップに入って縄を購入した。長さは他の船に入っても大丈夫なくらいとても長くしてもらった。

ついでだから今まで倒した分の魂をアイテムに変換するつもりでウンディーネを召喚したのであった。

「こんちゃーっす」

「こんにちは」

「ではでは変換しますよ、うお、すごい、こんな魂見たことないです」

「はいはいこれとこれですね」

渡されたのは、大きなポーションであった。それが三本あった。

「それは、ヒットポイントが0になったとき勝つてに使用されるアイテムです。一度死んでも大丈夫な便利グッズですよ」

「まじか」

俺は啞然としてしまった。

一人一本ずつ配りそういえばカイザーとあっていないことに気付いた。

「カイザーっているんだよね？」

「いるに決まってるでしょ、あの女は」

リリカットがつんどんけに言い放った。

「孫はいるじやろうな会議の内容はわしから伝えておいてあるからな」

「あんたいつの間にそんなことやってたんだよ」

「まあ、老人の知恵じゃて」

そして、俺たちは空船に乗ってまたあのエンジェルクラウドまで戻った。

みんなが、配置についている。俺たちは、ちよつとでもステータスが上がればと空船の上でステーキを食べ始めた。

その匂いにみんなの腹がなり始める。

ありがた迷惑なプレイヤーな俺たちであった。

みんながこちらをうらめしがってパンを齧っていた。

このステーキ肉は水流のドラゴンの肉である。レアドロップしてしまったのである。

ステータスが二割ぐらいさらに上昇した。一時的にはせよちよつと安心する。

夕方の三時が過ぎ四時になり太陽が沈み始めた。お月様が出てこようとしている。後もう少しである。俺たちは身構えた。いつでも突撃できるようにセイハツ老人が空船の操縦を握っている。

六時になった。月が支配した。満月は真っ赤であった。真っ赤とつか茶色とつかちよつと変な色である。

カイザーが動いた。大きなドラゴンに乗って旋回している。こち

らにきた。

「おい、きたぞ構えろ」

カイザーが叫んだ。

そう着たのである。雲の隙間から巨大な船が現れた。なんという大きさを信じられない都市そのものではないかエンジルの大きさを甘く見ていた。人間の十倍はあるつかという巨体である。

信じられなかった。船も都市が動いているような大きさである。

俺たちは空けた口が閉じられ無かった。

そして全員に共有指示チャットが配られた。あらかじめ名前を記してある名簿があつてリーダーがこちらに配ったのである。ルミたちは戦艦型空船に乗っている。

一応俺たちはパーティーメンバーである。

俺、ルミ、リリカット、セイハツ老人、ミミジヨ、ハルスカット、ヘイブンというメンバーでパーティーを組んでいる。カイザーは一人で行動するようである。

パーティーチャットで遠く離れても声が聞こえる。

『大きい、信じられない』

「まったくだ。巨大すぎるね」

俺も頷く、ルミの声がとても絶望的であった。

「でも安心しろ俺たちの一ヶ月は無駄じゃなかった。それはルミだって同じだろ？」

『もちろんよ』

『では、団長、号令をお願いします』

ハルスカットの声がさえぎった。

そして、共有指示チャットに変わる。

ルミ―全軍、突撃―その場で指示を下します。タンカー部隊はウーラノスにヘイトをお願いします。ヒール部隊はタンカーをお願いします。他のパーティーの方もタンカーにヒールしてください最初の人はチットです。次がカルンダです。その次がミックです、その次がフェイスです。その次がシールフです。その次は。

という感じでタンカーが百名もいた。信じられるか？ マゾ職なんて呼ばれているが相当な数が揃っていた。

A アタツカ

W 魔術師

T タンカー

S サポート

Y ユニーク

それぞれ分かれたメンバーたちだが混雑しているパーティーもある。タンカー部隊はヒールが沢山いる。タンカー一人にヒールが九名である。タンカー部隊はタンカー一人でパーティーを組むのである。

だから、タンカーパーティーだけでも百パーティーはある必要があるのだがヒールが足りないためにタンカーが一つのパーティに二名くらい、いる場合がある。

ヒールも希少な職業である。といっても何属性を選ぶかによって選ばれるのでありあるクエストをクリアして身につくものを職業と呼ぶ。

大賢者のクエストはとても難しいと聞いたことがある。

この世界には沢山の職業がある。そこに属性があるというわけである。

職業によってスキル上昇値が変わったりするそうである。

まあ、ここではあまり詳しく話しはしないが。俺はほっと一息ついて空船が巨大船に突撃して縄で固定した。梯子をかけて上り始める。

巨大な船の中には一匹の巨大なエンジェルがいた。彼女がこちらを見て襲い掛かってきた。どうやら俺が一番乗りだったらしい俺タンカーじゃありません、しかし、なめんじゃねええええ。

俺は水鉄砲を連射した。全弾尽きると俺はウーラノスがもっている巨大な鎌を見て絶望の声をあげた。振り上げ振り落とす。それが俺にぶつかる直前に水の盾を出現させて防ぐ。体が吹き飛ばされた。ちよっとヒットポイントが削れている。

雄たけびを上げたと思ったら後ろに走っていった。そこにはチツトがいた。ヘイトをかけてくれたようである。俺は一安心すると武

器を構える。

聖なる剣はアイテムボックスにしまわれている。今の相棒は剣と盾である。二つともレアな装備であり、鍬もアイテムボックスである。

―ウォータードラゴンソード―

―水流の盾―

である。

俺はこれを握り締めて走った。ウーラノスの背中に何度も斬撃をお見舞いする。五コンボを食らわせ跳躍して後ろに下がると巨人化した。リリカットが。

―ウォーターコンボウ―

でもって叩き伏せる。何度も叩くそれでもウーラノスよりは小さかった。

ヘイトがたまらないようにリリカットも下がった。

セイハツ老人が杖を振り絞り放った。

巨大な水の塊が飛ばされウーラノスの頭をぬらす。そして次にスキルを唱える。

空から雷が降って来た。それがぬれた髪に伝染して全身の攻撃が響いたようである。

これがいわゆる技コンボである。

雷なんか使えたのか。

これには驚いた。

水星でも金星スキルの雷技を使えることを知ったところでそのモ

ンスターを倒さないと意味がなかった。

俺は上を見た。カイザーがドラゴンから落下してきた。ドラゴンが火の塊を解き放った。それがウーラノスの顔面に直撃すると爆発した。

ウーラノスの標的が変わったようである。しかしエンジェルといっても空は飛べないようである。チットに視点が変わった。

カイザーが弓矢を構えて連打で浴びせる。水星属性が付与され体を直撃して水しぶきをあげる。

ルミとハルスカットにハイブンがやってきた。さらに他のパーティーたちがやってきてそれぞれ攻撃が始まる。

ルミ―アタッカー部隊攻撃してもっと攻撃してヘイトは全然たまらないと思うこれ強敵だよ。

ミミジョーいいかい相手を舐めるなどにかく、足を狙え伝承では足が弱いときている。だから船に乗っているといわれている。翼はもがれたそうだ。翼も狙えるやつは狙え恐らく急所だ。

承知。

俺は走った。氷柱攻撃を背中にぶつけた。するとウーラノスが俺に目標を変えた。ちよつと強かったかな？

俺は体感スピードを三倍にした。スローになっていくこれは五分間だけ使用できる再リロードに五分を必要とする。

エンジェルが振り下ろした鎌を俺は上手く避けた。体が動くなだらかに動きウォータードラゴンソードをすべらせる。つるつとすべる。水星属性の特徴である。すべらせる。何度も、次の鎌が振り下

ろされた。

俺は跳躍してそのまんますべらせ勢いをつけてウーラノスの足を走った。背中まで到達し剣を高く掲げる。垂直になっている。振り落とした。ウーラノスの悲鳴がとどろいた。

そして、ウーラノスが倒れた。

体感スピードが元に戻った。

周りではみんなが俺を見て、大きな口をあけている。

「あいつすげーぞ」

「すごい、すごい」

「あいつ見たことある。農民で戦争に出てたやつだ。確かデスゲムが始まる前に見たぞ」

「知ってる。農民だよ」

「伝説の農民だあああああああ」

そして、俺は微笑んで地面に降り立った。みんなが連続でウーラノスに攻撃をしている。ウーラノスのヒットポイントは減っているようだ。

ウーラノスが立ち上がった。

雄たけびを上げた。

異変に気付いたのは俺だけではなかった。

船が鼓動していた。

俺は失策をしてしまったのか？

いや違う。

そう、ウーラノスとは。

ミミジヨ―言い忘れておったがねウーラノスとは船自体なんじゃよ。その言葉でこの場にいる全員が大きな口を開けて叫びそうになった。

船が脈動した。

そして船が変形を始めた。

ウーラノスが船の中に溶け込んだ。

ウーラノスが無数に分かれたのである。しかも船の表面から出現する。数は数えて百体であろうか。

それが全部タンカーに向かっていくタンカーではさばききれない。

「全タンカー部隊一体につき一人だ。みんな動け速く動かないと死ぬぞ」

俺の叫びに共有指示チャットを飛び越えてその場にいたプレイヤーたちが動き出した。

チットが絶望の声を上げる寸前で全タンカーが動いた。一人一団コンビネーションとともに一体ずつ分かれた。しかも弱ると船の中と同化してどこから出現してくる。

船はロボットのような形になっている。

そして、その船が生きているように動いている。向かっている先はエンジェルスタッフ首都であった。

こいつは、首都を壊す気か？

『防衛クエストが発生しました』

天にとどろく音がした。

『ウーラノスを討伐してください残り三時間以内です。それいないに倒せないと首都が崩壊します』

そのNPCらしき声にその場にいた全員が氷ついた。こんな化物を三時間以内だと？

俺の脳内でスパークが始まった。

13話 ミミジヨ会議（後書き）

天王星は空船が必用ですがカイザーに入らないものです。カイザーはバシバシ強くなっていきます。主人公を忘れないように頭のなかに矢印をたてておくことにします。どうやればと慌てる著者でした。拙い文章ですがよろしく願います。

14話 ウーラノス（前書き）

2011/10/20 少し修正しました。

14話 ウーラノス

ルミ―他パーティーの方スキルが余ってたからタンカーにヒールしてハルスカット―へばるな時間がせまってる急げ。
ヘイブーン―三時間以内よみんな、がんばって。

みんな分かっているのだ。がんばらないといけないのだ。エンジニアスタッフ首都には戦えない生産職系の職業の人がいる。何も知らない彼らは早く避難すればいいのだが問題は家やお店を持っている人なのである。その場を離れたりしないだろう。
そのことから俺はいやな予感しかしかなかった。

つまりウーラノスがエンジェルスタッフ首都を壊滅させたら最低でも五百いや千人の死者がでる。それは、プレイヤーに限られたことではないNPCでもある。

俺はじつとりと汗をかきながらすべてがゆっくりと見えていくのを感じていた。

体感スピード三倍を使った。リロードは完了した。カイザーが弓で何度もウーラノスのエンジェルに攻撃する。

今ではちよつと大きいくらいの大きさである。全部で百体いるのだからまったく嫌気がさすのである。

俺はまず右にいるエンジェルに向かい氷柱攻撃をお見舞いした。

さらにコンボで水の槍を出現させて剣を宙に放り投げた。水の槍を掴み投げた。

きんと音がなりエンジェルにぶつかつた。水しぶきとなり消える。

剣が落ちてきた。掴む。走る。体がスローだ。だが早くなってるはずである。

剣を構え何度も切りかかる。ヘイトが切れて俺にターゲットが代わった。んなもん、知るか時間がねーんだよ俺は盾でエンジェルの攻撃をスローで防ぐと剣を滑らせその勢いのまんま三連劇コンボをお見舞いした。

それでもよろけるだけである。一体だけにどれくらいの強さがあるのだ？

俺は空気を吸った。残り三分、体感スピード三倍が切れる時間である。頭の頭上に時間が表示されている。意識すれば見える。

あきらめるなあきらめたらそこで終わりだ。

「うつつうつつおおおおお」

大きな叫び声をあげワカメ斬を何度もお見舞いした。エンジェルがくらりと倒れそうになりこちらに鎌をふりあげて振り落とす。

トゲフグになった。

全身から棘が出現し鎌を防ぐ。俺は棘が抜け落ちるのを確認し地面のさきほどの水の槍でぬれた場所を滑らせた。ウォータードラゴンソードでもって上段斬を浴びせる。エフェクト光になって消滅した。残り時間が切れた。時間が戻っていくまるで時間が動き出したかのように近くにいた。タンカーが叫びだした。

「伝説の農民が一匹倒したぞおおおおお」

それが津波となつて。

「俺もだ」

「俺も倒すぞ」

「みんながんばれ」

「くじけるな」

「何度も這い上がれ」

「何度も立ち上がれ」

ルミ―そうよ、みんなで励まして。

チット―みんな気張れ死ぬな。

ミミジョーええ、チームワークじゃ。

俺は空気を吸い次なるターゲットを見つける。まだ、リロードが完了していないそんな時間は待ってられない。

俺は走った。まだ残っている氷柱攻撃で近くにいるエンジェルに連発をお見舞いした。尽きるとその場が水浸しを利用しウォータードラゴンソードを利用した。滑らせる。つるつとスベル。走る。

何度も走る息が苦しかろうが死にたくなかろうが走るんだ。いつしか、ぐるぐるとエンジェルの周りを超回転のようにぐると回り勢いあまって剣を回転しながら突き出した。

それでもエンジェルはもろに受けて立っている。どんだけヒット

ポイントあるんだよ、もちろんヘイトが俺に代わった。

「頭下げる」

後ろからカイザーの声がした。

俺は頭だけを下げた。頭上を水の塊の刃が飛んでいった。目の前のエンジェルことウーラノスに直撃するとひるんだ。チャンスである。

俺はジャンプした。そのまま一刀両断のように縦から切り伏せる。ずばっと切れた。だが、まだ立っている。ウーラノスが鎌を握り締めて振り落とす。

「今度は私だああああ」

リリカットが走ってきた。俺はからだをずらして、転ぶリリカットが巨人のままウォーターコンボウを振り下ろす。水星属性が付与されている。それが直撃した。顔面からぶつかり消滅する。

エフェクト光が光っていた。
残り九十八体。

まだだ。まだいる。

俺は冷や汗をかいていた。

ルミが走っている。二ふりの鎌を構えて宙返りをした。勢いをつけて走った。ルミが目の前をひゅんと横切った。

「あれは天王星スキル光斬じゃな」

セイハツ老人が見つめていた。

「あれは上級者向けのはずじゃ」

そして、ウーラノスの顔面に直撃する。くらりと倒れ次に鎌を二本あわせると空から一陣の光が降って来た。その光が鎌に集まると

『スラッシャーズ』

その声が響いてエフェクト光になって消滅した。

「あれは天王星スキル上級の光の祈祷じゃ祈祷スキルではない」

彼女なりに名前をつけているらしい。

「俺も倒したぞ」

数名のプレイヤーが叫んでいた。みんな叫びだした。

「こっちもだ」

「こっちも」

『残り五十体 残り時間は一時間半です』

無常にもNPCが告げるのは処刑宣告であつた。

冷や汗を流す。そんなに時間が立っていたのか。数秒と待っていると思っていた。そんなに時間が。

走った。もう止まるな。

一匹とぶつかつた。剣を振り下ろす。もうリロードは完了している。体感スピード三倍を利用する。とてつもないスローになった。よし。

ワカメ斬を何度もお見舞いすると敵がぶれた。そこに水爆発を使い顔面を粉碎する。エフェクト光になって消滅した。

「次いいい」

俺は走った。生存本能に引かれるまま俺は走る。絶対に死ぬものか俺は生きて生還してやる。絶対に生き残る。生への執着が俺のすべてのリミッターを解除していった。まるで、生きている実感を味合わされているように変な感覚が体を襲った。

気付いた瞬間三匹のエンジェルに囲まれていた。倒しすぎた。どうやら俺にタゲがまわったようである。俺は勘違いしていた一体で一人のタゲだと思っていた。全体で一体であった。綺麗にタンカーのおかげで分散されているのに俺が突っ走るから。

それでも俺は死なない。

ルミーいやああ

ルミの悲鳴が聞こえた。俺は死ぬのか。体感スピードがスローである。

すべての攻撃を盾と剣ではじく体が動くスピードなぞ時間の仮初にすぎない俺は命が燃え上がる寸前まで吹き出る。

ルミ―死なないで、シンベイ

あああ、もちろん死ぬもんか生き残る。俺は絶対に生き残ってやる。

構えた剣をぐるりと地面に滑らせた。盾ですべてガードする。回転した。ぐるりと回りすべてのエンジェルに攻撃する。エンジェルの表面に水の槍を出現させ出現させた瞬間に崩壊する。それがエンジェルに降りかかる。ウーラノスがびくりと反応する。

その表面にそって滑らせる。何度もすべらせる。何度も切り上げる。くるくると回転しまくる。俺は眼が回るのも構わず、ひたすら回転して敵を刻む。

回転が止まった瞬間、ヒットポイントが五分の一になっていた。俺は空気を吸いエフェクト光になり消滅するエンジェルを見守った。

アイテムボックスから回復ポーション超大を二個飲み干した。

次の瞬間やはり五匹に膨れあがった。ウーラノスが俺に向かってくる。タンカーが何度もヘイトをかけているが俺が倒しすぎたのだらう。

ちょうどカイザーも包囲されている。カイザーも倒しすぎのようだ。

「すげーぞ農民とカイザー、一人で何十匹も倒してる」

「あっちもすげー巨人が暴れてる」

「ハルスカットさんもハイブンさんもすげーぞ」

「ルミさんもだ」

「みんなすごいやつばかりだ」

全員が叫ぶ数千名のプレイヤーが叫びまくる。

俺は五匹と向かい合った。スローは止まっているリロードまで五分かかる。さてどうするか。俺は考えたが結論はでなかった。

剣を構える。

騎士道にそって倒すのみ。

走った。水の槍を出現させる。盾にぶつけ飛ばす。槍がエンジンにぶつかって消滅する。俺はそのぬれた地面をウォータードラゴンソードで滑らせ一回転し一匹にぶつかる。

だが、そいつは平気そうにたち剣を掴みだした。俺は引つ張るだが抜けない。他の四匹が俺の周囲にあつまり鎌を振り下ろす。

その時である。セイハツ老人が乱入してきた。

「まったく世話のやける弟子じゃわい」
「すまん」

セイハツ老人が全体に魔法をかけた。

彼らの動きが止まった。

「水縛りじゃ水があれば止められる五分だぞ」
「それまで攻撃しないよヘイトポイントを下げる」
「その調子だ」

『残り一時間残り二十匹』

「この調子ならいけるか？」

「いや、いけないね」

その声にはつととするミニジョがいた。

「恐らくこの船自体も消さないといけないよ。そのためには最低でも十五分は残しエンジェルらを消滅させ船に帰還し遠距離攻撃じゃ」

その声はびっくりするほど響いた。みんなの顔が頷いている。

頷き五分がたった。四匹が動き出した。同じ手は食わない。

走った。体感スピード三倍を使った。体がスローになり敵の動きもスローになる。俺が振り落とした剣を敵が防ぐ前にかわす。

何度も切りかかる。四匹同時の攻略は結構大変である。

一匹一匹の攻撃をかわして何度も攻撃をぶつける。
水の槍でぬらして滑らせるようにしている。

それを何度繰り返しただろうか？

気付くと二匹に減っていた。俺は空気を吸いスローが解除されるのを感じた。

すると敵の攻撃が早くなった。右肩をえぐられる。
ヒットポイントが減る。

何度もはぜる。ぶつかる。剣をはじく鎌がやってくる。
俺が水をすべらせそれをくると回転さるとようやく二匹を仕留めた。

まだ二十匹くらいいるだろう。カイザーも無事のようにだ。
俺は叫んだ。

「リリカット、空にバズーカを頼む」
「任された」

空で水が爆発した。それが地面に向かってくる。空で爆発する音が気持ちいいくらいであった。剣を空中で滑らせて何度も水に接触させる。足が速くなる。隣に併走するのはルミであった。

「協力するわ」
「ありがたいぜ」

俺は笑うと一緒に走って走った。猛スピードで走る。

『光のスピード』

そのような技だった気がする。だからそんなに早いのだろう。

俺とルミが片端からエンジェルを切り伏せる。すれ違いざまクロスを描くようにしてすれ違う後ろから四匹のウーラノスが走ってくる。俺とルミがまたクロスするターゲットが変わったようだ。

俺たちは何度も走りながら距離を開けていた。ついに俺とルミが

船の端っこにたどり着くと急ブレーキをし反転した。その瞬間に俺は剣を構える。水の槍を出現させ飛ばす。盾にぶつからせる。

槍がエンジェルにぶつかり一匹が消滅した。

ルミが呟いた。

『光の光線』

ぴつと光線が飛んでいった。一匹が消滅する。

俺とルミが一体ずつを請け負って隣同士で斬りあう。

ヒットポイントが削れるのを覚悟で水爆発を使う。爆発が起こる。敵がひるむ何度も爆発させる。

腰をずらし落とす何度も落とす切り下げる。

切り上げる。

腰を上げる。落とす、するとエンジェルがこちらを睨み鎌を振り上げる。

ルミのエンジェルが消滅した。剣をお腹にざっくり埋めるとエンジェルは消滅した。

俺とルミがあと一息つく。

『残り三十分です。残り二匹です』

ウーラノスがあと二匹だ。

だが異変に気付いた。やはり弱ると強くなるように最後の二匹はそれぞれ防御と攻撃で別れコンビネーションで攻撃してくる。プレイヤーたちが弱ったものから撤退を始めた。ミニジョーが叫ぶ。

ミニジョー弱ったやつはすぐに船に戻ることにヒールで回復するなヒールがもつたいない。

その叫び声は厳しいものであった。

俺とルミがそこに向かった。数千名のプレイヤーが群れになって戦っている。こちらでもW部隊とA部隊で交互に攻撃してT部隊は交代している。

俺たちは人ごみをぬいそこに到達した。

みんなが怖がって近づかない魔法ばかりをぶちかましている中に俺とルミが突撃を果たした。

二対二で勝負をする。負けたら死ぬそして勝ったら自由に近づける。

体からオーラを漂わせてただただ。ぶつかるために攻撃をするためウォータードラゴンソードを構えた。

水流の盾も構える。

ルミもふたふりの鎌を構える。

俺たちに未来はあるのだろうか？

いやあるのだろっ、それを掴め。

15話 コンビネーション（前書き）

句読点を少し直しました。15話を先に直そうと思いましたが他の話も直します。本当に句読点だらけで言われるまで、違和感があるくらいにしか捉えてなくてじっくり見ると問題だらけ本当に申し訳ありませんでした。

15話 コンビネーション

俺が一步踏み出すダンスをするように敵さんも一步踏み出す。ルミが一步踏み出すとやはり敵さんも一步踏み出す。

ここにロックンロールがあつたら俺は躍っているだろう。死の踊りである。俺が剣を突き出せば敵が突き出す、鎌が右頬をかすりヒットポイントをけずる。俺は、くると回転して地面をすべらせ後ろから逆そりに攻撃をあびせる、鎌で防がれ盾で顔面を叩きはじかれる。

ルミが二ふりの鎌を持ちながら距離をあけ連打で光線斬を浴びせる。エンジェルが身を引く。俺は転り水の槍を出現させ敵にぶつける。

水でぬれたのを確認しすべらせる。思いつきり下から上へと切り上げ。水爆発を浴びせる。爆発したがそれでもウーラノスは平気そうに元気でいる。

俺は空気を吸った。ここで、蹴りをつける。倒さなくちゃいけない。いっつか夢見た現実の地を踏むまで絶対に引けない。負けられない。みんなの願いみんなの夢。

俺の背中には沢山の背中があり、俺の前には沢山の人の骸がある。

俺は剣を振り上げて振り落とした。風が微風のように頬をなでる。鎌とクロスした。頬をエフェクトの傷が生まれる。傷がエフェクトの障害となっている。頬を離してとぼとぼと歩く微笑んだ。

俺は今夢を感じている。みんなの夢だ。俺は確かに感じている。そう、夢だ。夢を抱け、夢を感じろいつか見た平和な光景を夢見ろ。俺の背中でウーラノスが崩れて倒れた。エフェクト光になって消える。

「水時間斬！！！！」

時間を置いて斬撃がエンジェルにぶちあたったのである。空気中の水分を氷の刃に変形させそれが時間後に斬りかかる仕組みである。

俺は、剣を鞘にしまつと微笑んだ。

ルミが闘っている。

「さあ、お前の番だ」

ルミが微笑んで。ルミの夢を描いているようである。ルミの夢はなんだろう？

そんなことを思った。

「なにこれ？」

ルミが違和感丸出しの声をあげる。ルミの夢を感じる。

「ルミ、お前は願った。力を、願った、夢を、なら、それが力だ」
「私の願いは、みんなで現実に戻ること！」

その時ルミの背中に無数の光の翼が出現した。それがルミの妄想

の力であることは当然であった。ルミが翼を飛翔させる。空を飛び宙で鎌を振り下ろす。

ウーラノスの頭上でくるとまわり背後に回った瞬間翼が鎌に浸透していつて、光の鎌となる。

『シャインサード』

「それが、お前の仮想の技じゃ」

ミミジョが叫んだ。

「はいマスター」

俺は微笑んだ。

光の鎌が振り下ろされウーラノスが消滅した。残り十四分である。

ミミジョーみんなはすぐに空船に戻ること次に遠距離技を持つものはこの船を破壊しろ。

それを合図にみんなが撤退を始めた。俺ももと着た道に戻って空船に入る。リリカットもセイハツ老人もいる。空ではドラゴンに乗っているカイザーもいる。

みんなが船から下りると船はロボットのような人型をしていた。巨大な翼を持っている。

『私は人と接触したかった、さびしかった、ずっと一人で永延と』
ウーラノスの声がした。

『私はただ。人と話をしたかった。だから、あなたたちを滅ぼして乗組員にするこの船はノア、この船はノアの箱舟』

彼女が神話上に登場する船を名乗った。意味が分からなかったがなんとなく神が仕掛けた。ちよつとした悪戯だと直感した。

『私は人を運ぶ首都など必要ない人は船に乗って新しい場所に行く』

「それはお前の願いだ。夢にすぎない」

「そうよ、それは夢よ」

リリカットが叫んだ。

「そうじゃな夢にすぎん」

セイハツ老人が叫ぶ。

「それは夢でもあなたは勘違いしている。人はノアの箱舟が無くても生きていける」

ルミが叫んだ。

『なら、それを明かしてみよ』

ウーラノスが手を振り上げた。そして振り落とす。空船が緊急回避する。

ミミジョー——いいかい、みんな顔にめがけて魔法をぶちこめええええ。

ミニジヨの叫び声。俺たちは大きな声でスキルをつかった。

俺は水の槍を飛ばした。空中を飛んでいく何本も飛ばす。幾多の属性の遠距離攻撃が飛来する。ウーラノスの顔面に飛来して砕ける。ウーラノスが悲鳴をあげる。それでも火蓋はきっておろされた。無限に続く攻撃についてウーラノスが小さくなり始めた。さらに変形しようとしているようである。それが、大砲のような形になることに俺は気付いた。ウーラノスは最後の力をふりしぼって遠距離攻撃で首都を壊す気でのいるのだ。

そうはさせるか。

俺はジャンプした。ちょうど下にカイザーがいた。

「うおなにするんだ」

「カイザーあそこについてくれ」
「わかった」

俺とカイザーが空を飛ぶ俺は、また船に戻った。着地すると船の中に入った。動力源はどこだ。探せ。

見つけた。巨大な銅像であつた。天使の銅像である。

これだ。俺が大きな声で叫んで叩き壊した。

エネルギーがたまりたまつて爆発する。エフェクト光になって消滅する。俺は、足場をなくして落下を始める。俺がこれに気付いたのは単なる当たり前なこと遠距離攻撃をしようと大砲になるということとはつまり玉があるということである。だからここに来た。問題

は、落下して無事でいられるかだが。

体が風にまみれて揺られる中、一頭のドラゴンがやってきて俺をくわえた。

「まったく、無茶するなよ」

『防衛クエストが完了されました。おめでとうございます。首都は守られました』

なんだかねNPCに恨みを持つようになってきたよ。

宙に鍵が浮いていた。

俺はドラゴンの口から這い上がってカイザーの隣に座ると鍵を掴んだ。巨大である。俺たちはそれからようやく戦いから開放されたのであった。

ボス討伐にかけた時間約三時間 死傷者0 けが人数十名、ドロップアイテム天王星の鍵。身についた能力。

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

これが、数千名のプレイヤーに身についたスキルであった。

そして、お約束みんなで首都に戻って鍵を差し込んだ。空を見上げた。雲が晴れている。まるで雲が生き物のようにうごめいていた。それが、形作り沢山の流れ星をつくっていた。雲が星になってふってくる。首都に雲の塊がぶつかる。すごい幻想的なシーンであった。みんながパニックになったが神のお告げだと気付いてみんな冷静になれた。

俺は静かに見守った。おのずと、雲の形が映像になりひとりの老人の姿をとりとめた。

『二体目のボスを倒したようじゃな、おめでとう残り六体じゃ見つけれられることが出来るかな？ 今回は難しかったはずじゃろうわしの中では、最高の戦いの場所だと思ったよ何せ空だからね空から落ちたら？ スリルがあるじゃないかそれで、またがんばりたまえわしはお前たちを見守っておる、いつかその世界から出れたらいいなでれるかな？ わしを倒さないでれないぞ？

倒せるかな？ わしは待っている。いつまでも待っているぞ時間など、時が解決してくれる。君たちがゆっくりと攻略するのならわしも腰をすえて待つとしよう、では御機嫌よう』

まったく腹が立つ内容であつた。みんながため息をついた。

それから、みんなそれぞれの旅に出た。次のボスを倒すときまた集まることを誓って俺たちはまたばらばらになっていった。

■ ■ ■

現在俺はルミのギルドの中でお茶を飲んでいる。リリカットとセイハツ老人は買出しに向かつてしまった。しばらくここで生活することとなりルミは大歓迎でそわそわしている。何せ、俺とルミの部屋が隣同士で今もルミが俺の部屋に入っている。

「それにしてもここのギルドはでかいな何個部屋あるんだ？」

「えつと五十個」

「うへええ」

俺は唸った。

「地下にもあるからそれで何か用意するものない？」

「いやないけど」

「いやあるでしょ」

彼女が怒鳴った。

「そうだなみんなでバーベキューをやらないか天界騎士団だけでもさここにいろやつだけでも五十名はいるんだろ？ そのほかは全員、他の惑星のボス探したろ？」

「うん、そだね、いいね、バーベキュー、楽しそうだ」

「肉類なら、セイハツ老人が買ってくるだろうからさ」

「それなら、倉庫からすごい肉もって来るね昔にね、天王星で巨怪獣を倒したのなんか羽があつてねその肉があるのまだ食べてないから確かステータス一ヶ月三割増加だよ」

「すごいもんあるな」

「じゃあ、準備するから」

俺は、うつらうつらとしながら外に出た。相変わらず雲が輝いていた。綺麗な空である。雲の上にある雲かちよつと幻想的である。しばらくぼーっとしていた。何もかも出し切った感じである。何か脱力を感じた。不思議と、今力が芽生えることはない気がする。俺は空気を吸ってため息をついた。問題は次である次はまだ見つかっていないし情報すら集まっていない。これから遠い時間がたちそうである。

俺は椅子に座ってベランダから見える外の光景を見つめていた。ここは、庭があるベランダで天界騎士団のメンバーが休憩する。休

憩所みたいな場所で数名の天界騎士団がこちらを見ている。

俺は欠伸をかみ締めた。やはり眠いだが寝るわけにはいかないバーベキューしようと言っておいて言った本人が寝たらルミに殺されかねない。

ふうと一息つくとき、セイハツ老人とリリカットが戻ってきた。隣にはカイザーがいた。カイザーは相変わらず仮面をつけていた。

「バーベキューするってさ」

「そうか」

セイハツ老人がにやりと笑った。

「準備できたよー」

ルミが叫んだ。

俺たちはそこに向かった。セイハツ老人がアイテムボックスから大量に肉類と魚類を取り出し野菜ときのこを取り出した。

俺たちはひたすらかみ締めるようにだれをこらえてバーベキューセットを使って焼いていた。匂いにさそわれて天界騎士団のメンバーが集まってきた。合計で五十名は越えるだろうか？

別な支部からやってきたやつらもいるそう。俺たちは大層にぎやかに食べつくした。

まだまだ肉は残っている。野菜もある。

みんなだべりながら食っていると、副団長のハルスカットがやってきた。

「それにしてもシンベイさんには驚かされました強すぎます。ぜひともわがギルドに来てくれませんか？」

ちゃっかりスカウトしようとしているようだ。

「いや俺は一人があつてるし、ギルドを作るなら自分がマスターになるよ」

「そうですかちょっと残念です」

「気にするなよ今度は俺がお前を誘う番だぜ」

「それは怖い」

ハルスカットさんがカウボーイ帽子を閃かせながら立ち去った。
ヘイブンさんがやってくる。

「ルミをよろしくねたまに合いに来て」

「もちろんだよ」

「ルミさびしそうだから」

「大丈夫ルミは強いから」

「それは見た目だけ」

彼女がそういい残して立ち去った。ルミが隣に座った。

「楽しんでるかい」

「楽しんでるぜ」

俺は苦笑した。

「それにしてもお前もバグを使えるとはな」

「仮想っていうんだっけ？ バグなんだよね、この世界にはない、いやあるけど、あつた言葉を組み立てて作った。いわゆるゲームの

バグ」

「その通りだよ師匠が言うにはだけどね」

「ねえ疑問に思ったんだけどバグそのものも力だったりして？」

「どゆこと？」

「神様って何でも知ってるでしょ？ だから、そのバグも力として認めているからこうして消さないんじゃないかなって」

「なるほどねそれならお師匠も気付かないわな」

「ねえ今日一緒に寝よう」

「そりゃ無理だ」

「何もしないから」

「なんでだ？」

「なんかぬくもりを感じたくって」

「それならいるだろ近くに、リリカット、付き合ってやれ」

「やだー」

ルミがダダをこねた。リリカットは何事かとあたりをきよろきよろして肉を食べていた。

「なら隣に座ってるんだから手くらい握ってよ」

「いやお前そんなキヤラだったか？」

「いやなんかさびしく感じたから」

「なんでだ？」

「だって死んだらもう合えないんだよ？」

「そうだな」

「合えないんならもつと楽しもうよ」

俺は力いっぱい手を差し出して、彼女の暖かい手を握った。

「ありがとう」

彼女が満開にハナビラのように微笑んだ。

俺も微笑む。

これが安心か忘れていた。死と隣あわせばかりで気をはりめぐらし何事もミスのないようにしてきた。俺は、いつもびくびくしていた。ようやく安心できる。すごく眠くなってきた。満腹中枢が刺激されたようだ。

俺はくらりと意識を失うようにその場で、眠ってしまった。そんなことは露ともしらず、彼女は手を握りしめてくれた。それが心地よくて、俺はなんだか大事な人に見守られながら、眠ることが出来た。

ラット百匹 水撒き。 一週間分

グール一匹 火星属性耐性十九日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 十九回分。

スロール五十体 ウンディーネ召喚 四回分。

オールゴブリン二十匹 知力五百上昇 二十四日後に消える。

ウォームバエル五十匹 水の盾 四十九回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

水流のドラゴン五匹 水の槍 三百五十回分。

水流の獅子五匹 水星属性五百アップ 四十七日後に消える。

水流のワカメ二百匹 ワカメ斬 百八十回分。

ウッドクジラ二匹 全ステータス二割上昇 三十七日後に消える。

サイエンスイルカ二百匹 呪い 体感スピード二倍 解除方法ブラックイルカを倒せ。

ブラックイルカ一匹 体感スピード三倍 常備スキル。

フグドリ三十匹 トゲフグになる 四回分。

ビッグカラス百匹 敏捷力千アップ 二十七日後に消える。

モブ竜十匹 攻撃力千アップ 二十七日後に消える。

水ゾンビ五百体 聖水 五百回分

仮想『水爆発』 使用回数∞

仮想2『水時間斬』 使用回数∞

ボススキル

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇 ∞

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

これが現状のスキルであつた。

重要アイテム

蘇生ポーション1個

回復ポーション小50個

回復ポーション超大18個

15話 コンビネーション（後書き）

ボス戦が終わり次からちょっとほのぼののです。さすがに主人公もビツチリ死と隣り合わせだと、疲れると思うので、ここまで読んでいただきありがとうございます。

16話 職業クエスト（前書き）

ご感想、ありがとうございます。16話より前の話をちょっと直すので更新が遅れるかもしれませんがよろしく願います。

16話 職業クエスト

俺は空気を吸いながら空を見上げていた。気持ちのよい風が流れる中、確かな足取りでギルドに戻ったのである。

天界騎士団のギルドはやはり生暖かいほど気持ちよかった。

不思議と拒絶感を感じない、当たり前な当たり前の日常がそこには存在している。

ウーラノスを倒して一日が経過した。疲れがまだ全部取れないこのごろ。

俺は、散歩していた。まあ、情報集めもあるのだが。

もちろん残念なことに師匠から職業を選ぶようにとのお告げがやってきた。そろそろそんな時期になったか。

なんでこんな時期かというと、職業クエストのNPCが動き出す季節があるのだ。一ヶ月に一度。

それはやってくる。

俺たちは職業を決めるために、日々NPCの勧誘から逃げて本当にやりたい職業を探すのだ。

俺は途方もないほどに今日NPCの大勧誘にあった。それはクエストをやらないう物であった。

まあ、めぼしはつけた。

俺がやりたい職業は、花咲き爺さんである。

俺がやりたのは『花咲き爺』職業なのである。

これの利点といえば農作物をどんなところでも種さえあれば、数

分で生やすことが可能。

しかも、土を肥やしたり水をやる必要がないために重宝されなかった。

そんなどうでもいい職業は誰もやらないし、そもそも花咲き爺さんを見つけるのさえ苦勞である。一つの星に一人の花咲き爺さんがいる。

この惑星にも、花咲き爺さんがいるはずである。今まさにクエストをやらねーかと勧誘しているはず。

俺はそいつを探していたのだが昼になると変な情報がやってきたNPCに聞き込みして分かったことといえば、花咲き爺さんが死んだということ後継者が見つからず幽霊になって墓場でうろついているとのことである。

とんでもない花咲き爺さんがいたものだ。墓場がどこにあるのか分からないからルミに聞かれたためギルドに帰還したのであった。

部屋という部屋を見渡すがルミは見つからない。すれ違うプレイヤーにたずねて返って着た答えはむなしほど当たり前だった。

「マスターなら先代のマスターと修行してますよ」

「それはどこだ？」

「どこだろうか？」

そのプレイヤーが微笑みながら答えをはぶらかし立ち去った。まったく腹が立つ限りである。ところでセイハツ老人とリリカットがどこにいったかというと、まったくむなしほど当たり前なことであつた。

リリカットが職業を選ぶのでセイハツ老人が付き添っていったの

である。俺には付き人すらいなかったよ。花咲き爺さんといったらその場にいたハルスカットとヘイブンが爆笑していたのは腹がたつたものだ。

なぜだ。どこが悪い花咲き爺さんのどこがわるい。

ちようどすれ違ったハルスカットさんに尋ねることにした。

「あのう墓場ってどこですか？」

「墓場ですか？ 空船でここより下に向かってください」

「つまり下にあるということですね？」

「そうですね。まだ花咲き爺さんをやるつもりですか？」

「もちろん」

「あなたなら花咲き男のように」

「まったくだ」

頷いてギルドから立ち去ると途方もないほどに混雑した人ごみを抜けていった。

人がギユウギユウで苦しくなるほどに、違和感があった。

違和感は途方もないほどに道端に沢山ある。

違和感の正体がなんなのかそれは知らない、だが分かることといえば、なんとなくその違和感の正体がつかめた。

そいつは赤い服装をしていた。

それまでならよかった。

そいつは――血のスズメーであった。

真紅のローブがはためいている。彼の二本の刀がゆらりゆらりと動いている。

全身という毛穴から汗が噴出した。彼はただ人ごみを見つめて、

人ごみの中に消えた。

俺はなぜか彼を探していた。人ごみの中をぬって歩き探す。見つからないどこにいる？ どこにいるんだ？ スズメ。

そう思い辺りを見渡すと路地裏に入っていた。誰もいなかった。俺はとぼとぼと人ごみの中をぬって空船をレンタルした。

途方もないほど空は曇りで包まれている。

太陽は輝きだしている。

赤い光が目に入るたんびにちかちかした。

苦しみが蘇る。サファイさんフルさん。

俺の脳裏に何かが芽生える。それは恐怖であるのか強気であるのかつかめない。

だが、空船をこぐスピードが速くなり天王星の核より上に島が見えた。

そこに不時着すると縄で固定した。

俺はあたりを見渡した墓場ばかりである。

沢山の墓場がありプレイヤーが人っ子一人いなかった。

あの噂は本当なのだろうか？

一つ一つのお墓を見つめながら、ようく観察していった。

見つからない、そんな幽霊はいるのだろうか？

一人の老人とすれ違う。

足がなかった。

俺は恐怖よりも、見つけた心がうれしかった。

「あのうお爺さん」

「は、は、は、花咲き爺にならんかえ」

「なります」

「は、は、はつくしよん」

「花粉症ですか？」

「いやいや、ではクエストを出そう」

老人がにやりと微笑んだ。

「この種を、墓の土で芽を出させてみる」

「これですか？ 何の種です？」

「見てからの楽しみじゃて」

花咲き爺さんは口の周りが真っ赤になっていた。

さらには髭がぼうぼうで、ロングヘアーであった。

いかしたロックンロールのお爺さんかと思えるほどの見栄えである。

俺は種を近くにあった土に蒔くため、アイテムボックスから、豊作の鍬を取り出す。

ウォータードラゴンソードと水流の盾をしまい。鍬で土を耕し。種を植えた。次に水撒きを使用して土を水でぬらす。

それだけで、芽は三十分くらいで出てもいいはずである。

しかし、三十分たてど芽はでなかった。不思議な気分になせられる。不安の気持ちでありとてもじゃないが無理だと思えてくる。

なんだこの感覚、絶望に似ている。それは甘い香りをしている。

俺は空気を吸った気持ちがよかった。

それだけである。意味はあるのだろうか？

俺はひたすら眺めた芽は出ない、夜中になった芽は出ない。
途方もないほど苦しくなってきた。

無理なのではないだろうか？

今にもあきらめそうになったとき頭に何かが閃いた。

それは絶対とはいえない何かであった。

近くにあった木の葉を持ってきてマッチで火を燃やす次に燃えカス
を畑にふりかけのようにまぶすとあらま出来上がりお茶漬けじゃ
なくて。

俺はこれで大丈夫だと思っている。

花咲き爺さんはこちらを見て微笑んでいる。

その微笑に腹がたつたので一発殴っておいた。

花咲き爺さんはそれでも微笑んでいる。

やはりもう一発殴っておいた。

花咲き爺さんが鼻血を流している。相変わらず足はなかった。

俺は苦笑を押し隠しながら。

芽がひょっこり出てきたのを確認した。そら見る！ ブロッコ
知識を活用しただけである。

「よつやつた」

そこに出現した葉っぱを見つめるでかい！ どんどんでかくなっ
ている。

俺はただただ見ていた。

巨大だ。とてつもなく巨大だ。
どんどん成長する。

風が吹いた。

木になつていた。

桜の木である。蕾が生える。次の瞬間散った。

暖かい気持ちにさせられた。

俺は涙を押し隠した。

いつか見た現実の桜を思い出していた。暖かい母親暖かい父親。
両親は廃ゲーマーになって死んだ。

俺はそうじゃなくて神様にジャックされているこの世界で死ぬの
かもしれない。

希望を持てば、きっと未来がある。

俺は信じている。強くなる気持ちを涙で隠した。

「合格じゃ」

花咲き爺さんがそういった。

「お前はこれから『花咲き爺さん』職業だ。能力は教える。ついて
こい」

花咲き爺さんがとぼとぼと歩き。

「まずはお前さんは若い、これから花咲き男と名乗りなさい職業で
は花咲き爺さんじゃ」

それは忠告より親身になって教えてくれる昔の先生のようにあつ

た。

ふと過去を思い出すとなつかしい、高校の先生元気かな？

暖かい気持ち、それが俺を強くさせる。

豊かな気持ち、それが俺を強くさせる。

友情、信頼、それが俺を強くさせる。

「まずはこれじゃこの種をもて」

「これですか？」

「うむ、基本的に花咲き爺さんの職業は水がなくても種をまいたら作物や木々をはやすことだけじゃ」

今なんつつた？ それだけ？

「だが、使い方によっては戦闘に有利だし作物ショップでこれを買うことをすすめる」

俺は老人から種を受け取った。

「蒔いてみる」

「はい」

俺は種をまいた。一秒でずばっと生えた。しかも天を突き刺すようなのがった竹である。

俺は苦笑した。

「それが攻撃じゃ種をまいた瞬間に竹が生え、串刺しにする」

「つまりそれだけ？」

「いや他にもあるぞ」

老人が別な種を持ってきた。

「これは、ヒールの種じゃ回復職にもなる。問題はプレイヤーなら全員回復させてしまうことと、モンスターにはダメージを負わすことじゃ」

俺はその種を受け取って、放り投げた。
ずばっと生えたのは巨大な松であった。松から沢山の花粉が飛ぶ。

俺はそれを受け取った。

その花粉は生クリームの匂いがした。

お腹が膨れてきて、なんだかハッピーになれた。

「これがこの木の力じゃ五分間体力が回復する」

次に別な種を渡される。

「これは、ちよいと危険な種じゃ」

俺は受け取ってさっそくはやした。

次の瞬間巨大なヤシの木が出来ていた。
そこから変な実が降ってくる。

俺を挑発するようにバウンドして木に戻る。

俺の心に怒りがたまったが。

「はい、終了」

と花咲き爺さんが呟くと冷静になれた。

「これはヘイトをかけてくれる。木じたいが防具だ。ヒットポイントがボスなみにある。この種が高いのじゃよ」

「はい」

「こんなところだな次のレベルになりたいなら、花咲き元帥を探せ」

「そんなのいるんだ」

「もちろんじゃまだまだ歴史は長い」

「ちなみにこれって何属性？」

「何の属性もない職業だからな」

「なるほどね職業って便利だな」

「おぬしには説明が必要のようじゃ」

「お願いします」

「まずは、属性とは八つ分かれる。水星は水だし、火星は火、木星は木、地球は地、土星は土、海王星は海、天王星は天、金星は金、ここの水星と海王星は似ているようで違う、地球と土星も似ているようで違う」

「そういえば、地球属性なんてあまり聞かないな」

「もちろんじゃ、地球属性とは土ではなく自然のことじゃ」

「同じじゃね？」

「違う」

「どんなものか説明しないと怒るぞ」

「エネルギーじゃ」

「エネルギー？」

「空気そのものを操る。いや空気ではない地球の自然の力、自然物質から力をもらって、エネルギーに変換する。それを操るのが地球じゃだから地球では農作物がよく育つ地力とは地という自然のことじゃ」

まったくそういうことが気付かなかった。地力とは土のことだと思っていた。とんだ勘違いである。

「それは別の惑星でも作用されるがあまり農作業には適していない、農作業をするなら地球じゃ」

俺の最初の選択は間違ってたらしい。

「そして、海王星と水星の違いじゃが」

「お願いします花咲き爺」

「うむ、承知した。水と海は違う、塩分濃度からな海王星属性の魔法はほとんどが塩分が含まれべとついている。つまり液状ということじゃ」

「海って液体じゃないよ？」

「塩分濃度をさらに濃くして、ぐねぐねになるまでやったやつを海王星属性と呼ぶ俗にゲル魔法と呼ばれている」

「なるほどね」

「お前、この生活長いんじゃないろう？ 幽霊に教わってないで、色々属性を変えて試すことをお勧めするよ」

「あまり気がすすまないんだよね」

「そついうな色々ものは経験じゃ」

花咲き爺さんが微笑んでそう告げた。

俺は頷いておいた。

「じゃあ、ありがとな」

「いいんじゃないよ、久しぶりのクエストタイムじゃったわい」

そういつて老人がまた墓場をさまようのであった。

俺は空船でショップ街を漂った。しかも沢山のショップがあり空船から身乗り出して買う仕組みになっている。まず購入したのは竹の種と松の種、ヤシの種であった。ヤシの種はでかいイメージがあるけど魔法で小さくされていた。

全部で一種類百個ずつ購入しておいた。

空船から漂いながら、宵闇の景色を見つめている。

俺はこの景色がとても好きだった。

空に浮きながら、沢山の松明の光に照らされたショップ街。それは、昔を思い出す。

お店が立ち並ぶ街。

電車から降りる学生たち。

バスから降りる人々。

そういつた光景を確かに思い出すのである。

だから俺はこの光景が好きだった。

どこことなく似ていたから。

だけどもことなく違うから。

俺はほとんど眠気を覚えながら、レンタル屋で空船を返した。

その後歩きながら、ギルドに戻った。

ギルドの中では沢山の人々が情報交換をしている。
俺は部屋に戻るとベッドに倒れこんだ。

部屋のドアがノックされどうぞと囁いた。

入ってきたのはリリカットとセイハツ老人であった。

「どうじゃった？ 花咲き爺さん」

「なったぜ、花咲き爺さんに」

「そりやおめでとう」

セイハツ老人が苦笑している。

「そっちは？」

「私は狙撃手になった」

「へえ」

「あのバズーカの精密射撃ができるぞ」

「そりや怖いな」

「えへん、私を恐れ拝め」

「やだね」

「それで、狙撃手がどんなのか知ってるのか？」

セイハツ老人が尋ねると。

「いんや知らないよ」

「なら説明しよう」

そして、セイハツ老人の説明会が始まった。

「狙撃手」それは遠距離魔法に精密度つまりスコープ性能をつけることができる。スナイパーが使うあれである。方法は掌を三角形にしてそこに目を通すと拡大されていく、その後に魔法を唱えれば、まっすぐに進むのである。九十九パーセントで当たるそうで追尾機能もついているのだとか、セイハツ解説でした。

「狙撃の王様になるにはレベルが必要みたいだな」

「あ、俺も花咲き元帥に会うためにはレベルが必要みたいなんだ」

『それでレベルってどうやってみるんだ?』

俺とリリカットが同時にたずねると。

セイハツ老人がため息をついた。

「レベル制じゃないだろこのゲームは、レベルとたえているがレベルじゃない」

セイハツ老人がしばらく黙ると。

「つまり、ケージじゃ」

「ケージ?」

「その技で倒したモンスターによって自分のステータス表の右上にケージが現れるそれが満杯になれば次じゃ」

「なるほどね」

リリカットが頷いている。

「こりやまた。倒したモンスターか」

俺がうなだれると。

「わしが、魔術師↓賢者↓大賢者になったのもこのケージのおかげじゃ」

「ああ、なるほどね」

「大賢者だけのクエストがあるのかと思ってたぞ」

俺がうなだれると。

「確かにクエストも必要だが、まずは魔術師からならなければならぬ。これは道理じゃ」

「はい」

「さて、終わったことだしお主たちそろそろ属性を変えぬか？」

『は？』

「つまりな、一つの属性に縛られていると危険なのじゃよ」

「そうだろうけど」

俺がうなだれていると。

「わしは海王星を選ぶ昔やったことがあるんな」
「はあ？」

俺がびびっていると。

「なら、私も海王星」
「じゃあ俺も」

ということで、三人が海王星を選んだのであった。

星占い屋に俺たちは向かった。これから、変わる属性にぞくぞくしながら。

ラット百匹 水撒き。 一週間分

グール一匹 火星属性耐性十八日分。

マッドサイエンティストの亀 ウォーター人化 十九回分。

スロール五十体 ウンディーネ召喚 四回分。

オールゴブリン二十匹 知力五百上昇 二十三日後に消える。

ウォームバエル五十匹 水の盾 四十九回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

水流のドラゴン五匹 水の槍 三百五十回分。

水流の獅子五匹 水星属性五百アップ 四十六日後に消える。

水流のワカメ二百匹 ワカメ斬 百八十回分。

ウッドクジラ二匹 全ステータス二割上昇 三十六日後に消える。

サイエンシルカ二百匹 呪い 体感スピード二倍 解除方法ブラ

ツクイル力を倒せ。

ブラツクイルカー一匹 体感スピード三倍 常備スキル。

フゲドリ三十匹 トゲフゲになる 四回分。

ビッグガラス百匹 敏捷力千アップ 二十六日後に消える。

モブ竜十匹 攻撃力千アップ 二十六日後に消える。

水ゾンビ五百体 聖水 五百回分

仮想『水爆発』 使用回数∞

仮想2『水時間斬』 使用回数∞

ボススキル

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇 ∞

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

海王星属性に変換

←

ラット百匹 海水撒き 一週間分

グール一匹 火星属性耐性十八日分。

マッドサイエンティストの亀 海猿化 十九回分。

スロール五十体 海坊主召喚 四回分。

オールゴブリン二十匹 脚力五百上昇 二十三日後に消える。

ウォームバエル五十匹 海の鎧 四十九回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

水流のドラゴン五匹 海の矛 三百五十回分。

水流の獅子五匹 海王星属性五百アップ 四十六日後に消える。

水流のワカメ二百匹 海斬 百八十回分。

ウッドクジラ二匹 全ステータス二割上昇 三十六日後に消える。

サイエンシルカ二百匹 呪い 体感スピード二倍 解除方法ブラ

ツクイルカを倒せ。

ブラツクイルカー一匹 体感スピード三倍 常備スキル。

フグドリ三十匹 トゲフグになる 四回分。

ビッグカラス百匹 防御力千アップ 二十六日後に消える。

モブ竜十匹 攻撃力千アップ 二十六日後に消える。

水ゾンビ五百体 聖水 五百回分

仮想『海爆発』 使用回数∞ 作り直してください。

仮想2『海時間斬』 使用回数∞ 作り直してください。

ボススキル

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇 ∞

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

職業

『花咲き爺さん』 ケージ0パーセント。

これが俺の変化後のスキルであつた。

水撒きとはお別れであり変わっていないスキルもあつた。人安心だが仮想を作り直さなくてはならないスターマンとしてがんばろう。

16話 職業クエスト（後書き）

ここで職業と属性が変わりました。拙い文章ですがよろしくお願ひします。ちよつとずつ小説の書き方を学び中です。文章力が足りませんでした。これからレベルアップしてやるつもりなので見守りください。

17話 空賊プレイヤー登場（前書き）

只今少しずつ文章を修正中。

17話 空賊プレイヤー登場

俺は朝目ざめるとやはり欠伸をかみ締めた。なぜなら昨日星占い屋で属性を変えて色々と把握するのに頭をフル稼働させた。その疲れが残っているようなのだ。

俺は笑いをかみ締めた。

立ち上がり外に出ると眠気眼のまんま洗面所で歯磨き粉を使用して歯を磨いた。

この歯磨き粉は食料アイテムでミントの葉を使って作られるものらしい。

料理プレイヤーが苦闘して作ったのである。

歯磨きを終わると。食堂で焼きたてのパンを食べた。ここ天界騎士団のギルドでは常備料理プレイヤーが働いている。俺は朝の新聞を見ていた。まったく新聞師の活発性を考えると驚くべきものである。

――善良な空賊か？――

という最初の題名に俺は驚かされた。

この世界での盗賊や空賊になるプレイヤーは捕まるとその星の牢屋に閉じ込められる。閉じ込められて二週間が経過すると保釈されるシステムになる全ステータスが牢屋では低下する。低下したまま世に解き放たれるのである。

ある意味恐怖ですらある。

そんな空賊になったプレイヤーが善良なわけがない。だが、そのタイトルの下にのっていた内容に驚愕する。

―血のスズメを撃退しプレイヤーを四名助けた。空賊はNPCの奴隷商人を襲っているだけである。それとプレイヤーの奴隷商人も襲っている。もちろん殺していない。奴隷を奪い返し、元いた場所に返す。モンスターも人も例外なく。

それはヒーローのようであつた。
だがなぜ、血のスズメと関係があるのだろうか？

―血のスズメは空賊のマスターロウガを殺そうとしていた。しかしそれを撃退したのである。血のスズメはロウガのほかにも奴隷のプレイヤーを殺そうとしていたが、残念ながら撃退された。

そんな感じである。俺はパンを食べながら見入っていた。一度会つてみたい。

そんな人である。ロウガとは。
俺は食事を終えると。立ち上がりルミを見つけた。ルミはちょっとおどけながら微笑んでいた。

「ねえ今日ちよつと一緒に見たいところがあるの」
「どこかな？」
「えつと空の畑」
「へえ」

俺にはとてつもなく興味があつた。

「雲の中に畑があるんだけど。ギルドの仕事でね空賊と交渉しなくちやならないの」

「なんで？」

「ギルドメンバーだった子が奴隷にされてたんだけど助けてくれたから回収しにいくのよ空族の知らせではお金は必要ないってボラン

ティアだつてさだけど、怪しいから一緒に来てくれる？ ハルスカ
ットもハイブンもくるから」

「分かったけどできるだけ人を配置したほうがよくないか？」

「ううん、前にも助けてもらったから大丈夫だと思うけど血のスズ
メが殺そうとしていたのがギルドメンバーの子、だから怪しいの」

「なるほど怪しいのは血のスズメのほうだな」

「そうよ」

血のスズメは闇ギルドともつながっている。そのため天界騎士団
への裏攻撃という意図も考えられる。

俺は思案しながら頷いた。

俺は昨日眠るときに二つの能力を決めていた。それはこれである。

仮想『海球』使用回数∞

仮想2『海鋏』使用回数∞

仮想2は豊作の鋏に海属性を付与させるためである。やはり俺は
剣より鋏のほうが闘いやすい。

食事も終わったことだしハルスカットさんとハイブンさんを連れ
て空船に乗ったのであった。セイハツ老人とリリカットはまだ寝て
いるらしい。まったく夜更かしするからだろう。リリカットは狙撃
手の腕を高めるため。セイハツ老人は海属性の本を再復習するよう
に調べていた。

俺はというところすり眠ったわけである。

空船にゆられながら、遙か前方に向かっていく後ろのエンジェル
スタッフ首都が見えなくなるまで進むと巨大な雲を見つけた。その

上に不時着すると。

巨大な船が停泊していた。帆には眼鏡をかけたドクロが描かれていた。

俺たちは畑を見渡した。沢山の農作物が植えられている。そして小屋が沢山見える。NPCが働いている景色はほのぼのであった。四人のプレイヤーがこちらに走ってくる。男が三人と女が一人である。四人とも涙を浮かべていた。

目の前にやってきたのはロウガと名乗る眼鏡をつけたほっそりとした男であった。

背中には巨大なランスが担がれている。盾つきのようである。

どうやら職業ランサーのようである。

―ランサーとは槍と盾の合体の武器をつかう。盾で防御しつつも槍で攻撃する。魔法効果を付与させ遠距離業も使える。クエストは難しくこの職業を選ぶ人はあまりいない。癖があり防御と攻撃のアンバランスさで人気がない。

「やあ、ルミさん元気でした？」

「はい今回もありがとうございます」

「いいんですよ、それより彼等が血のスズメに狙われる理由は検討がついているのかい？」

「たぶんボスマンスターです」

「というと？」

「彼らは海王星から戻ってきたプレイヤーです。なんの因果か途中で奴隷商人に捕まったのです。たぶん血のスズメは彼らから情報を引き出して殺そうとしたのでしょう」

それにロウガさんが頷く。

「なるほどね気をつけるよ、まだ狙っているかもしれないから」
「気をつけます」

「なんで君たちは奴隷商人に捕まったんだい？」

ロウガさんがやりと微笑みながら即すと。

一人が頷いた。

「えっと、罨にかかったんです。NPCが奴隷にされそうだったの
で助けたらなんと彼等が奴隷商人でした」

「まったく」

ロウガが頭を抱えている。

「最近なNPCとプレイヤーが組んで奴隷を集めることをしてるんだよ。知ってるだろこの世界では卑猥なことは出来ないようにプログラムされている。だけどね労働奴隷として働かせるために問答無用で奴隷にしようとしているやつらがいる」

奴隷は卑猥なことをさせるために集められているのではなく労働のために集められている。このゲームで卑猥なことをしようとしたら、即座に牢獄に飛ばされるように設定されている。現に俺の目の前で女性の胸を触って、飛ばされた人がいた。

二人の了承つまり愛し合っていると別で愛し合っていないのに触れ合うと飛ばされる。

二人の脳波から情報が伝達しているのだと説明書には書いてあった。

このプログラムを作った人はきつと天才なのだろう。

まったくうかつに女性に触れないのは怖い。

「その労働場所はわかっているの？」

ルミがたずねると方眉を上げてみせたロウガ。

「ああ、見つけたよ。場所は雲の森だ。そこで鉱石を取らせるために奴隷を働かせている。最近アダマントタイト鉱石が値上がっているだろ？　それが原因だ独占してるんだよ」

空賊が微笑み。次に俺にと視線を変える。

「君は伝説の農民だったね」

「そうですけど」

「職業は決めたかい？」

「恥かしくていえません」

「そうかいじゃあ、俺たちはそこに奇襲をかける。お前たちはどうする？」

「私も一緒にいくわ、あなたたちは帰ってちょうだい」

「いえ行きます」

「でもミセルあなた初心者でしょ？」

「僕見たんです。僕と同じように集められた人が無理やり働かされるのをだから助けてあげたいんです」

「あなたたちも同じくち？」

するとほかの三名も頷いた。

「じゃあ、船に乗れ出発だ」

俺たちは雲の森に向かって船を出発させた。ハルスカットさんがさきほどの空船を操り、俺とルミとヘイブンさんとほかの四名が空賊の船に乗った。



二時間ほど永延と思われる雲の隙間をぬって飛び続けた。雲の流れがまるで海に漂流した小船を思わせた。雲は白色でクリームのようなようであった。生クリームだったら舐め尽したい。美味しいだろうに。

それから三時間が経過した。昼くらいになったころ空族の船で食事を食べた。俺は一応持参したやつを食べた。ルミたちも持参したやつである。

空賊はこちらに食事を提供しようとしたが断った。

一応空賊だから毒でも混ぜられていると困る。

それから、二時間ほどで雲の森にたどりついた。

どうやら雲が地面で木々と岩は本物みtaiである。

岩がどこからやってきたのかは知らないがそこから鉱石が取れるのだろう。船員は数百名でみんな武器を片手に降りたのであった。残りは居残りでやはり数百名がいた。空船がたどり着いてハルスカットさんが下りた。

俺たちは雲の森をゆっくりと進んだ。岩が光っている。

まるで宝物のような光である。

「ここは首都から遠いしワープもないだから人はあまりこないんだ

よ」

ロウガがそう呟いた。

「そもそもねこんなところにアダマンタイトが取れるなんて信じるバカはいない」

ハルスカットさんが頷きながら。

「やはり敵は奴隷商人だから捕まえるだけでいいから殺さないで」

ルミがそういった。

「もちろんだよ」

俺が頷いた。

次に森を縫っていき大きな虫型モンスターを倒したり、そのときは俺じゃなくてパーティー外のロウガが倒した。

俺はただ歩いていただけである。

大きな山みたいな場所にたどり着いた。

そこには無数の数千を超える人々が働いていた。NPCもプレイヤーも含まれる。鞭をもった奴隷商人が叩いては働かせる。

俺はヘドがでるほど睨んだ。

「では作戦はこうだ。奴隷商人を捕まえる。鞭をもっているやつだ。次に油断はするな」

『散会』

俺とルミとハルスカットとハイブンでパーティーを組み。残りの四名も同じパーティーに組んだ。四名は素人らしくギルドに入ったばかりのようで、ルミからは後方で支援するようにとのお告げであった。

俺は鍬をアイテムボックスから取り出し片手にはウォータードラゴンソードを取り出した。水星属性が付与されているがすべらせて攻撃力上昇は見込めない。なぜなら俺は海王星属性になっているから。

特別付与能力は範囲外である。

海王星の特別付与能力はまだ見つからないとのこと。情報提供求むと情報誌には書かれてある。

俺はそれを見つけるためにがんばろうと思う。

走った。俺とハルスカットが二人ペアになって前を見据えて指だけで指示をして進む。

奴隷商人がいた。NPCだ。俺は後ろから忍び寄って首をゆつくりと絞めた。すると気絶したようで縄で縛った。

奴隷がみんな驚いている。

「みなさんすぐに逃げてくださいここから南に向かった森の奥に船があります。一隻ですが、後で増援を呼びますのでそこで待ってください」

全員が頷く。

「俺たちについてい」

空賊が先導をきった。さすがに何の装備も無い状態で森の中を歩けばモンスターに襲われる。

だから、俺たちは急いで奴隷商人を次ぎから次へと倒していった。もちろん殺していない。

どうやらプレイヤーはいないようである。

俺たちは一通り片付けると。奴隷商人を一つの場所に集めた。全部で数百名はいるだろうか？

そして、俺たちはほっと一息ついたまさにそのとき、まだ逃げない奴隷がいた。数十人である。

その中に真っ赤な男がいた。真っ赤なローブ。

鎖を付けられていたから奴隷だと思ったが。その顔は忘れられなかったスズメであつた。

俺は皆に叫んだ。

「みんな伏せる！」

血のスズメが二刀をアイテムボックスから取り出し、鎖を断ち切った。次にマグマの塊を投擲してきた。俺はそれを海水撒きで包み込んだ。

粘液状態のねばねばの液体がマグマを包み込む。そして、血のスズメがしたうちした。

「まったく、お前たちはあの四人を捕まえる俺はこいつの相手だ」

「ルミ、お前は四人を守れどうやらとても重要な情報を持っているみたいだからハルスカットさんとヘイブンさんは残りの九人にしぼって俺は血のスズメの相手をする」

『はい』

全員が頷いた。

俺は近づいていく。

「忘れることはできなかった。お前の顔。血のスズメ、お前を殺すまで忘れはせぬ」

「俺様のことを知っているな、だが俺様はお前のことを知らない」

「教えてやるさ。サファイさんとフルを殺したとき俺はびくびくしながら隠れてみていた」

「なるほどなああの男と女か」

彼が苦笑する。

「面白かったなあ、あいつらの絶望の顔が見れてよかった」

「今度はこっちの番だ」

俺は鋏を握り締める。次にウォータードラゴンソードを握り締めて走った。

スズメが跳躍した。刀からマグマのオーラが包む。

「マグマソード」

マグマの剣が振り下ろされる。

「海鋏」

鋏に海王星属性がまとわりつく塩けのあるべとべとで、マグマを

防ぐ。どうやら海王星属性だとマグマを相殺するようである。マグマが散る。俺はウォータードラゴンソードで切ろうとした。だがスズメは後ろに下がった。

「まったく、水星ならまだしも海王星かよ」

どうということだ？

「海王星だとマグマ属性が相殺される。だから火を使っしかない」

スズメが笑って、炎の刀を抜き放った。

「お前を倒す。いや消滅させてやる」

スズメが言った。

俺は笑ってやった。

「できるものか」

俺は走った。

海の矛を出現させ剣で叩いて発射させた。

海の矛がスズメを狙う。俺はジャンプした。五倍のパワーを舐めるな。

頭上から振り落とす鉤。

鉤が頭上を断ち割るようにして振り下ろされる。

俺は刀で防がれ右足を切られた。傷がエフェクト光になる。

ヒットポイントが減った。

俺は海の鎧を出現させた。

腰を低くして、鉤を振り回す。

スズメがそれをガードしながら後ろに下がろうとして俺は海の矛を飛ばした。

顔面に直撃した海の矛でスズメがよろめいた。前へと進んだ。さらに剣を地面に置いて、竹の種を投げた。それからびゅんと竹が生えてスズメに襲い掛かる。スズメはそれを両断していた。剣を拾った。花咲き爺さん職業はあまりこいつには使えないようである。

近づき剣を振り落とそうとしてトゲフグを使った。
体中からトゲがでる。

刀を振り落とそうとしていたスズメが棘に防がれよろめく。俺は横に一回転して鍬を叩き振り回す。鍬が顔面に直撃した。スズメが後ろに下がる。俺の体の周辺には海の鎧がある。べとべとの鎧が。

スズメが自分のヒットポイントを見て驚愕している。

「三割だと？　どういうことだ？　たった二撃でこんなに減るのか？」

それはぐもんだな。

「ボス討伐だよ」

俺は語ってやる。

「ステータスが二倍になるんだよメルクリウスを倒したやつは」
「なるほどなだから、闇ギルドはボスの情報がほしいわけだ」

スズメが苦笑している。

スズメが後ろに下がるのと同時に九人も下がった。

「無理です。敵が強いです」

「てめーら撤退だ」

俺は追いかけてやめようとして止めた。

「お前はなぜ人を殺す」

俺の質問に血のスズメが笑った。

「殺してるんじゃないゲームだからだ」

「ゲームでも死ぬ」

「俺はこれをゲームだと思っているし死んでも構わないと思っている」

「どうということだ？」

「俺は生きていることに見出せずにただただ人を殺して自分の生きていく価値を見定めている」

「そんなもので見定めるとはできない」

「いや出来る五百四十三人、これが何の数字分かるか？」

「どういう意味だ？」

「俺が殺してきた数だよ、お前もこのなかに入れてやる」

「いいや、俺が始めて人を殺すときそれはお前だ」

「それは楽しみにしているよ」

すると十人は後ろに走って逃げていった。

俺はため息をつく。ルミがこちらに走ってきた。

「大丈夫？ 顔怖いよ」

「いや大丈夫だ。ちょっと過去を思い出してね」

そう過去を思い出した。父親はこの世界ではレッドプレイヤーと呼ばれていた。母親はこの世界では勇者と呼ばれていた。二人の道が違っても現実世界では分かりあえていた。

だから俺も血のスズメのことを分かるときがくるのだろうか？

父親はゲームだからレッドプレイヤーが好きだといった。みんなにスリルを与えていることそれが仕事だ。

母親はそんな父親からみんなを守ることが仕事だといった。

もしかしたら血のスズメはそれが役目だと思っているのかもしれない。

人間に恐怖を忘れるなと忠告するように。

俺はうなだれ後ろを振り返った。

そこには仲間たちがいた。

奴隷商人を引き連れて船に戻った。

船の前には数千の奴隷がいた。

みんなを帰すためにギルドが動き出し五時間後に大量の空船がやってきて奴隷をエンジェルスタツフ首都までに帰した。

そうしてやっと四人の海王星のボスの話を聞くことができるようになったのは。深夜の二時であった。

お月様はいつまでも輝き、ほかの惑星が光って見える空に俺たちはいる。

俺たちもその星の一部なのだから。

ラット百匹 海水撒き 六日分

グールー匹 火星属性耐性十七日分。

マッドサイエンティストの亀 海猿化 十九回分。

スロール五十体 海坊主召喚 四回分。

オールゴブリン二十四匹 脚力五百上昇 二十二日後に消える。

ウォームバエル五十匹 海の鎧 四十八回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

水流のドラゴン五匹 海の矛 三百四十七回分。

水流の獅子五匹 海王星属性五百アップ 四十五日後に消える。

水流のワカメ二百匹 海斬 百八十回分。

ウツドクジラ二匹 全ステータス二割上昇 三十五日後に消える。

サイエンシルカ二百匹 呪い 体感スピード二倍 解除方法ブラ

ツクイル力を倒せ。

ブラツクイルカー一匹 体感スピード三倍 常備スキル。

フグドリ三十匹 トゲフグになる 三回分。

ビッグガラス百匹 防御力千アップ 二十五日後に消える。

モブ竜十匹 攻撃力千アップ 二十五日後に消える。

水ゾンビ五百体 聖水 五百回分

仮想『海球』 使用回数∞

仮想2『海鋏』 使用回数∞

ボススキル

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇 ∞

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

職業

『花咲き爺さん』 ケーシニパーセント。

18話 嘆きのラスカット（クエスト）

俺はエンジェルスタッフ首都で欠伸をかみ締めながらみんなばり働いているのを目撃していた。

ハルスカットさんは奴隷名簿から何か手がかりを掴もうとしている。

ハイブンは奴隷たちの怪我の回復であった。

ところで海王星についての情報なのだが今俺とルミが聞いている。その場にはセイハツ老人とリリカットがいた。

ミセルと名乗った少年が語る。

「えっと僕たちは海王星でボスの情報を集めていました。天王星にいるラスカットという人が海王星のボスのことを知っていることまではつかめました」

「なるほどな」

「ラスカットは幾多の星で旅に出るNPCだそうでちょうど今月は天王星にいたんです。だから僕たちはそれを追ってここにきて探しているところを奴隷商人に捕まったというわけです」

「手がかりは掴んでいるのだろう？」

「はいクラウドタウンにいることは分かっていますが無法地帯ではとんどのNPCが殺人を平気でします。だから僕たちは傭兵を雇って向かったのですが。その傭兵が逃げたんで駄目でした」

「ということは後は任せるおいルミ、俺とセイハツ老人とリリカットで行くが問題ないな？」

「ええ問題ないわ」

「ルミさんは行かないんですか？」

ミセルの問いかけに彼女は微笑んだ。

「ええ行かないわこっちは情報集めね」

「はい」

ミセルが頷くと。

「じゃあ明日出発する。そのクラウドタウンはどこにあるんだ？」
「今地図を渡しますね」

ミセルから地図を受け取って確かめた。
なるほどエンジェルスタッフ首都からちよつと遠めである天王星の裏側に位置するみたいだ。
その後解散となったわけだが。

俺はルミの仕事ぶりに感嘆していた。色んな人が奴隷たちを開放するにあたって問題に直面していた。別な星からつれてこられたNPCはどうやって星に帰ればいいのか分からないためプレイヤーが家まで送る必要があった。

奴隷のプレイヤーたちは自由を勝ち取ってさっそく旅を始めていた。
た。

もう二度と捕まってほしくないと祈った。

俺は庭で星空を眺めていた。

綺麗な星空は確かに俺たちを包み込んだ。
青い星が見える。あれは海王星だろうか？
それとも水星だろうか？

大きくて立派だった。

なぜあんなに近くに見えるのか？

いたって簡単。

この世界では星と星の間が狭いのである。

現実の惑星の距離感は無視されている。

そんなことしたらとんでもない距離になるし冥王星にいたってはとてつもない距離になるだろう。

俺はこのゲームの特性を見出しながら頷いていた。

このゲームに入ってからはや三月くらいが経とうとしていた。

俺はこのゲームで死ぬことはなかったが。サファイさんとフルさんの死を感じてから何かが変わってきた。まるで死に敏感になり死に鈍感になったのである。

風が吹く中、アイテムボックスからスポードリンクを取り出して飲み始めた。ステータスが上昇するのを確認する。

リリカットが隣に座った。

「あんたさもうちょっとはチームワークを大事にしなさい、死んでたかもしれないのよ」

「寝坊していたお嬢様に言われたくないな」

「なんだって、私はよく眠ってたの起こさないあんたが悪い」

「そりゃ失礼」

俺は苦笑を押し隠しながら。

「で血のスズメとどんな関係なの？ ルミから聞いたわよすごい顔だったって」

俺はため息をつきながら。考えた。血のスズメとの関係はいたってシンプルだ。

俺は復讐者であり。
亡霊のような存在である。

「俺は一時期大事な仲間つてもんが短い時間いた。リリカットと出会う前だなそいつらとダンジョンを攻略して色んなことを語った。俺にとって仲間だった」

リリカットがこちらを見ている。

「やつはその二人を殺した。俺はただ隠れてびくびくしながら見ていた。しかなかった。そのときの俺は農作業スキルばかりにとらわれて強さにはこだわっていなかった。それから俺は強くなるために修行を始めた。そんなところにセイハツ老人が現れて、お前とも出会えた。だから俺はうれしいんだ」

リリカットが顔を真っ赤にさせながらうつむいている。

「今度闘うときは一緒だよ私だって力になるんだからシンベイが無理して一人で突っ走るなら私はそれを止める。セイハツ老人だって止める。私とあなたとセイハツ老人、そしてカイザーは唯一無二の仲間なのだから」

俺は頭をかいた。そうだ俺には新しい仲間がいる突っ走るところを止めてくれる仲間がそこには存在していた。

「わかったよとにかくお前は早く寝ろ餓鬼が起きていい時間じゃないよ」

「いいいだ」

彼女が睨みつけて立ち去った。

まったく餓鬼が心の救いになるなんて高校生失格だな。
そんなことを考えていると。

ミセルさんがやってきた。

彼はこちらを見てびくびくしながら近づいた。

「あのう隣いいですか？」

「構わないよ」

「星は綺麗ですね」

「俺もそう思うあの星が輝く限り人は生き続ける。何億人という人間がこの世界にとらわれもうすでに死んでいるのだろう。その人々は一体どこに向かったのか俺には興味深いよ」

ミセルさんが少し考えながら顎に手をあてて。

「あのう血のスズメの件なのですがもうかかわるのは止めたほうがいいですよ」

「どういうことだい？」

「血のスズメには最強の三人の仲間がいます。レッドプレイヤー四天王と呼ばれているんです」

「ふーん」

「その三人の名前は今は言いませんですけど血のスズメを殺すならその三人も敵に回すということですよ」

俺は顎を上に向けて空を見上げた。一番星が輝いている。

「お前は恐怖より義務より誰かのために闘うことはしたことがあるか？」

「いえありません」

「俺はそれを見つけた。だからどんな強大な敵が出てこようと俺は立ち向かう。どんなに負けようと、どんなに倒れようと死なない限り俺には未来がある。仲間を守るため俺は闘う。四天王が敵に回ったとしても俺はそいつらを倒す。殺すかは知らない。だけど俺はそいつらを許さないゲームだから？ 殺しを許していいのか？ 俺にはそれは許されない」

一区切り打って俺は微笑んだ。

「そもそもな大事な人を奪われるやつの気持ちがわかるか？ 短い時間だった短い時間信頼ができた。信頼はそう簡単には壊れない。俺はサファイさんとフルさんに感謝したいんだ。思い出させてくれたこと。大事な人を守るためには力が必要だったこと」

ミセルさんは考えながら頷いた。

「あなたは確かに力が必要だといいますが。僕はそうは思いません。チームワークの力だって力です」
「ごもつとも」

俺は頷いた。

「あなたが一人で血のスズメと闘ったとき正直バカだと思いました」
俺は笑った。

「ですがカッコいいともおもいました」

「力とは一人では駄目なのかね」
「あれでも良かったと思いますけど。チームワークをしていれば確

実に血のスズメを倒せていました。だから忘れないでください。あなたには仲間がいるということを僕もその仲間になってもいいですか？」

「ああ構わないよ」

彼は微笑んだ。

「なので明日僕も同行します」

「なんだって？」

「いいじゃないですかあなたをもつと見てみたいのです」

「そりゃそうだけどさ」

黒髪に布のジャケット、軽装の鎧を羽織、グローブを身につけている彼が微笑む。

「ちなみに僕は女性ですよ」

「なんだって？」

俺は戸惑った。見た目は男性に見える。
鎧をよづく観察し次にその中身を想像する。

「こう見えても胸が小さくて見てみます？」

「いやいいセクハラになる」

「そりゃそうですよね」

ミセルさんが笑った。

「あなたはすごい人です。だからあなたの強さを見たいだから一緒に旅に出させてください。ご紹介が遅れましたが。職業気孔師です」

「聞いたことないな」

「気孔師は手の平から気孔を飛ばしてプレイヤーを回復させます。クエストが特殊であり人気がありません」

「どんなクエストなんだ？」

「んと、えっと何度も掌から何かが出るイメージをしながらクエストを出してくれるNPCに気孔を飛ばせば合格です。僕はこれをやるのに一週間かかりました」

「へえ」

「ちなみに職業身についてないのになぜ気孔がでるのかというと。話によりますと生命力ってやつが出るそうです。それを職業に変換することによって気孔師になるのだとか。だからあなたも生命力は掌から出すことはできますよ」

「なんか意味があるのか？」

「職業にしなくちゃ意味がありませんからね」

彼女が笑った。

「では僕は明日に備えて寝ることにします。あなたは夜更かしはしないように」

「俺は朝強いほうだから安心しろ」

彼女が立ち去ると。俺はやはり空を見上げていた。

流れ星が流れ。

俺は涙をつらりと流した。

■ ■ ■

空船に乗るとき中型を選んだ。パーティーメンバーは俺、セイハツ老人、リリカット、ミセルであった。俺たちは空船の操縦を動か

して船をこぎ始めた。

セイハツ老人がこぎまくる。

俺は昨日庭で寝てしまつて、ルミが朝早くからずっと俺を眺めていたらしく微笑み続けていた。俺は苦笑したねルミが顔をにやにやしながら俺をずっと眺めていたことの違和感、気持ち悪さ。だけど俺は暖かい気持ちで彼女の行いというか愛を感じたのであった。

「そもそもラスカットはどんなやつなんだ？」

俺が尋ねると。

「話によりますと天使と悪魔のハーフだそうですよ。NPCなのにワープをつかつて旅をする特殊な人物という情報です」
「なるほどな」

ミセルの説明に頷きつつも。

「そもそもじゃ、ラスカットが教えてくれるのか？」

セイハツ老人が謎の声をあげたが。ミセルが頷いた。

「恐らく何らかのクエストが発生すると思われます」

「うん、そうだよねただなわけないよね」

リリカットが幼稚園児ながらチビのまんま呟くと。

「そろそろつくぞ」

出発から三時間後にたどり着こうとしていた。

セイハツ老人が操縦をするととてもなくはやく進むのである。

雲は相変わらず下方にあり次に空にもある。

空は無限に広がっていて。赤い天王星の核が見える。

雲の隙間からモンスターが泳いでいたりと思議な光景が見れた。

雲は海のように流れていて飛沫をあげながら。雲の破片が顔に突き刺さる。

その破片は柔らかくて気持ちよかった。

湿気が含まれておりどろりとしていなかった。

―クラウドタウン 無法者があつまる町。

俺たちはそこにたどりついた。

島が浮いている形でタウンが出来ていた。

船を着地させて縄で固定する誰かが持ち逃げしないように鍵で操縦をロツクした。

セイハツ老人が当たりを見渡す。

みんなごつい顔をしたり綺麗なお姉さんが歩いているが。その綺麗なお姉さんの目はどきつく殺気に満ちていた。

みんなが何かしらの殺しをしていそうな顔をしている。

「えっと酒場にいるそうです」

ミセルの助言で俺たちは酒場に向かった。途中で防具屋や鍛冶屋、武器屋を見つけた。

星占い屋もあった。八百屋もあり魚屋もあった。魚は雲の中から

取れるものらしい。

肉屋もあった。ほとんどの亭主がすごい怖い顔をしていた。NPCだと分かる。

雑貨屋がありそれはプレイヤーが経営していて若いお兄さんであった。これは怖くなかった。

酒場に入るとまずはプレイヤーが一人も見つからない。NPCが酒を飲んでこちらを睨んだ。皆怖い顔をしている。

俺はまずはカウンターに座った。仲間たちも続く亭主がこちらを睨む。

「酒にするか？」

亭主が尋ねると。

「ワインを一つ」

「ビールを」

「牛乳を二つ」

それから飲み物が運ばれみんなで飲みながら辺りを確認する。

一人は傭兵らしき大きな剣を構えている。

このゲームでは傭兵を雇うことができる。一定額のお金を払えば雇わせてくれる。だがミセルのように力のない傭兵だと逃げられる場合があるため傭兵を雇うには情報を集めてから雇う必要がある。プレイヤーの傭兵も同じである。

次に商人も雇うことができる。商人プレイヤーが商人をやとって店番させることだってよくある話である。

しかし例外がある。

ボスモンスター討伐のときだけは、傭兵を雇っても拒否されるしボスモンスターを倒しにいくとすると傭兵が金を返して逃げいくのである。

これはルミが検証済みである。

辺りをさらに見渡す綺麗なお姉さんが一人いた。

彼女はうつらうつらと眠りながら。二本のレイピアを構えている。NPCだと分かり、次に見たのはごついおっさんである。彼は棍棒をかついでいる。

NPCとプレイヤーだと名前の表記の光具合が違いため分かるのである。

最後の人物を見つめた。酒場の隅っこにいる。

ラスカット。

見つけた。

彼は酒を飲みながら辺りをうかがっている。

俺が立ち上がり彼の隣に座った。

「いっぱいおごるよ」

「そりゃありがたい」

ラスカットが微笑んだ。

「君はラスカットだね？」

「そうだが？」

亭主がワインを持ってきた。ラスカットが飲む。

数枚のゴールドを渡した。

亭主が喜びワインの額より高かったことがうれしかったようだ。

「海王星のボスモンスターについて知りたい」

「いいだろう、だが条件がある」

「なんだ？」

「大天使ミカエルを倒してほしい」

隣にセイハツ老人が座った。

「そいつは小ボスモンスターじゃな」

「おぬしは？」

ラスカットがたずねる。

「セイハツというものじゃ」

「それでどうだ？」

「いいだろう、だがなぜ倒してほしい？」

「やつが俺から奪った天使の槍を奪い返してほしい」
「なるほどね」

俺が頷き。

「場所はどこだ？」

「場所は天空の海だよ。雲の中だ空船に空気ボールを身につけたほ

うが いいだろう。雲といっても海と同じ息がすえないからなこれが
地図だ。雲の中で役立つだろう」

そこには天空の海の迷路みたいな道が記され最後にボスがいる場
所が書かれてあった。

俺たちのクエストが始まったのであった。

19話 天空の海（前書き）

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。これから頑張って参ります。只今少しずつ修正中ではありますが見つめてやってください。

19話 天空の海

俺たちは造船所で空気ボールを船につけてもらった。ビニール製のボールに包まれた空船はまるでカプセルの中に入っているおもちゃとたとえることができるだろうか。

俺たちはそれを使って地図どおりに向かった。

二時間でたどり着いた場所では細長い天空の海があった。まるでドラゴンのような形をしていた。次に入り口があった。雲の中に入れという看板がある。

俺たちは雲の中に突撃した。ビニール製の空気ボールのおかげで雲の中の水みたいなものを避けてくれる。どんどん前に突き進む。看板が沢山あった。雲は透明で一応前は見えた。巨大な海蛇みたいなやつが泳いでいたりしたが。襲ってくる気配はなかった。

しばらく進むと地面にたどり着いた。その地面は地表のそれであつた。

空気ボールを解除するとビニールのチャックをあけて外に出た。空気はあるようだ。空は透明で前も透明であつた。壁が透明なためそこに顔を突っ込むと息ができなかった。

船を固定して鍵を閉めて歩き始める。

しばらく前へと歩くと透明な雲の向こうから沢山のピラニアみたいなものがこちらに向かってくる。

俺は単純に通りすぎるのだと思ったのだが。雲を突き破り空気中に現れて攻撃してきた。俺はとっさに豊作の鍬を腰から抜き。水流

の盾をアイテムボックスから引っこ抜いた。

地面に落ちたピラニアを叩き潰して鱗という材料を手に入れた。

それでも通りすぎていったピラニアがまた旋回して戻ってきた。
その数は数百匹である。

「おいみんな落ち着け、敵が出た瞬間に叩き落せ」
「分かったわ」

リリカットがウォーターコンボウを握り締めている。セイハツ老人が杖を構え次にミセルがナイフを引っこ抜いた。

全員が固まっている。次の瞬間ピラニアというか正式名称はクラウドピラニアが飛び出てきた。牙が盾を襲う。リリカットのヒットポイント削れたようである。すかさずミセルが気孔で回復させていた。本当に便利な職業である。

俺は数匹を叩き落していた。

辺りを確認する。上から旋回して戻ってきている。

「散会しろ」

「はい」

俺は剣を構える。敵が出てくる瞬間を狙えばいいのだ。
落ち着いてみる。

感じているその目で見えるんだ。

俺はやればできる。

クラウドピラニアが出てきた。ものすごいスピードで突撃してく

る盾で弾き飛ばし鉋でとどめを刺す。鉋が鱗を砕いていた。沢山の魚が地面に落ちている。

セイハツ老人も魔法を使っている。
リリカットがコンボウで叩き落し。
ミセルがナイフではじいている。
ぴっちぴっちと跳ねているピラニアたち。

俺たちはとどめをさして、材料を回収したのであった。
全匹倒した。

ステータスを確認すると。

クラウドピラニア 百匹 海返し二百回

のスキルを覚えたみたいである。

俺はゆっくりと前へと進み始めた。

ミセルが気孔で仲間たちのダメージを回復させてくれる。
前に進むごとに霧が濃くなって来た。それでも息は出来る。地面は土気色で木々がないことが不思議であった。洞窟というか雲の洞窟に入っている気分させられる。

それから数度クラウドドッグとクラウドキャットと闘った。海の生き物で犬と猫なのだが魚の一種みたいである。

クラウドドッグ 二十四 毒解除 五回
クラウドキャット 二十四 攻撃力五十アップ 十四日後に消える。

この二つを覚えた。それから数時間ほど歩くと。ようやく大きな聖堂に出た。聖堂は建物らしく木々などではなく石で作られていた。中に入ると一体の天使がこちらを見ていた。

その天使がこちらに槍を向けた。

天使の槍である。

彼がこちらを睨みつけながら。

『着たか反逆者よラスカットの味方よ墮天したものの味方になるとはこの天使ミカエルおぬしたちを殺さねばならぬ』

『その墮天した心を一から崩してやろう。さあかかってこい』

どうやら一定の距離に入らないと戦闘が始まらないらしい。

「じゃあ、みんな作戦はこうだ。俺とリリカットで接近戦をするセイハツ老人とミセルは遠距離攻撃、ミセルは回復に専念してくれ」

「はい分かりました」

「それと大天使ミカエルの弱点はわかるか？」

「いやわからないだが恐らく天王星の攻撃が利くじやろう、残念なことに誰も覚えていないようじゃがな」

「僕は地球属性です」

ミセルが名乗った。

なるほどな自然の力と気孔は似ている。いいマッチングであろうか。

「じゃあ始めよう」

『我を愚弄するかつさつさと攻撃せよ』

「なあ、こいつ攻撃されねーと攻撃してこねーんじゃないか？」

俺がちよつと疑問に思ったことを告げると。

「そうかもしれないわね」

『早く攻撃せよ人間どもめもう我慢の限界だ』

「お、攻撃してくるぜ」

俺が鍬を構える。水流の盾をしまつてアイテムボックスから種を数個取り出す。ポケットにしまつていつでも出せるようにする。

大天使ミカエルがジャンプして羽を飛翔させ天使の槍で切り下げる。俺はそれを鍬でガードしてリリカットが隣からコンボウを振り下ろす。巨人化していた。その力で大天使が吹き飛ばす。

俺は竹の実を取り出して放り投げた。ぼんと飛び出た竹の木が大天使ミカエルの肩に突き刺さる部分破壊に成功したみたいである。

『ぐつつ』

叫び声をあげている。

大天使ミカエルが左腕で右肩を抑えると。回復された。

『三回までしか使えぬが』

なぜか情報まで教えてくれた。

俺はやしの実を取り出し放り投げた。

木が生えると実が落ちた。バウンドしている。ミカエルがそちらに向かって攻撃を始めた。やしの木に攻撃をしている。

「よしヘイトに成功した。あとは攻撃しまくれ」

俺は海の矛を出現させて連続でミカエルに攻撃を果たした。ミカエルがよろめくと豊作の鍬で海属星を付与させたまま何度もたたきつけた。

エフェクト光になって羽が消滅した。羽の部分破壊に成功しみたのである。

海球を出現させ飛ばす。これは仮想の力である。それがミカエルの頭に直撃した。すごいエフェクト光が光っている。

まぶしいくらいである。

海球はねばりつき大天使ミカエルの動きを封じる。

ヘイトが俺に代わっても大丈夫しばらくは動けない。リリカットが距離を開けている。

そして、掌を三角形にして狙いを定めている。

仮想を使用するのだろう。

――海バズーカ――

その声がとどろくとヘドロみたいな噴水が飛び出て大天使ミカエルに直撃したエフェクト光よりもさらにねばついて動けなくなっているみたいである。

俺は苦笑を押し隠しながら。何度も鍬でたたきつけた。

ヒットポイントが減ることによって大抵のボスモンスターは変化する。

この大天使ミカエルも例外ではない。

巨大な羽が光った。

大天使ミカエルの羽が回復したのである。

残り一回しかつかえぬようだが。それをねばりに使用してねばりから脱出した。

『人間どもめ許さぬ』

その異変は驚くべきものであった。

大天使ミカエルの周辺に光属性が付与されたようである。正確には天王星属性だが。それが光ってビームが飛んできた。俺の右足を直撃して、ヒットポイントが三割も減少した。

「まずい、これじゃれにならん」

また天王星属性の力を貯めているようだ。

「リリカットまたさっきのやつを使え俺も使う」

海球を発射させた。リリカットの海バズーカも。

二つがぶつかるが。天王星属性の光のオーラですべてが蒸発した。

「なんだ、あれ？」

俺は啞然としていた。

大天使ミカエルが笑っていた。

『この人間どもめ滅ぼしてやる。この力でもってな』

気孔で回復してもらい。俺は鍬を構える。

もう覚悟なら出来ている。一度死んだと思った俺。

そして助けられたこともある。いや何もできなかった過去。今はそれとは違うのだから。

接近した。鍬を何度も叩き落す。体が焼ける天王星属性の光のオーラビームで焼かれる。ヒットポイントが減り続ける。それでも俺は鍬を振り落とし続ける。

俺とミカエルのタイマンである。

何度も叩き落す。粘り毛があるせいかミカエルの体から水蒸気が蒸発している。塩だけがミカエルの体に降りかかる。海鍬の効果で海属性が付与されているのだ。

何度もぶつかる。気孔で回復されるもダメージのほうが大きい。セイハツ老人が遠距離魔法の海力マイタチを解き放ちミカエルの体を切り刻む。

脳裏に死がよぎった。

どっちが勝つか？

これはタイマンである。

「うおおおおおおおおあああああああ」

大きな叫び声をあげた。

俺のヒットポイントが一割になったとき。大天使ミカエルが微笑んだ。

『負けた』

エフェクト光になって消滅した。
一本の槍が置かれてあった。

俺は大きな唸り声を上げて勝利を叫んだ。
それでも足がくらくたとして倒れた。
リリカットが支えてくれる。

俺は槍をアイテムボックスにしまったのであった。

それは天使の槍である。

俺たちはそうしてクラウドタウンにまで戻ったことになる。

■ ■ ■

クラウドタウンの酒場にてラスカットさんが微笑み続けていた。
天使の槍を渡すと彼は頷いてくれた。

「さては質問に答えようか」

「海王星のボスはどこにいるんですか？」

俺が尋ねると彼は笑った。

「知つてのとおり海王星はすべてが海だ。水星とは違って全部が海
なんだよ、首都は海の中にある。みんな潜水艦をつかって旅をする。
そこまではいいいな？」

「え、はい」

もちろん知らなかったのである。しかも俺は海王星には行つたことがない。

「海王星の奥深くに氷の宮殿というものがある。そこには空気がある。その宮殿の奥深くにボスモンスターがいる」

「どんな能力を使うんですか？」

「それは俺も知らない、分かっているのは人間の大きさをしている小さいくせに強いということだ」
「なるほど」

俺が頷くと。

「弱点は海王星属性と天王星属性だよ」

「ありがとうございます」

「ほかに聞いておきたいことはあるかい？」

ミセルが頷き。

「じゃあ、その氷の宮殿にはなぜ空気があるんですか？」

「いい質問だねそれは、ボスモンスターが酸素を作り出す海草を育てているからだよ」

「そういうことか」

俺が頷くと。

「ところで初歩中の初歩を聞くようですが。どうやって潜水艦に乗ったまま普通のモンスターを倒すんですか？」

するとラスカットさんが笑った。

「本当に初歩だな。潜水艦の武器を使うんだよ海王星では潜水艦を無料で改造してくれる。金を払えばもっと強くしてもらえるが。無料だけでも充分にモンスターを倒せる。よって潜水艦で小ボスモンスターを倒すことを考えるなら金を払って改造を進めるがまだ倒さないなら無料の改造で大丈夫だ」

なるほどなんか射撃ゲームみたいに倒していくらしい。

面白そうだ。俺はこう見えても飛行機ゲームは得意だ。いや潜水艦だから違うか。

「中には祈祷師に祈ってもらって泳いで闘うやつがいるけど。海の冷たさが普通じゃないから持たないよ。火属性で体を温めない限り無理だね」

ということは火星属性の人が体を温めながら海で戦うやつもいるということだ。

「それと冷たさはダメージになるから死ぬよ」

彼がとても綺麗にまっさらと告げたのであった。

俺は苦笑を押し隠しながら。

「ほかにはあるかい？」

「いえありません助かりました」

そうして俺たちはラスカットさんから離れてギルドに戻ろうとしたら。ラスカットさんがこちらを見てにやりと笑った。

「君たちは大きなボスを解き放つたことを知らないだろうに」

俺は振り返った。

ラスカットさんはその意味深い言葉を話したのに、知らぬ顔をして酒を飲んでいた。

大きなボスを解き放った？

一体どういうことだ？

ミカエルを倒したことによって現れるボスモンスターがいるのか？俺はよく分からなかったので無視して、ギルドに向かうのであった。

――現在のスキル――

ラット百匹 海水撒き 六日分

グール一匹 火星属性耐性十六日分。

マッドサイエンティストの亀 海猿化 十九回分。

スロール五十体 海坊主召喚 四回分。

オールゴブリン二十匹 脚力五百上昇 二十一日後に消える。

ウォームバエル五十匹 海の鎧 四十八回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

水流のドラゴン五匹 海の矛 三百四十回分。

水流の獅子五匹 海王星属性五百アップ 四十四日後に消える。

水流のワカメ二百匹 海斬 百八十回分。

ウツドクジラ二匹 全ステータス二割上昇 三十四日後に消える。

サイエンスイルカ二百匹 呪い 体感スピード二倍 解除方法ブラックイルカを倒せ。

ブラックイルカー一匹 体感スピード三倍 常備スキル。

フグドリ三十匹 トゲフグになる 三回分。

ビッグカラス百匹 防御力千アップ 二十四日後に消える。

モブ竜十匹 攻撃力千アップ 二十四日後に消える。

水ゾンビ五百体 聖水 五百回分

クラウドピラニア 百匹 海返し二百回。

クラウドドック 二十匹 毒解除 五回。

クラウドキャット 二十匹 攻撃力五十アップ 十四日後に消える。

仮想『海球』 使用回数∞

仮想2『海鋏』 使用回数∞

ボススキル

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇 ∞

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

――職業――

『花咲き爺さん』 ケーシハパーセント。

19話 天空の海（後書き）

謎の言葉を残したラスカット、すぐに謎が明らかになります。文章力がないですがなんとか学習して燃え尽きる予定ですのでよろしくお願いします。

20話 ラスカットは???

天界騎士団ギルド本部にてルミたちが一同に解した。みんなが作戦会議という感じなのである。お分かりいただけただろうかこの作戦は海王星のボスを倒すことではなく。

どうやってこの天王星首都エンジェルスタッフを守るかであった。なぜこのようなことになったかというところさかのぼること十五分前。

「というわけなんだ。海王星のボスの弱点は海王星属性と天王星属性だよ俺とお前で倒せる」

「なるほどね考えたものだわ氷の宮殿だっけ？ ボスの名前はネプトゥヌスよ」

「なんかすげー名前だな」

俺がそう呟くとその場にいた全員が考え始める。ローマ神話だろう？

俺にとってそこは詳しくないしギリシャ神話でもいい気がするがその手のマニアにはかなわない。

海神か？

ポセイドンでもよくね？

とか考えていると。

ギルドの中があわただしくなった。

まずは慌ててヘイブンさんが入ってきた。

「いいでしょうか？ ルミ」

「なに？」

「防衛クエストが発生しました」

「でも俺んところには何の連絡きてないぞ？」

俺が謎の声をあげると。ハイブンさんはこほんと咳払いして。

「正確にはまだ始まっていません」

「なんだって？」

ルミが何か考えながらギルドの窓を開けた。天王星から見える空。その一面に黒はねの墮天使たちが群がっていたのである。

遙か空からやってきた彼らはこちらを見てにやりと笑うかのよう
に不気味であった。

俺は頭を抱えた。

そして現在。

今みんなでどうやって防衛するかでの話になっている。

「そもそもおかしくね？ ボスモンスター倒したんだぞ？ 防衛だ
ってボスモンスターのときにやったしあと一ヶ月くらいは平和なはずだ。説明書にも書いてあるだろ？ 一ヶ月に一度しか防衛クエストは発生しないってさ」

タンカーのチットが微笑みながら告げた。

「恐らくこれは防衛クエストじゃないわ」

ルミがそう呟いた。

その隣にはミミジヨが杖について微笑み続け。

セイハツ老人が俺の隣で何か考えている。

リリカットにいたってはよだれをたらして眠っている。

ハルスカットさんはふうむとうなり。

ハイブンは考えことをしている。

「これは神話戦争つまり墮天された天使たちが墮天したことへの逆襲クエストじゃ」

「やはりか」

セイハツ老人が唸った。

「どういうことです?」

「この天王星は天使一族が守っている。それはお分かりいただけるだろう? 設定だよこの話を聞いてくれ。『天使の宝具五つ集まるとき空の結界破られたし』じゃ、心あたりは無いか? 天使の槍、天使の盾、天使の剣、天使の鎧、天使の冠」

俺は笑ったね、そこに心辺りある一つが含まれていたのだから。

「そういった話はもっと早くしてくださいよー」

俺が頭を抱えた理由。

それは。

その時である声が響いた。

『我はラスカット、本当の名前はサタン、人は我のことをサタンと呼ぶ我を倒せるものがあるか？ いないだろう？ 長い間探してきた旅を続けてきた我は見つけた。天使の槍をそのほかは別の惑星でプレイヤーに情報提供という餌で取ってもらった。我こそはサタン倒せるものがいなければこの首都は崩壊する。復讐だ。これは天使への復讐だ』

―スタークエストが発生しました―

俺は頭を抱えた。ミセルが悲鳴をあげて頷いていた。

「あのう僕たちが情報を仕入れたのはラスカットさんからです」

「「「なんだって？」」」

ミニジョさんハイブンさんルミが怒鳴った。

「どうやら餌にされたようじゃな、というかサタンは設定では冥王星に捕まっているはずだぞ？」

ミニジョが怒鳴った。

つまりこのゲームに異変が生じている。
ゲームがゲームでなくなっている。

リアルな話になっている。
神話が現実になってきている。

N P Cが自我を持つようになってきた。

なぜプレイヤーのショップでN P Cがものを購入するのか？
簡単である彼らは自我を持つようになったのだ。

それでサタンは考えた。どうやって冥王星からやってきたのかは
知らないが彼が神の手下ではないことは確かである。

――時間後――

俺たちはさっそく沢山の人に募集をかけた。
続々と集まる人々。

俺たちはみんなにパーティーを組ませた。

A アタッカー部隊
W 魔術師部隊
T タンカー部隊
S サポート部隊
Y ユニーク部隊

だいたい揃った。合計人数は五百人である。闘える人は少ない。
だがN P Cが立ち上がった。

今まで守られる側のN P Cだが彼らは武器を片手に家から出てき
たそれぞれがパーティーを組んだ。

その数二千人。
プレイヤーより多かった。

俺は空を見上げた。ちよつとずつ降下してくる墮天使たち。彼らはこちらに向かつてくる。

さて、戦いが始まるまで何分後だ？

すると空から沢山の弓矢が飛んできた。

まだ共有指示チャットがいきわたっていない。

パニックになったが俺は叫んだ。

「みんな落ち着け共有指示チャットを受けてないリーダーたちは天界騎士団のギルドに避難しろ早く早く」

みんなが動いた。

「共有指示チャットを受けたやつはミニジョからの指令を待て」

ルミは共有指示チャットを提供しているため支持はミニジョなのである。

俺は空を見上げて物陰に隠れる。

俺のパーティーメンバーは自分、セイハツ老人、リリカット、ミセル、ハルスカット、ヘイブンであった。ルミはパーティー外である。俺は冷や汗をかきながら。首都に着地する墮天使たち。

鍬を構えてでる前に、冷静になって見つめる。

ミニジョー全部体に告げる。リーダーだけを倒せ、そのほかは無限にやってくる。リーダーだけを倒せ。

そんな無茶な。だが俺たちだけがラスカットの顔をしっている。

後ろを振り返った。頼もしい仲間たちがいた。

俺はにやりと笑って、走った。

右頬を矢がかすった。

冥王星属性なんてあるのか。

九属性目が明らかになった。闇色の属性である。

そればブラックホールみたいに俺の頬をかすり肉を挽肉にしようとしている。

必至になって矢から離れるが矢がブラックホール状になっていく。

「お師匠、あの矢危険だ」

「任せろ」

セイハツ老人が海竜巻を発生させた。堕天使たちがそれに巻き込まれて吹き飛ぶ。

それでも前に立ちふさがる堕天使たち。

俺は敵がプレイヤーでないことにある希望を持っていた。

松の種を放り出すといたるところに松の木が出来た。

花咲き爺さんモード発動。

こんなこといわなくても大丈夫なんだけどね。

ダメージを負ったプレイヤーたちが回復されていく。五分間だけ回復するのだから安心だろう。

鍬を叩き落す盾で避けられ頬をシミターがかすった。

目の前の黒い羽の天使が突き出すシミターから闇色の属性が光っ

ている。

冥王星属性は危険だ。

また巨大化していくみたいに重力が変わっていく。

ブラックホールか？

ずずずとシミターに吸い寄せられ頬をえぐられる。

エフェクト光になってダメージを受ける。

ミセルの気孔で回復する俺は鍬を叩き落とした。盾ごと粉碎して墮天使をエフェクト光にさせ消滅させた。

辺りを見渡す。いたるところで戦争が始まっている。空からは相変わらず墮天使が落下してくる。

「きりがないぞ師匠」

「大丈夫ですか？」

ハルスカットさんが走ってこっちにやってきながら墮天使を二人消滅させた。

リリカットは片端からコンボウで敵を粉碎しエフェクト光によって消滅していた。

ヘイブンさんが魔法を解き放ち当たりが焦げ赤くなっている。天王星属性の太陽を出現させた。光が冥王星属性を相殺させてくれる。

「これで十五分は冥王星を無効化できる。設定では冥王星なんてなかったわよ」

ハイブンさんが怒鳴りながら近づき。

こちら側が優勢になりつつも。

「とにかく俺とミセルとリリカットとセイハツ老人で探すハルスカットさんとハイブンさんは援護を頼む」

俺は走る。走りながらセイハツ老人、リリカットを確かめ、ミセルも確かめる。

そして思いっきりジャンプした。みんながジャンプ力五倍である。向こう側の島にまで到着すると。みんなが後ろを振り返った。沢山の墮天使たちが翼を飛翔させて追いかけてくる。

「みんな二手に分かれるぞ、俺とリリカットそっちは師匠とミセルだ」

「了解」

俺たちは道を分けるように走る。後ろから追いかけてくる墮天使たちが後ろから冥王星属性の攻撃を解き放つも空に輝く天王星属性の太陽によって相殺される。

今がチャンスなのだ。

やつの目的は復讐ならここにいる誰かを殺すためだろう。

よって首都にある何か天使の象徴的なものである。

シンベイーおいミニジョ、やつらの本当の目的はなんだ？

ミニジョー恐らく大神殿にあるガブリエルの銅像だろう。

シンベイーなぜそれを狙う。

ミニジョー話によるとガブリエルは誰かと恋をして石にさせられたらしい。メデューサーによって。

おいおい天使の話にギリシャ神話がなんで登場する。

ミニジョーこれはこのゲームのオリジナルの設定だ。

シンベイーならその恋愛対象ってのが。

ミニジョー恐らくサタンだ。

シンベイーならサタンは絶対そこに向かう。

ミニジョーそれを考えて大聖堂にはNPCを集めている。

シンベイーそりやまずいぞ。

俺の呟きは不自然なほど響いた。

「リリカットお前海のバズーカを後ろにやれ、数千ってしやれにならん」

後ろからは数千の堕天使が俺たちを追いかけてきていた。
一体どのくらいいるんだ？

「任せろ、というかお前スケベいなんだから私の巨大な胸を凝視しろ」

「誰が餓鬼の巨大な胸を見るか」

そこには巨大化したリリカットがいた。

俺は苦笑を押し隠しながら。

リリカットが海バズーカを飛ばした。

全体的に全部の墮天使が動きをとめてもがき始めた。

「えへん、ねばねばを強くさせて接着剤に近いものをつくったのだ」
「お前やるな」

俺が呟くと。

大聖堂が見えてきた。

そこには一人の真つ白に輝く鎧を身につけた男が剣を構えてNPCをひたすら一人ずつ斬って捨てていた。
エフェクト光になって消滅するNPC、俺は声を荒げて突撃した。
リリカットが何度も後ろにバズー力を飛ばす。

「時間稼ぎをするから決着をつけろ」
「わかった」

俺はジャンプした。

「うおおおりゃあ」

鍬を頭上から振り落とす。それをラスカットがガードした。火花がちりのけぞるように横に横にずれると俺の鍬が地面を叩いた。地面が粉碎されエフェクトになった。

右足を前につきだし左足を振り下ろした。
ラスカットがそれを軽く剣ではじくと足がエフェクト光に光った。
ダメージを負った証拠である。

ヒットポイントを確認。

まだ八割ある。

大丈夫か？

「お前には大事な人はいるか？」

「いるさ」

「俺にもいる」

「お前はサタンだろう」

「ああ、サタンだが大事な人くらいはいるだろう？」

彼が笑っていた。

「このメデューサーの血で蘇らせる」

そのポジションにはメデューサーの血が入っているようだ。

俺は体感スピードを三倍にする。つぎに海の鎧を出現させる。

海斬を使用鎧から沢山の海水の斬撃が飛ばされる。それを軽くサタンは避けていた。

俺はこれが本当に体感スピード三倍なのか？ 疑問に思った。

なぜならやつは上手によけている。

やつ自身も体感スピードが上がっているようにすら見える。

「人間よお前は死ぬべきか？」

サタンが微笑んだ。

俺は後ろに下がってまた鍬を叩き落とす。顔面を捉えるがそこには

顔がなくなっていた。

素早いな。

体をくねらせる。

風が吹く。

右肩を刺されていた。剣が突き出ている。エフェクト光が光続けている。

ダメージが減り続ける。

「これを抜かなければ、お前は消滅する。神から聞いたぞお前たちはこのゲームの外の住民だそうだな」

「ならどうした？」

「俺はこの世界から外に出てお前たちの世界を見たい」

「それは無理だ」

「無理じゃない」

いまだ剣が肩に突き刺さっている。ヒットポイントが四割になった。

まずい冷や汗をかきつつも、体感スピードが元に戻った。

また五分待たないといけない。

「お前たちがここにこれるのなら俺は向こうにいけるはずだ？ 違うか？」

「ここは仮想だ」

「仮想でも俺たちは現に生きている」

彼は空を見上げる。

「神よ俺たちは生きているよな？」

剣が引き抜かれた。全身が痺れて動けない。

「毒が入っている。お前は五分は動けないぞ」

とどめを刺される。

「だがお前は倒さない俺は復讐といったがお前には感謝している。
だからガブリエルだけをつれていく」

「ここは通さん」

おっさんNPCがジャマしようとするもサタンの一撃によって消滅した。

俺は声にならない悲鳴をあげる。ただ見ているしかない。
俺は何もできない。

すべてが脳内から吐き出されるようにして悲鳴をあげる。
俺には守りたいものがある。
なのに守れない。

俺は。

俺は立ち上がっていた。

「ほう立ち上がるか」

俺は笑った。

仮想3『海化』 使用回数∞

俺の全身が変化した。全身が海色になっていった。どんどん海の色になっていく体全身が柔らかくなる。鎧と同化したようである。

鎧自身が俺の体である。

俺は前を見据えて一歩突き進んだ。毒が回る。そうだ。覚えていたんだ。

毒解除を使用。

毒が体から抜けた。

俺は一歩突き進むそして走った。

だがサタンは無視して片端からNPCを消滅させながら突き進む。

俺が追いつくかやつが大聖堂に追いつくか。

勝負だった。

エフェクト光が光続けている。

待ちやがれ。

「無理だああああ」

リリカットの叫び声とともに、沢山の堕天使がリリカットに襲ってきた。

仲間を取るか、それともNPCを取るか。

俺の脳内で究極の選択がせまられた。

俺は仲間をとった。

「みんな逃げろ」

そう叫びNPCが逃げ始めた。

サタンは大聖堂に直行に向かった。

俺は沢山の堕天使を見据えて。

海球を連射した。

海球にあたって凍りになって固まっていく人々。

俺はひたすら打ち続けた。

ほとんどの堕天使が動けなくなる。

俺は鍬を握り締めて大聖堂に向かった。

そこには若い女性を背負ったサタンがいた。

若い女性はシルクの服をつけていて目をつぶっている。

細長い鼻や白くて柔らかそうな羽、真っ白の肌がその人が美人だと裏ずけていた。

サタンは巨大な翼で空に羽ばたいた。

俺はただただ見つめているしかなかった。

俺たちはサタンに負けたのであった。

「ちきしょう」

俺は地面に拳を叩きつけ、後ろの堕天使が一斉に空に飛び上がった。

たのはそんなときであつた。

21話 自我を持ったNPCたち（前書き）

只今少しずつ前の話の文章を直し中です。お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。

21話 自我を持ったNPCたち

その日の深夜はエンジェルスタッフ首都全体でお葬式が開催された。これはプレイヤーがやったのではないNPCが勝つてにやったのである。

プレイヤー死傷者五十五人 NPC死傷者四百三十人

これが被害であつた。大聖堂に彼らの遺品が並べられ、一人一人の遺品を神父が片手にとつて拝んでいる。

拝み続けながらみんなが涙を流していた。

俺はただただこれが本当にプログラムなのか疑問に思っていた。

プログラムなら悲しむのか？

だけとおかしい、プログラムには大事な者が消えたら新しい者を探すように設定されているはずだ。

俺は知っている。このゲームを作つた設計者の一人を。

彼はこんな設計をしなかつたはずである。彼の名前は俺の親父であつた。

親父はこんなものを作ろうとしたわけじゃない。

こんな本当の生き物みたいなものを作るわけがない。

何より父親である親父はプログラムの謀反が怖くてプログラムには簡単な措置しか取らせていないはずである。

よつて誰かがプログラムを書き換えた。

考えられるのは。

「神様か」

俺は喪服をつけながら手をあわせた。

死者に俺の知り合いはいなかった。それでも守れなかった。うぬぼれているわけではないすべてを守ってこそ俺なのだ。

俺は大聖堂の庭で一人の少女が泣きべそをかきながら永延と思われるほど母親にたしなめられているのを見た。
近づいた。

過去が蘇る。

俺が中学生の頃に父親と母親は廃ゲーマーになって心配停止によって死亡した。

食事も取らず八十時間のログインによっての命消滅。
いたる場所でVRMMOによる死者が多発した。

それをVRMMOが中止になる限界にまでなっていきそれを打開したのがVRでの世界授業であった。

世界相手に日本だけが中止を叫ぶわけにはいかなかった。

足の不自由な子、目が見えない子、耳が聞こえない子のためにVRMMOが活用されたのである。

世界授業によって沢山の子供たちが自由になった。

今思えば、MMOだけを廃止にしてVR授業だけを継続すればいいのだが。

やはりゲーマーとは不思議なもので抵抗するのである。
よってこのような悲劇が生まれてしまった。

俺は頭を抱えて、その少女を見つめていた。
彼女がこちらを見た。

「お父さんを守らなかった人だ」

その声とともに俺は絶望の瞳を向けた。

彼女は口を動かしていない。

俺の空耳であつた。

「お兄ちゃんどうしたの？」

「いや、大丈夫かい？」

俺が微笑むと。

「お父さん死んじゃった」

脳裏に記憶が蘇るが冷静になつて微笑み続けた。

涙が流れエフェクトになつて消滅した。

草木があり草のにおいが鼻に流れてくる。

気持ちが悪かつた。

とにかくどうかしてしまいたかつた。

俺はNPCより仲間を選んだ。

もしも少女の父親があのだサタンの前にいたら俺は仲間を見捨てたか？

答えはノーだ。

俺は仲間を見捨てない。

俺は本当の意味での正義のヒーローを考え本当の意味でのただしきものを考えた。

誰だって死にたくない。

俺は天界騎士団のギルドに戻ると。ベッドに横になった。天上を見つめながら死んでいった彼らを思った。

消滅するのか？

神様はどんな死を与えるのか？

そもそもサタンは俺たちの世界に行くといっていた。
可能なのだろうか？

こつんと音がなった。

ドアを開けるとルミがいた。

彼女は不器用ながらに微笑んで。俺のほつぺたを引っ張った。
ぐりぐりぐりと引っ張られ俺は苦痛の声をあげたのだがにやりと笑った。

彼女が次にゲンコツを頭にぶちあててきた。

「そこ悩んでないで働きなさい」

ルミがそのように言った。

彼女はいつも俺が悩んでいると唐突に表れて励ましてくれる。

彼女の存在が大きかった。

俺が守りたいもの。

一体なんだったのだろうか？

俺はすべてを守りたい。

だけど彼女だけ守ればいいのではないのか？

またほつぺたをぐりぐりされた。

「あんたは正義の味方に憧れを抱いているようですがすべてを守るなんて不可能なんです」

「何で俺の心を？」

「マスターに頼んで覗いてみました」

「おいお前卑怯だぞ」

天王星属性で見やがった。

「恋人だから許されます」

「いや許されん、お前は俺がお前のケータイ電話を覗き見たら許すのか？」

「許します」

「俺は許さない」

「私は許しますちなみにお風呂を覗いても許します」

「いや、それは」

俺が戸惑っていた。

「あなたはもつと強くなりたいのでしょうか？」

その通り。

「あなたはもつとたくさんの人を守りたいのでしょうか?」

その通り。

「あなたは自分の命を忘れているのでしょうか?」

その通り、つてええ?

「そうですねあなたは根本を忘れていますとマスターが言っていました。あなたは自分を強くさせるために自分を犠牲にしています。マスターはそこに目をつけました。これから私と修行します。海王星にはまだ行きません」

「なんだって?」

俺は苦笑していた。

「リリカットとセイハツ老人には私から言いました。二人は海王星で調査するそうです。ミセルも一緒です。私と二人きりよ」

なんだか怖かった。

「いいのかよお前ギルドマスターだろうが」

「いいのです私よりあなたの存在が大きいからと言いましょか」

「それはいけない俺はお前より大きくない小さい男だ」

「ならあなたに人は守れません」

「小さい男でも守れるものはある」

「いえありません、あなたはこれから神より大きくなるそうです」

「そうですね」

「これはマスターが予言しただけです」

「あの人そういえばサブ職業聞いてなかったけど」

「マスターは預言者でもあります残念ながら満月の時にしか使えませんが」

「はあ」

「そして今日が満月です」

「マスターが予言した？」

「そうですねあなたはもっと強くなれるあなたはもっと沢山の人を守れる。あなたは私の大事な未来の夫になる」

今謎の一声が拳がった。

「ちよまで俺がお前の夫になる？」

「知りませんか？ 結婚クエストです」

「なんじゃそりゃあああ」

俺が叫ぶと。

「あなたと私結婚します」

「そう言う問題じゃねーだろ」

俺が叫ぶと。

「知らないのですかサード職業で夫婦があると二人のステータスが四倍になるんです。これみんな知らないんですよねーそもそも結婚クエストなんて見つける人いないですから」

「お前はどやって知った？」

するとルミがにやにや笑った。
こえーよ。

「それはですね私が今まで何もしてないと思っていましたか？ それは愚の骨頂です。私はひたすらあなたとどうやってつながるかを探し続けました」

「仕事しろや」

俺が呟くと。

「そんなものは愛には必要ありません」

「ハルスカットとハイブンが聞いたら泣くぞ」

「いえ仕事もしましたちなみに仕事はまだ残っていますが二人に任せました」

「お前悪女だな」

「そうです悪女です」

「というか結婚ってどうやるんだ？」

「結婚クエストは地球にあります」

「そりゃそうか」

「というかそれしか見つけれませんでした。師匠が言うにはすべての惑星にあるそうですけど」

なるほどなるほど。

「それで私はあなたを最強にさせます私を守らせるために」

「それが本音？」

「それはちよつとした浮気心で私はもっと自分を強くさせます」

「それが本当？」

「ですが私はあなたと付き合ってみて分かったことあなたはいつまでもいつまでも私より下にいます」

「下にいねーよ」

「あなたは私のしたです夫という立場は妻のしたなのです」

「そっちかい」

「ですが私はあなたのことをこついいいます。 奴隷と」

「おいおい」

「私はあなたのなんですか？」

こいつこんなに話せるやつだったか？

「お前は俺の大事な人だ」

「ならあなたは私の奴隷です」

「いやいや」

「現実でも私の奴隷になることを誓いますか？」

「誓う」

なぜか俺は誓ってしまった。

そうなぜだろうか？

過去を思い出していた。

中学生のころこいつが意味の分からないことを言っていたのである。

『結婚て奴隷になることだよね』

『なんで？』

『だって夫が奥さんにお小遣いを決められるパターンが多いじゃん』

『全国のお父さんに謝りなさい』

『だってお父さんって浮気したら奥さんに殺されるパターンあるじゃん』

『正確には慰謝料という請求書がきて離婚届が押されるパターンがあるが全国のお父さんがそれをやるとは限りません』

『そもそも私のお父さんっていつもパンツ一着で生活してるけど昨日ダンボールで生活してた。なぜって聞くとお母さんが怖いからって』

『お前はどこまでリアルに大人の事情を知っているんだ』

『だってお父さん素っ裸で生活してたから警察に補導されちゃってどうしたんですかって？ 聞かれたらお母さんに服を売られたって』

『お前の父ちゃんは何をしたんだ』

『なんかお母さんの大事なプラモデルを間違って壊したって』

『なんのプラモデルですか』

『なんかロボットだって』

『お前の母ちゃんはオタクですか』

『正確にはねお母さんってプラモデルの会社の社長なのよ』

『それを先にいいなさい』

『でお父さんがその手下』

『おいそれを先にいいなさい』

『それでお母さんがお父さんをリストラにして専属のサポーターにさせたの』

『どこまでひでーんだ』

『お母さんの口癖夫って奴隷よね』

『こえーな』

『だから私とあなたが結婚するとき私の奴隷になること誓ってくださいますか？』

『誓つかばけ』

『いいいだ』

というやりとりのせいで、過去を思い出し俺はこのとき断ったが今なら。

「奴隷になります」

彼女が素晴らしい笑顔でもって俺を抱きしめてくれた。暖かいしハーブティーのような匂いがした。俺は身を話すとキスしようとしてビンタされた。

「結婚のときに取っときなさい、この下種やろっ」

ええええええええええええ

どこまで俺は奴隷に格下げされたのか？

俺は恐怖のあまり聞けなかった。

「そっだあなた今日は食事は一緒に取ることにしましょっ」

「いや俺を強くさせるんだよね？」

「今日から結婚クエストに向けての修行よ」

「一体どんなことをするんだい？」

「正確には二人でボスモンスターを倒すの」

「へえ？」

「審査がいてねその人がどのくらい夫婦のコンビネーションがあるかで合格が決められるのだから今日から私とあなたで修行よ」

「どんな？」

「コンビネーションよ」

「俺奴隷になっただんだよね？」

「そっだ忘れてたわ」

彼女が空を見上げて。

「で？」

「いやいや何を忘れたのかなーって？」

「だから奥さんに送る言葉は？」

「愛してるよ？」

「駄目ね」

「どうすればいいんだ？」

「こう狐が狸に殺されても魚がサメを殺してもゴリラがチンパンジーをぶん殴っても世界が回る限り永延にキス魔がやってきてても殺人鬼がやってきてても変わりに殺されるつもりなくらい愛してるっていいなさい」

「なげーな」

「では食事にします」

すべてスルーかい。

俺はこれからの未来にわくわくした。これは全部演技。

俺を励ますためにSになったただけである。

彼女はわかつている。

俺を励ますためには攻めればいいのだと。

俺はマゾではない。

ただ人と会話して楽しみたい。

それだけで悲しみを忘れることができるのだから。

——現在のスキル——

ラット百匹 海水撒き 六日分

グール一匹 火星属性耐性十五日分。

マッドサイエンティストの亀 海猿化 十九回分。

スロール五十体 海坊主召喚 四回分。

オールゴブリン二十匹 脚力五百上昇 二十日後に消える。

ウォームバエル五十匹 海の鎧 四十七回分。

ワーム二十匹 人魚化 一回分

水流のドラゴン五匹 海の矛 三百四十回分。

水流の獅子五匹 海王星属性五百アップ 四十四日後に消える。

水流のワカメ二百匹 海斬 百六十回分。

ウツドクジラ二匹 全ステータス二割上昇 三十三日後に消える。

サイエンスイルカ二百匹 呪い 体感スピード二倍 解除方法ブラックイルカを倒せ。

ブラックイルカー匹 体感スピード三倍 常備スキル。

フグドリ三十匹 トゲフグになる 三回分。

ビッグカラス百匹 防御力千アップ 二十三日後に消える。

モブ竜十匹 攻撃力千アップ 二十三日後に消える。

水ゾンビ五百体 聖水 五百回分

クラウドピラニア 百匹 海返し二百回。

クラウドドック 二十匹 毒解除 四回。

クラウドキャット 二十匹 攻撃力五十アップ 十三日後に消える。

仮想『海球』 使用回数∞

仮想2『海鋤』 使用回数∞

仮想3『海化』 使用回数∞

ボススキル

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇 ∞

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

職業

『花咲き爺さん』 ケーシ十二パーセント。

21話 自我を持ったNPCたち（後書き）

拙い文章ですがこれからもよろしくお願いします。

22話 ほのぼの修行（前書き）

あつという間に月日が過ぎてゆきますので、スキルがはだか状態で
す。

22話 ほのぼの修行

なつかしの我が家に帰宅した。

俺はタリユウの里の近くの我が家に戻ってきたのである。

ルミが家を眺めながら文句を垂れる。

「駄目よこんなに埃っぽくてすぐに掃除を始めます」

「勝手にやってる」

「勝手にします」

俺はゆっくりとタンスを引っ張ると色んな服が出てきた。

ローブだったりジャケットだったり、はたまた神父服だったり。

これはプレゼントされてストックしていたものである。

気持ち进行をなごませながら窓から見える外の光景に驚いていた。

紅葉を知らせる秋の木々が漂っていた。

このゲームには季節がある。思い出した。

俺はその紅葉を見つめた。

天王星とか海王星とか水星とかだと季節はあるのだろうか？

地球ならではの特性なのではないのか？

まだ分からないことだらけであった。

ルミはワンピースの上に柔らかい皮の鎧を身につけているが。皮の鎧を脱ぎ捨ててベッドに置いた。

次にルミは箒をアイテムボックスから取り出して掃除を始めている。

俺はぼーっとしていた。
何もかもがスローで。
何もかもが苦しくて。
何もかもがむなしい。
でもここに愛情を感じる。

空気を吐き出した。

いつまでも悩んでたってしょうがない。

「ちょっと出かける」

「いいけど修行を忘れないでね」

「もちろんだけど何をするんだい？」

「1 属性を忘れること」

「ミミジヨが言ったのか？」

「うん」

「それで結婚クエストはいつやる？」

「まだやらないわ」

「そうかわかったお前もがんばれよ」

「もちろんよ奴隷」

「そこは奴隷といわないの」

「だってあなたは未来の奴隷よ」

「ちょっと幻滅するじゃないか」

俺が苦笑すると。

「ありがとなお前がいると元気が出る」

彼女が顔を真っ赤にさせて笑った。

「私もあなたがいると元気が出る」

「そりゃどうも」

ワープポイントに出てワープした。

タリユウの里に到達すると。

とてつもない異変に気付いた。

里が発達している。

大きな建物が沢山あり。

さらには商店街が大きくなっている。

商店街をきりもりしているのはプレイヤーとNPCである。

俺はいつも通ってきた相棒の下に向かった。

そいつはちよつと腰がまがったかと思えるくらいの巨軀をしていて、こちらを見て微笑んだ外人みたいな、いやアメリカ人だったわけ？

「よお？ シンベイ元気か？」

「セイコブも元気そうだな」

「おうばりばり売ってるぜ、そうだ種買うか？」

「いやいいよちよつと修行しないといけなくてね」

「そうだレア情報があるぜ？」

「どんな情報だ？」

「ブロッコ畑がでかくなった」

「まじか」

「挨拶してやれよお前がいなくなっただけに、あいつなりに頑張ったんだと」

思っぞ」

「そうするよ」

「それとこれは手見上げた」

ほいつと渡されそれはジャガイモのパンであつた。

「こいつがあれば腹は満たされる。ジャガイモはブロッコの畑から取れたものだぜ」

「助かるよ」

齧りしめたら口の中にうまみが広がった。

これは普通のジャガイモじゃない。

何か魔法がかけられているほどにうまかった。

口がとろけそうなのに。

それでも口の中はすっぱくなった。

俺は街を眺めた。

やはりNPCがプレイヤーのお店で買い物をしている。

NPCは自我を持っている。

これはたぶんあっているだろう。

俺はタリユウの里の畑に到達した。

本当に大きくなっていた。

五十人くらいのサブ農民職業の人が働いている。

ブロッコ赤い髪はいまだに健在であつた。

ブロッコが俺を見るとすごい顔をして微笑み走ってきた。

「戻ってきたんですね!!」

「ああ戻ってきた」

「噂は聞いていますよなんか水星のボスを倒したのだとか天王星のボスを倒したのだとか」

「ああみんなで協力して倒した」

「また畑やるんですか?」

「ごめん、今修行するんだよ」

「へえ」

「どうした?」

「なんか一人じゃないだろうなって思いました」

「まあ、彼女がいるんだが」

「できたんですか?」

「昔お前に言っただろ告白してスルーされたやつあいつがどうやら本気で俺のこと好きだったみたいでな」

「それはハッピーエンドじゃないですか」

「だけど本性は怖いほどのサディストだったけどな」

ブロッコが笑った。

「あなたは尻にしかれたほうがいいんですよ、だっていつも唯我独尊みたいに頑張る人ですから」

「それほめ言葉?」

「ほめてるんです。そうだみんなに紹介しますよ」

「いやいいよ、またくる。元気でな」

「今度家に遊びに行きますよ」

「待ってるぜ」

笑うとブロッコが苦笑していた。

タリユウの里のワープポイントにて自宅に戻った。

自宅では不思議な絵画が飾られ変なつぼも飾られていた。
埃のエフェクト一つ見当たらない怖さだった。

テーブルには豪華な料理が並べられ。

ミートスパゲティーにハンバーガーさらにコーンポタージュが置かれ。ワインも並べられている。ワインはビンに入ったまままだコルクを抜いていなかった。

彼女が窓から見える景色を眺めながら。泣いていたのを目撃した。
心の中に何かが芽生えた。

俺は後ろから彼女を抱きしめた。
ルミがびくつとなつて身を任せる。

「どうした？」

「いや、お母さんとお父さんに会いたくなつて」

「俺がいるから安心しろ」

「そうね奴隷がいるもんね」

「否定はしない」

そうして俺たちは昼飯にありついたのであった。

「お前この料理の作り方誰に教わった？　すごいウマイぞ」

料理とは材料があつてそこに色んな香辛料や鍋で煮たり、次に包丁で微塵斬にしたり。さらにはフライパンでいためたりして出来る。

だけどこの世界の材料は現実世界の肉だとか簡単ではない、大抵の肉はモンスターの名前が付いていて、何と何とが相性がいいのが難しいのである。

「私のギルドに料理に詳しい人がいてその人から教わった」

「なるほどなお前がつくれるわけねーよな」

「ぶっ殺していい？」

「いやまてフォークをこっちに向けるな」

「うりゃあああ」

フォークが顔面に突き刺さりヒットポイントが微量ながら減少した。

「殺す気か」

「殺すつもりはないです。とどめを刺すつもりです」

「ごめんお前の料理は世界一だ」

「あっはっは、そりゃそうですよ」

彼女が笑っている。心のどこかに忘れてきた感情がどんどん強くなってきた。

愛だとか。

心だとか。

または友情だとか。

思いやりだとか。

色んなことを思い出した俺は笑ってしまった。

食事を終わると台所で彼女が食器を洗っていた。

そうして午後になった。

二人して外に出ると最初に見つめたのは沢山の木々であった。

「師匠の話によると物を破壊することは可能だそうです。ただし物にはヒットポイントはありません」

「どういうことだ？」

「つまりそのキャラクターの力で倒すしかないのです」

「本気を出せってことか？」

「そうです」

俺は腰から鋏を取り出した。

ルミが二ふりの鎌を握り締めた。

「では始めます。木々を最低でも五十本は破壊したら次の修行です」
「よっしゃ」

——二時間後——

ぜいぜい。息を吸いながらとてつもない苦しさを味わっていた。

「これ無理じゃないか？ まだ一本も倒してないぞ」

俺の声にルミが怒鳴る。

「そんなの当たり前じゃないですか、属性を忘れるための初歩です」
「初歩でこんなに難しいのかよ」

「知っていますか？ 昔の侍は一刀で木々を両断したものです」
「それ漫画の読みすぎ」

「漫画じゃないもんドラマだもん」

「それは作り事です」

俺が笑うと。

「ところであそこで眺めている赤髪はだれですか？」

「うおブロッコじゃねーか」

ブロッコがこちらに走ってきた。

「なにやってるんですか？ その美女は？」

「ああ、こいつな俺の嫁になる予定の人ちなみに奴隷一直線だぜ」

「よろしくねあなたは？」

ルミがたずねると。

「ブロッコですシンベイさんにはいろいろとお世話になりました。

あなたはルミさんですね？ 天界騎士団のギルド団長の」

「そうよ」

「俺たちは修行してるんだよ強くなるために」

「なるほど」

ブロッコが顎を引いて考えているようだ。

「その修行内容を教えてくれませんか？ 僕たちも出来るかもしれ
ませんか」

「なるほどな、そうだよってみないか？ 修行内容をタリユウの里

で公開してみんなできれば戦力アップにつながるぞ」

ルミがぼんと拳を叩くと。

「じゃあ1番目から伝えるわよあなたたちは近くの森でやって私は彼と二人きりがいいから」

かくしてタリユウの里で強くなるための修行が始まった。

——参加人数五百人——

それから一ヶ月が経とうとしていた。

毎日が楽しかった。ひたすら会話してひたすら修行して。

ひたすら食べて。ひたすら地球での生活を楽しんで。

俺とルミがセイコブの店にいくと下ネタが突き出て彼女を真っ赤にさせて困らせたものである。

俺はというとやっと木を二本倒した。

この修行を甘く見ていた俺にとってこれほど力がわく思いを知った。

意外と難しい修行である。

参加人数の五百人は五人くらいがやっと一本倒したそうである。

もちろん木々は倒れるとエフェクト光になって消滅してドロップアイテムを残すのである。

これも新しい発見となった。

―木の皮―

を落としてお店では十万ゴールドのレアアイテムとなった。
なぜなら鍛冶屋で武器に装着すると地球属性強が付与されるから
である。

未だに地球属性付与強が見つかっていなかったためこれによる反
響はでなかった。

商人プレイヤーが木々を倒すために奮闘するのも目撃されたもの
である。

「どのくらい大きくしますか？」

今俺とルミは建築屋に話しを進めていた。建築屋では社長がプレイヤーであり手下がNPCという設定になっていた。NPCは自我を持っていることが確かめられたことから。

プレイヤーたちがNPCを活用するのが多くなった。

「えっと三階建てにしてほしいんです」

ルミがそう言う。

「それなら二十万ゴールドが必要ですが？」
「お願いします」

木星スキルで木々を召喚してのこぎりで切断し建物を作るという
ことが今やられている。

これはゲームがデスゲームとなる前からやられていたことである。

建築家のおっさんは俺たちの家までやってくると一言呟いた。

「こりゃ難しくなりそうだぜ」

後ろに従えるNPCが木星属性を使用した。

あつという間に沢山の木々が召喚された。

今分かっていることNPCは属性スキルを使用することができる。

これも新たな発見であった。

建築が進められている間。俺たちはタリユウの里で寝泊りすることになった。

宿屋で生活していると。なつかしの宿屋のおばちゃんがこちらを見て微笑んだ。

「夫婦になる予定ですと」

いったら同じ部屋に通されしかもベッドが一つしかないというハブニングもあったが。俺とルミは隣同士で寝た。

触ることはせず。純粹に眠った。

「あなたの心を覗いたときサファイさんとフルさんて人がレッドプレイヤーに殺される映像があったわ、私あのとときあなたの苦しみが想像できたの」

ルミが涙を押し隠しながらベッドで天井を見つめながらいって

た。

俺は微笑んだ。

俺の記憶。

俺の過去。

俺はどうやって成長すればいいんだ？

「そうだね俺はスズメを恨んでいる。どうにかして倒したい」
「もしも私が死んだらどうする？」

すると笑ってしまった。

「安心しろ絶対に死なせない」

それが俺の決意の声なのだから。

「私もあなたのことを絶対に死なせない、沢山の流れ星が降ってきても私はあなたを追いかける」

「意味がわかりません」

「いいじゃん」

するととても暖かいぬくもりを感じた。

ルミが背中を抱きしめてくれた。

俺と背中越しにルミの体温が感じられる。

これはゲームなんかじゃない。

こんなにぬくもりを感じられる世界がゲームなわけがない。

このとき俺は確かに生きている実感を味わっていた。

22話 ほのぼの修行（後書き）

拙い文章ですがこれからもよろしく願いします。

23話 2番目の修行（前書き）

スキルがはだか状態ですがこれから覚えて行くのでバグというチートにお付き合ってください。

23話 2番目の修行

修行を始めてから五ヶ月が経過した。
俺たちは確かに木々を粉碎していた。

今日の前で沢山の木々があつた場所を見つめて。
そこにはもう木々なくなり。

俺とルミのノルマ五十本を破壊したのであつた。

風が俺を笑わせるようになだらかに吹き荒れた。
とても気持ちよかった。

このゲームを始めて長い月日が経とうとしていた。

ミニジョからの伝言すべてのスキルを使用して零にさせる必要があるといわれた。今俺のスキルはのろわれたやつ以外は仮想しか残っていないかつた。

海坊主を四回も意味のなく召喚させては海坊主に怒られたものがある。

海水撒きを適当に森に放つてはモンスターの悲鳴が聞こえたものである。

——現在のスキル——

サイエンシルカ二百匹 呪い 体感スピード二倍 解除方法ブラ
ツクイル力を倒せ。

ブラツクイルカー匹 体感スピード三倍 常備スキル。

仮想『海球』 使用回数∞

仮想2『海鋏』 使用回数∞

仮想3『海化』 使用回数∞

ボススキル

メルクリウス 全ステータス二倍に上昇 ∞

ウーラノス ジャンプ力五倍 ∞

——職業——

『花咲き爺さん』 ケージ十二パーセント。

もう素っ裸になった気がする。

「2番目の修行はいたってシンプルその武器だけで敵を倒すことスキルを使用してはならないためスキルを全部使用して何もかもなくすことにより臨場感を増やす。仮想は使ってはならない、職業も使ってはならない、そして何よりも敵は自分より弱いやつを狙うこと」

がミミジヨからの伝言である。
ルミが伝えてくれる。

困ったものだ。

一体何をさせたいのやら。

折角貯めたスキルを無駄に使用したのだから。何か考えがあるのだろう。

「最後にその種類のモンスターは一体だけ倒し次の新しいモンスター

―を倒すこと、それ以外は逃げること」

「これはどういう意味なんだ？ ルミ？」

「師匠が言うにはバグが発生させるんだって、条件が使用スキル零で仮想と呪いスキルは省かれるって」

なんだか意味が分からないけど俺はとにかく鋏を握り締めて、森の中を探索すること一時間で敵を見つけた。

―ボーンナイト―

俺は向かって鋏を叩き落す。なんと一撃で倒してしまった。

「一体どういうことだ？」

「たぶんもうバグが発生してるわ」

「どんなバグなんだ？」

「木を一本倒すことにプレイヤーのステータスが二割上昇するのってミニジョが言ってた」

「つまり五十本だから」

「百割上昇したのよステータス表を見ても分からないでしょうけど変化はしてるわ」

「なるほどそれがバグの力か」

「そうよ」

「となると次はボーンナイトを倒しちゃ駄目だな次のバグが発生させるために」

「そうよ」

俺はにやりと微笑みルミもにやりと微笑んだ。

俺たちは森の中を歩き続け、ほぼ一撃でモンスターを次から次へと粉砕していった。

このバグ情報はタリユウの里でも公開されている。

細かいことはつげていないが。とにかく五十匹モンスターを一体ずつに別なやつを倒し、次に今もっているスキルを零にすることという内容で。

俺たちは一日をかけて。

五十匹の色々なモンスターを倒し終えた。

倒し終えた瞬間異変に気付いた。

全身が光っているのである。

——スキルが呪いと仮想以外存在しませんバグが発生します——

いきなり全身が真っ赤に輝いた。それはルミも同じであった。

全身が燃えるように熱かった。
なんだこれは。なんなんだ？

いきなりぶつんと途切れた。
何も見えなくなった。

目ざめた瞬間そこには俺が高校に通っている姿が映った。
これは過去を表している。

隣の映像ではルミが高校に友達と通っている。

俺とルミは浮遊しながら手をつないでそれを眺めた。

俺はサッカー部に入っている。

そしてルミはバトミントン部。

どういう意味があるのかその名前だけが強く光っていた。

次に人々が沢山俺とルミを通り過ぎていく。

取り残された俺とルミ。

神は一体何を見せようとしているのか？

いやこれは神ではなくてゲームシステムのバグか？

俺たちはひたすら過去を見続けた。

そしていきなり脳内に声が響いた。

——あなたは力を求めし人間、力を授けよう——

次に目を開けた瞬間何かが全身を駆けめぐった。

服を脱ぎ捨てると刺青が入っていたサッカーボールの刺青である。
ゆっくりとなぞると、サッカーボールがでてきた。

刺青が消えた。

サッカーボールを握ると。投げてみた。ものすごいスピードで飛んでいきしばらくすると戻ってきた。胸でキャッチすると体にしみ

こんだ。

服を着てやってみた。

手を胸に叩くと服の上からサッカーボールが出現して次に俺はまた投げた。また戻ってくると服の上からでも体の刺青の中に入った。

これはなんなんだ？

一方でルミは掌にバトミントンの刺青があり、それをぽんと叩くとバトミントンが現れた。バトミントンのラケットを握り締めて振った。

すると驚くことに玉が飛んでいき光の爆発を浴びせた。

天王星スキルだと分かった。

もしかしたらと俺は気付き。

サッカーボールを出現させ。

それを近くにあった木にぶつけた。

ぶつかった箇所がべとりとしている。

海王星属性が付与されている。

つまりこういうことなのだ。

バグを発生させるために覚えているスキルを全部使用する。

さらに何もなくなったところでこのバグを発生させるとバグが属性をおびる。

たぶんほかのスキルがあるとバグが成功しないように設定されているというかシステムのせいではできなかったのだろう。

例えばAとBというシステムがあつて、そこにCが入るとABというプログラムが発生せずABCというプログラムが作動してしまうバグではなくなる。

つまりA『何もないでスキル』B『モンスター色んな種類』で作動できるのだ。

まったくこのシステムを作った人はとんだ裏技が大好きだったのだろう。

なぜミミジヨが知っていたのか？
考えられるのは預言者というサブ職業である。

それで預言したと考えられる。

彼女がバトミントンを刺青の中にしまうと。

俺とルミが爆笑した。

「すっごい力だ」

「まったく本当に意味がわからないわよ」

俺とルミは笑い続ける。

涙を押し隠して。

それでも確かに意味があると思えるから。

意味なんてないさなんていわせない。

なぜスポーツだったのか？

これがバグの力なのだとしたら。

俺たちは過去を思い出す。

そこには確かに幸せがあつて。

今も幸せだけど死と隣あわせなのだ。

今さらながらに気付くのであつた。

それから二ヶ月が経過した。

俺たちは新しい能力をどうやって制御するかで論評しあつた。

タリユウの里の参加者五百名が全員力に目ざめた。

今彼等は確かに力をかみ締めている。

そしてこの情報は消えた。

なぜ消えたかというレッドプレイヤーに流れると危険だからである。

タリユウの里だけの極秘事項となつた。

案の定タリユウの里には部外者はいなかつた。

よつて身内同士であつたため極秘に出来た。

旅人がこなかつたつて？

誰もが思うだろう？

だが旅人はこなかつた。

地球といつても広くて広大である。

タリユウの里のクエストはだいたいが完了され。もう旅人はこない。いやプレイヤーすらこなかった。

だからタリユウの里には数万のプレイヤーの身内しかいなかった。もちろんレッドプレイヤーは一人もおらず。住民票なんかも出来ている始末であった。

俺は苦笑したね。

俺たちの家は三階建てになってルミと一緒に生活しやすくなった。三階には色々な物が置かれてあり、三階のベランダにはバーベキューができるようになっていた。

俺たちはその日みんなでバーベキューをしていた。

ブロックとセイコブ、それに刀鍛冶のブルコックもやってきた。

みんなで肉を焼किながら。それぞれが力に目ざめていた。みんながそれぞれの力を秘密にしていた。

「俺思っただけどさ、タリユウの里の五百名を精鋭化しないか？」
「どういうことだい？」

セイコブのもののいいに俺が尋ねると。

「だからみんなつわものぞろいでさステータスも百割上昇してる。だからな？ こいつらでボスモンスター倒せないか？ もちろん俺もいく」

セイコブがそう断言すると。

「俺様もそろそろ刀鍛冶を止める時期だと思っておった」

ブルコックがそう呟いた。

「この命リーダーに任せよう?」

リーダーって誰だよ。

「あなたがリーダーだ」

俺を指差していた。

「俺えええ?」

するとブルコックも笑った。

「どうですか? 五百名であなたのギルドを作るんです」

俺は慌ててしまった。

「名前はどつする?」

セイコブが笑いながらいうと。

「まてまてまだギルド作らないぞ」

「さてどつするものやら?」

セイコブがちゃかすと。

「ギルドつくりなさい」

ルミが断言したのであった。

「えでも？」

「あなたがギルドをつくってくれと私のギルドと同盟を結べるで
しょ？」

「確かにな」

頷く俺。

「よしギルド作ろう」

―それから一週間が経過した―

後ろにそびえるのは大群いや五百名。

俺はただ一言注げた。

ギルド本部は大きなビル状の建物である。

「名前は『豊作の鋏』ギルドだ。農作専門ブロッコ 商売専門セイ
コブ 鍛冶専門ブルコック、みんなこの三人から所属するところを
選んでくれ、それと同盟の天界騎士団もいる」

「「「「うおおおおおお」」」」

全員が叫んだ。

ギルドを作るには星占い屋でギルド申請をしなくてはならない、最低でも四名はいないと駄目であり、ちょうどブロッコ、セイコブ、ブルコックがいて四名になったのである。

俺たちの明日は確かにつかめた。

次の朝、ギルド本部には沢山の人々がやってきた。

みんながそれぞれの修行を始めるためにパーティーを組んでいく。

俺への挨拶もぬかりなかった。

一人一人ずつ名前を覚えていくのに苦勞していた。

主に商売でギルドの金を稼ぐのがセイコブであり、その商品をつくるのがブロッコである。

そして鍛冶専門では数十名のパーティーが鉱山にまで向かって材料となる鉱物を集めて持ち帰ってくる。

そうやってちよつとずつギルドの資産を広げていく。

現在のギルドレベル1である。

ちなみにビルを購入したお金はみんなからの寄付金でなんとかあった。

ビルは黒塗りであり今建築家が色んな設備を導入している。

地下に訓練所を作ったり。

その訓練はあの力。

―スポーツパラメーター―

と俺たちは呼んでいる。

それぞれの得意なスポーツが力となるのでこう呼ばれる。

ちなみにステータス表には表記されない。

みんながそれぞれの夢を抱いて歩き、そして前へと立ち向かう。
俺も逃げられない場所にまでやってきた。

そうつまり。

「結婚クエストをやりに行くわよ」

「まじか？」

「まじよ」

「スキルないぞ」

「3番目の修行はスポーツパラメーターでボスを倒すこと」

「まったく」

俺の囁きルミが微笑んだ。

俺たちの修行はまだ続きそうです。セイハツ老人、リリカット。

元気ですか？

俺は元気です。

とても元気です。

怖いくらいに。

「でもそうだなあなたがタンカーになつて」

「無理いな」

「なら誰がタンカーになるの？」

その言葉で俺は悟つたね。

俺はサンドバックになるってね。

「ところでもうこのゲームが始まって十ヶ月が経つわよ」

「そんなに経つのか」

「私はあなたにこう申します」

「なんだ？」

「あなたの夢は何と？」

「それはみんなの無事だ」

「却下」

「却下されても俺はそれを願う」

「私の夢はあなたただけでも生きることです」

「却下だ」

「なぜにいいい」

彼女が怒鳴った。

「俺とお前、一緒に生還しよう」

「約束よ」

俺とルミが約束の指きりをしたのであった。

ビルの建物から外が見える。太陽が輝いていた。

ビルは木材で出来ているため、ぐらりと揺れるのは風のせいであ

る。

二十階立てであり上にいくと怖くなるため。
上には変わり者しかいなかった。

俺とルミはしばらく空けることをセイコブに注げると。

ワープポイントで江戸城に向かったのである。

この地球には江戸城がある。

つまり江戸を模した町があるのだ。

そこに結婚クエストがある。

俺は微笑んだね。

これが地獄の始まりだって。彼女の奴隷となるための一歩なのだから。

風が冷たく吹いていた。木の葉手が散って俺の顔面に直撃したのは言っまでもなかった。

23話 2番目の修行（後書き）

現在文章力いろいろ工夫して修行中です。まだまだですがお見守りください。

24話 結婚クエスト

江戸城は巨大な都市みたいな存在であった。

巨大なお城は色々な機械が詰め込まれ時代の進化をにおわせた。なぜならそこには城というか機械城があったのだから。

からくり城と呼んだほうが的確かもしれない。

城下町に入ると。

NPCがみんな浴衣を着用して歩いていた。

浴衣売り場があったものである。

プレイヤーはみんな普通の服を着用して団子屋で団子を食べたり。

饅頭屋で饅頭を食べたり。

どうやら美味しい食べ物が沢山あるらしい。

「ところで結婚クエストはどこにあるんだい？」

「あそこよ」

そこは大きな屋敷であり門番にいかめしいおっさんがいた。
ルミが名前を告げると通してくれた。

屋敷の中に入ると。

今まで結婚したのであろう人たちの写真が並べられていた。

俺は苦笑を押し隠しながら。

このゴシックみたいな屋敷を見つめた。

大きなつぼがあり高そうである。

絵画はどれもが結婚を浴衣で決めている人たちばかり。

一人の老人の銅像があった。

二人は二階の主人の部屋に通されると。

中には二人、さきほどの銅像そっくりの爺さんと別な婆さんが手をつないでいた。

二人がこちらを見てにやりとほくそ笑んだ。

「君たちは結婚をするのだね？」

「そうよ」

ルミが爺さんの発言に頷くと。

「では結婚クエストを開始していいわね？」

婆さんがルミと俺に尋ねる。

「ああ大丈夫だ」

「ではこれから手を離せないようにします」

「なんだって？」

有無を言わず。俺とルミの右手と左手が合体した離そうと思っても離せなかった。

俺右利きだようしてくれんだよ。

「このときだけプレイヤーは両手利きになります」

ためしに左手で鋏を握ると確かなじんだ。

腰にまた戻した。

「ではこの地図を渡します。ここにボスがいるので協力して倒すように彼がお目つき役です」

そこにはいかめしいおっさんがいた。さきほどの門番の弟のよう
だ。

「ジェントルである」

そのおっさんが注げた。

「道案内を任されている。ついてくるように」

そうして俺たちはジェントルの後ろを付いていった。地図を見ながらジェントルが間違っていないかを確かめて。

俺は江戸城の外に出て驚いた。

沢山の森が普通の大きさよりも巨大であったためである。

そう考えても見てくれ普通の木々の五倍の大きさの木々があつたら誰でも驚くに違いない。

それが当然でありモラルだ。

なら目の前で木々が動いていることもモラルなのか？

木々が動いて会話している。

「あれは生きた木々と呼ばれている。危害は与えてこない」

ジェントルが注げた。

ちょっと怖かったけど。俺たちはゆっくりと前へと突き進んだ。
歩くこと二時間で巨大な洞窟にたどり着いた。

その洞窟はこちらを見て微笑んでいるようにさえ見えた。
不思議な感覚であつた。

「ここからはボスモンスターしかない」
「はい」

俺と彼女が手をつないだままじっとりと汗を掻きながら前へと突き進んだ。

洞窟は鉱物が光っていてよく見えた。
ジェントルの眉間も良く見えた。

そして何よりも。男と女が裸で抱き合う銅像ばかりが見えた。

ルミは顔を真っ赤にさせてうつむいていた。
まあ女性には酷な話だ。

男性が素っ裸で踊っている銅像もあった。

「旦那様が趣味で作らせた」

ジェントルの物言いに俺は絶句したね。

趣味ってただえろいだけだろうが。

俺は笑いを押しこらえながら前へ前へと突き進んだ。

巨大な扉が見えてきた。

「ここから先はあなたたちだけで行ってください」
「はい」
「はい」

俺とルミが扉を開けて中に入ると。巨大なドーム状の空間に出た。

真ん中の石に手を当てた。どうやらそれが儀式のようだ。

いたるところの扉が開き。

そこから無数のモンスターたちが現れた。

モンスターは全部で百体のようで。

みんながペアで襲ってくるようだ。

モンスターの名前は。

――結婚の銅像――

であった。

どうやら旦那様と呼ばれた人が銅像に魂を与えたようである。

みんなが武器を握り締めて右手と左手を握りながら襲ってくる。

「さあてスポーツパラメーターを使いますか」

「うん」

俺は胸からサッカーボールを取り出すと。ゾンビのようにゆっくりと突き進むモンスターに向けて思いっきり投げた。左手だけで投げるとちよつと違和感があったけど。

ルミは右手でバトミントン攻撃を繰り返す。

次々と消滅していくモンスターたち。

一人欠けることに一気に早くなるモンスター。

「なるほどな片割れだけを壊したら一方が強くなる設定のようだ」

俺とルミは手を握り締めた状態で横にかわしてはしゃがんだりしていた。

頭上を剣が通過すると。

ちよっと困った表情をして見せた。

「どうする？ ルミ」

「同時に二体を倒すはあなたがターゲットリーダーになって私があわせるから」

「任せろ」

ターゲットリーダーとは俺の名前を表記させたままターゲットと頭で入力すると。

俺がターゲットしている敵が表記されるのである。自動的にそちらに攻撃する仕組みでもある。

俺が片端から攻撃を繰り返すと。彼女も同じ敵に向かって攻撃する。

そして片割れだけになったらそちらに攻撃して一気に粉碎する。

残りの数は五十体である。

「どうやら仲間が減るだけでも強くなるみたいだ」
「そのようね」

全体がとてつもなく早くなっている。

サッカーボールを構えながら。ボールで敵の攻撃を防ぐと。海王星属性のねばりが生まれて。敵の剣がべつとりとしている。

それをモンスターが慌てた様子でびつくりすると。
俺はサッカーボールを解き放ち。

次から次へと消滅させていく。

ルミのバトミントンも敵を狙っていく。

残り二十体。

俺たちは何を考えてこんなことをしているのだろうか？

二人とも彼を彼女を愛しているのだから。

こんなことはへっちゃらなはずである。

なのにつながっている手からぬくもりを感じる。

手が体を刺激して。

まるで強くなれと暗示しているように。

俺とルミはどんどんと強くなっていく。

何度でも這い上がる。

負けようが負けようが立ち上がる。

そして勝つまで死なない。

それが俺とルミだ。

俺の心の中にはいつも孤独があり。

ルミの心の中にはいつも俺がいた。

今ならそれが分かる。

そして俺の心の中にはルミがいた。その手から伝わってくる愛情で確かに感じている。

俺の心の中を支配するのはルミだ。

俺が奴隷になろうとルミの奴隷だ。

夫として俺はルミの奴隷になるんだ。

俺は固まった手をほぐすように。
ルミとダンスしている。

一歩退くと敵が頭上をかすめ一歩ダンスを刻むと右頬をかすった。
ダンスのように次から次へと敵をほふる。
まずは一歩からだ。

俺とルミのダンスはいつか終わる。
そして終わったときそこには確かな愛情が生まれているはずである。

手をつないで始めよう。

俺とルミの時代を。

俺が強くなるにはルミが必要だから。

「さて絞めだ」

「そうね」

俺とルミの目には涙が流れていた。

そうして最後の二体を倒すと。

洞窟が輝いた。虹色の輝きに照らされて。真ん中にある石が鼓動を發した。

そこから巨大なデュラハンの銅像が生まれた。

デュラハンは首なし騎士である。

そいつが相棒の首を持っている。

どうやら体と首で結婚しているという意味らしい。

デュラハンが跳躍した。

「さっきのやつとは違うぞ」

俺の叫び声にルミが頷く。

「意識を集中してスポーツパラメーターを使つて」
「あいよ」

俺とルミが一緒になってスポーツパラメーターを使用する。

サッカーボールが直撃するもはじかれる。バトミントンがぶつかるうともはじかれる。

どんな方法ならこいつを倒せる？

俺は心の中である種の虚脱感というかむなしい感覚を味わっていた。

サッカー部に入って一ヶ月が経っても俺はサッカーを蹴る力が出なかった。

そうだ。俺は間違っていた。サッカーボールとは蹴るものだ。

そしてルミも気付いたようである。

「バトミントンって玉を打つものよね」

今まで彼女が光の玉を出現させていたものが変化した。

俺はサッカーボールを蹴るようにして。

彼女は刺青の中からボールを出現させた。

羽かざりがついていて天使のようであった。

俺とルミが同時に攻撃した瞬間。

虹色の輝きがともされデュラハンが消滅した。

俺たちは苦笑を押し隠して。左手と右手でハイタッチした。

「やったね」

「こんなものさ」

俺は確かに感じていた。

これが結婚クエストなのだと。

デュラハンの銅像から結婚指輪を取り出した。俺と彼女がそれを指にはめると。

頭上に表記された。

『結婚しますがよろしいですか？』

「はい」

かくして俺と彼女は夫婦となったのであった。

『スタータスが四倍になります』

俺たちは確かに未来を掴んだ。

それからジェントルに案内されてさきほどの屋敷に戻ったのであった。

屋敷の中では二人の老夫婦が微笑んでいた。

「おめでとう、これから夫婦になるのだから喧嘩はしても分かれなようにね」

老人が微笑み。

俺と彼女がつながれていた手が解除された。

「ではご機嫌よ」

老女が呟いた。

俺とルミが一緒になって江戸城の城下町を眺めていると。ルミが呟いた。

「さて奴隷に命令するわ私に美味しいものを食べさせて」

「別になんでもいいだろ」

「なんだって？」

ルミがブチ切れるので俺は頷き。

「団子はどうですか？」

「いいわねでもヘルシーなものがいいかな」

「なら煎餅で」

「それにしましょう」

「ところでシンベイ、あなたにとって私はなに？」

「妻です」

「ところでシンベイ、もしも浮気したらどうなると思う？」

「食事抜きです」

「ところでシンベイ、リリカットとはどんな関係？」

「兄と妹的な関係です」

「ところでシンベイ、さっきからあそこにいる巨乳を見ている理由

「は？」

「いや煎餅屋だから」

「ところでシンベイ」

「ああ、うるさい」

と後ろを振り返った瞬間。

俺と彼女の唇がふさがって。

暖かいぬくもりを感じたのであった。

シンベイにとってファーストキスであった。

ところでVRMMOだからファーストキスに位置しないのかな？
とか思っていたシンベイであった。

25話 4番目の修行

タリユウの里に戻ってきた俺はギルド本部にてみんなの報告を聞いていた。

「商売は軌道にのったようだよ」

とセイコブが呟くと。

「みんな鉱石をちゃんと回収してくれるから武器も大量に作成できる。戦力アップが見込めるぞ」

ブルコックがそう呟いた。

「畑では沢山農作物がとれたのでタリユウの里の生命線は安全かと」

ブロッコがちょっといぶしかげに呟くと。

「みんなよくやってくれたこれからも頼む」

「ですが海王星のボスを倒すにはまだスポーツパラメーターを使えていないようなのです。そもそも僕自身もスポーツパラメーターを上手に活用できていないのです」

ブロッコが独白する。その場にいた一同が頷く。

「どうやらみんなで四番目の修行をする必要があるわね」

今まで黙っていたルミがそう呟くのであった。

「それと俺様たちのスキルもほとんどがない状態だ。そろそろモンスターを倒してスキルを覚えないとまずい」

ブルコックが少ししんみりとしながら呟くと。

「それは安心して、地球の『大和の洞窟』で上級スキルを覚える予定だから」

「それは真か？ ルミ」

「そうよシンベイ、私だってバカじゃないわ『大和の洞窟』だと八種類の属性がほとんど効果的なものを覚えるって情報誌に書いてあったから、それに師匠からの伝言でもあるの」

「だがスポーツパラメーターをちゃんと活用できていなかったら危険ではないか？」

セイコブがそう呟くと。

「それは大丈夫。みんなには合宿してもらうつから」

「どこにだ？」

「シンベイ、それは愚問よ」

「愚問つつたつて」

「無属性のモンスターをみんなに倒してもらいます」

「そんなのいるのか？」

「そのモンスターを倒してもスキルを覚えることはありません、みんなには無駄なスキルを覚えてもらわないための対応策です」

「そうか、無駄なスキルを覚えてるとステータス表を確認したときに沢山表記されるからどれを使おうか悩んでしまう?」

ブロッコが確信をついた発言をする。

「そういうことです。場所は『クルブシの草原』よ」

「ワープでいけるのか?」

「いけません徒歩で向かいます」

「だがモンスターが出るだろ?」

「安全街道を通るので安心してください」

安全街道とはNPCが商売で通る街道のことである。NPCにモンスターが襲ってこないような道が存在する。

俺はため息をつく。

「明日出発でみんな大丈夫か?」

「大丈夫ですよ」

ブロッコが頷き。

「だが商売が」

とセイコブがうなだれると。

「NPCを雇ってみたらどうだ?」

俺の呟きにセイコブが希望の光を見つけたように微笑んだ。

「俺からみんなにメールを送る」

俺はメールを作成しながら色々なことを考えていた。

ギルドマスターは全員に同時にメールを送れるシステムがある。

これを活用してみんなで交流をはかることも可能である。

俺はひたすらメール文に修行のための合宿と書いた。

みんながそれに頷いてくれることを祈って。俺はひたすら書き綴った。

俺のステータスはみんなより四倍ある。俺とルミが夫婦なためである。

だから俺はみんなよりは強いという自負は持っている。

結婚してからルミはどんどんサディストぶりがエスカレーター式に上がっていった。

俺は驚きを隠せず。戸惑いつつも彼女のサディストにドエムたくなじんでいった。

たまに林檎を剥いてといわれて剥こうとすると。次は蜜柑ねといながら顔面に桃を叩きつけられるアクシデントもつきまとったものである。

しかも洗濯をしていると。いきなり俺に彼女の下着を洗えと言われたり。

たじたじしながら彼女の下着を洗っていると。エツチねと呟く彼女であった。

しまいには料理をしていると、あなたの料理は下手だから食べる価値がないわといいいながら食べている彼女がいたのであった。

彼女なりの愛情を考え俺は微笑みながら彼女の大切さをかみ締めていた。

ギルド本部から家に帰宅した俺たちはさっそくルミの料理に舌鼓をうっていた。

今日はカレーライスであった。

辛口であり沢山の野菜が色とりどりに使用されていた。

口の中に広がる辛味はまるで彼女の辛味のようにであった。

彼女は満開の笑みで食事をしていた。

「そうだ何か持ってくものある？」

ルミがスプーンでカレーライスをすくいながら呟くと俺は考えながら。ないと呟くのであった。本当にないのだろうか？ 大切なことを忘れている気がしたが。

「あなたの武器ってさなんで鍬なの？」

彼女の問いかけに頷きを返すと。

「俺はもともと爺ちゃん子だったんだよ爺ちゃんから畑のノウハウを教えてもらった。いつも背中には鍬があつたよ」

「へえ農家だったんだ」

「俺は農家じゃないよ、爺ちゃんが農家なんだ。俺はひたすらジャガイモとか玉ねぎを植える畑を耕してた。爺ちゃんはトラクターを使うことが下手だからいつも鍬だった。たまに馬で耕すこともあったね」

「とっても素敵な仕事ね」

「俺もそう思うよ、汗を流すってことはそういうことなんだとおもった。太陽がのぼってきて俺はひたすら耕し、シャツがべとべとになろうと水分補給をしてひたすら耕す。耕し終わったら次は種まきをする。種まきは色々と工夫してやらないといけない。でもそんなに難しいことじゃないんだよ、そう温かみをこめて蒔けばいいんだ」

「温かみをこめて？」

「例えばだよ？ この実はどのくらい大きくなるだろう？ もっと成長してね？ とかもっと沢山の実をつけてねだとか色々と温かみをこめて、つまり愛情をこめるんだよ」

「なんだか不思議」

「だから俺は鍬で闘う。剣でも闘うことはあるだろう。属性上しよугがないことだってある。でも俺は鍬で闘いたい。俺は鍬が相棒だと思ってる」

「ふーんあなたは鍬が向いているわかつこいいもの」

といいながら口の中にカレーライスを詰め込む彼女、もごもごと小さな口を動かして白い肌にかレーライスのルーがついていくのが

笑えた。

俺はハンカチを取り出して彼女の口元をぬぐってあげた。

彼女が顔を真っ赤にさせてうつむいた。

本当に可愛かった。

ポニーテールにした彼女の髪の毛。たまにロングヘアにする彼女の髪の毛。

そこからはいつも石鹸の匂いがした。

彼女のワンピース。毎日取り替えられるワンピースは白とピンクだった。

彼女の下着は青だったけど。

これは彼女には内緒である。

いやばれてますけど。

洗濯やらされてるのだから。

俺は微笑みながら。彼女を見つめた。

ルミはこちらを見てにこりと笑って立ち上がり氷で冷やしてあったアイスクリームを持ってきた。俺と彼女は食後のデザートを食べていた。

アイスクリームは桃とミルクの味がした。

これが恋愛の味なのだろうか？

「私がなんで鎌を使うか知りたい？」

「うん知りたい」

俺がそういうと彼女はちょっと思案してから続けた。

「私ね母親の庭の手入ればかりさせられてたのそりや毎日ね、鎌で雑草を刈ってたわ。手にこびりつく雑草の根が気持ちわるかったし虫も気持ち悪かった。でもひたすら働く気持ちよかったよ。まるでそう働くってこんなことなんだろうって気がした」

「それは働くというよりお手伝いだろう？」

「ううん働くってことはこうやって疲れることなんだろうなって」

「なるほどね」

「だから私は鎌を使う、使いなれているってのもあるけど唯一母親とのつながりがあるから。それと私がワンピースを好んで着るのは父親がそれが一番似合うって言ってくれたから。わたしは父親と母親のぬくもりを感じたいからこうする」

「それは一番いいかもしれないね」

「ねえ、あなたの両親の話聞かせて」

俺は少しためらった。これは話ていいのだろうか？
ちよつと疑問に思った。

だけど彼女なら話してもいい気がした。

彼女なら信頼できる。裏切らない。そして俺を見捨てない。

俺は彼女を助け彼女は俺を助ける。

相棒であり夫婦であり恋人だ。

「俺の両親はこのゲームを数十時間やって死んだ」

「そりゃ十時間ならよかったけど三十時間以上だった。確か八十時間だったかな？ もつとあったかもしれない詳しくはあまり覚えていないんだよ、でも唯一いえるのは五十時間以上はやって死んだ。俺の両親は廃ゲーマーだった」

俺は連続で続ける。

「俺の両親の思い出はあまりない、幼稚園のころから爺ちゃんが俺の家にやってきてお世話してくれた。俺は両親がいつもコアみたいなものにはいつてゲームをやっているのを見てきた。そのころはまだよかった。小学生になったころからエスカレートしていった」

まだ続ける。

「両親は俺のお世話なんて忘れていた。俺の存在自体も忘れていた。愛情なんてなかった。そんなある日父親がスターゲームオンラインの製作者の一人だとしてた。父親は俺の生活費のために働いている

のだと爺ちゃんから教わった」

「それから尊敬することもあったけど俺が中学生になったときどんどんエスカレートしていった。それは仕事ではないようなまるで中毒者のそのように何十時間もログインして栄養失調で死んだ。二人が同時に死んだことで警察はなんらかの事件性を調べていたけど、単なる偶然で片付けられたよ」

ルミが俺を見ながら。

「悲しかったの？」

本当に悲しかったのだろうか？

よく覚えていない、俺は両親が俺のために何かを教えてくれたことがあるだろうか？

あったのはゲームの話をやっとばかり、それはNPCの話であつたし母親は料理をめったに作らないたまにつくつたのはカレーライス。それも美味しくないカレーライス。

ルミのようなこんな暖かい味じゃない。

本物ではなくても俺はルミのような母親は考えられない。

俺はルミが愛おしい。

俺にとって母親も父親も赤の他人のようなものであった。

だから俺は。

そうだから俺は二人のことを忘れなくてはならない。

忘れるんだと決意するのだ。

「悲しくなかった」

「嘘よ」

ルミがこちらの目をジッと見ていた。

そこから透明な液体がぽつりぽつりと流れた。ルミが立ち上がって、俺をその胸に抱きしめてくれた。そんなに大きくない胸は柔らかくてしっとりとしていた。

俺は悲しかったのか？

彼女が暖かい。

「もつと両親の思い出をつくりたかった。両親はそんなことよりゲームだった」

「俺はなんのために生まれたんだろうってずっと思ってたよ」

涙がとめどなく流れた。それでもルミは暖かく抱きしめてくれる。

「きっと二人はゲームに夢中になって虜になったのね」

「そっなのかもしれない」

「でもね二人はきつとあなたのことを覚えている」

「なんで？」

「だってあなたにゲームのことを言ったのでしょうか？」

「うん」

「あなたのことをどうでもいいとおもったら楽しいゲームの話はしないでしょう？」

「うん」

「だからあなたは両親から愛されてたの」

俺の涙は止まった。俺は彼女を抱きしめながら。目を瞑った。

そうなのかもしれない。

俺は両親を大事に思っていたのだろう。

今なら両親と会いたい。

もしも両親がこの世界に魂となって転生してくれていたら。

今すぐにでも合って、このゲームについて教えてもらいたい。

それは儚い夢にしかならなかった。

「もう寝ましよう」

「でも早いだろう?」

「疲れたでしょう?」

「そうだね」

俺と彼女は食器をそのままに二階に上った。ダブルベッドで二人してパジャマに着替えた。彼女の下着姿を見て心臓がばくばくいたものである。

二人で同時に布団にくるまって眠ろうとしてルミが俺にキスをしてくれて、二人は同時に天井の木目を眺めながら。笑った。

「明日出発だね」

「そうだね」

ルミの呟きにそうだねとしか答えられなかった。

「がんばろうね」

「がんばろう」

「もっと強くなろうね」

「強くなろう」

「沢山の人を守りましょう」

「守ろう」

何度も眩きあつて。俺の瞳は閉じてしまった。

VRMMO内での睡眠は不思議とぬくもりを感じた。

まるで包み込まれている場所に無理やり押し込められ眠りの中に入れられるようなことなのだ。

暖かいとはもしかしたらコアのことなのかもしれない。

コアが俺を包み込んでいるのかもしれない。

朝目ざめて着替えをすますと。

俺たちはワープでギルド本部に向かった。

ギルド本部内にワープがあるので便利であつた。

外にでるとずらりと五百名が並んでいた。

一人一人点呼をとっている。

セイコブ

ブルコック

ブロッコ

不要な人物は紛れ込ませない。

レッドプレイヤーの危険性があるため絶対に必要の無い人は紛れ込ませないための措置である。

「ではマスター出発しましょう」

ブロッコが呟いた。

「ではみんな出発する。食料はブロッコが運んでくれる。それと無属性のモンスターは食べられるらしい。肉が食えないやつはブロッコから食事を渡してもらえ」

みんなが頷き。

「さてみんな大切なものを守るため強くなる。俺は大切なものを守れなかった。でも今大切なものがある。俺はそれを守りたい。そしてお前たちにも大切なものがあるだろう。俺たちは強くなる。そしてこの世界から脱出してみせる。ついてきてくれ無駄なことはしない」

「お前たちは強くなれる」

俺は叫んだ。

「俺たちは強くなる」「」

全員が叫ぶ。

「マスターは強い」「」

「みんな強くなれる」「」

全員がさらに復唱する。

かくして俺たちの四番目の修行が始まったのであった。

26話 クルブシの草原

安全街道を通るたんびにNPCの商人やらプレイヤー商人やらとすれ違った。みんな傭兵を身近に十名以上はつけていた。馬車で荷持つを運んでいるようだ。

みんなのほほんとした表情であつた。

十名も護衛がいればレッドプレイヤーは大抵襲つてこないらしい。

これはマメ知識なのだが。レッドプレイヤーは大抵が三人まで同時に相手できる。

だが五人以上となると攻撃をくらってレッドプレイヤー自身の身の危険がある。

と教えてくれたのはセイハツ老人であつた。

彼等は元気だろうか？

彼等なりの修行をしているのだろうか？

色々な疑問があるけど。あのリリカットの子憎たらしい微笑みを見れないのはちょっとさびしい。

五百名の行軍は安全街道をずっと進み続けた。モンスターは出てこない。

レッドプレイヤーも出てこない。

途中で宿屋があつたけど無視して通り過ぎた。五時間くらい歩いてから。昼になったのでみんなでブロッコから野菜の食事を受け取って食事にした。

みんなが色々な談笑に花を咲かせていた。

俺はルミと雑談しながらブルコックがこちらにやってきて色々と武器について教えてくれる。

「武器についてあなたはどれくらい知ってます？」

ブルコックの問いかけに俺は首をふった。

「なるほどちょうどいい機会ですから教えましょう、武器に属性付与をつけることは知ってますね？ あなたがセイハツ老人からもらった皮で水星属性を付与させたのはなつかしいことです」

「あのときはありがとございました」

「いえいえ、とにかくあなたは知らないようだ」

「何が？」

「武器には二つの属性を付与させることができますのです」

「なんだって？」

「水晶が必要ですが」

「水晶ってなんですか？」

「レアモンスターが落とす水晶ですね、例えば火星の水晶を落としたり。水星属性の武器に火星属性を付与させることが可能なのです。大抵は意識して切り替えることが可能です」

「だけどプレイヤー自身が火星属性でなかったらさらに強くならないんじゃないか？」

「そうですね、特定のモンスターには通用するでしょう、たとえば植物系モンスターに水星属性で攻撃すれば相手が元気になるのを防ぐため、火星属性に切り替えることによりダメージを与える」

「ああ、なるほどね」

「あなたはそういった敵とはまだぶつかっていないみたいですね？」

「そうですね、ですけど」

「そういった属性に対して優勢か劣勢かを決めるのは上級モンスターに多いのです。だからあなたが海王星属性を覚えているので、その反対を覚えることを進めますよ」

「海王星属性の反対は、火星か？」

「いえ土星です」

「なんでだ？」

「べとべとは土で落とすことができます」
「なるほど」

俺の呟きが響いたのであった。ブルコックは色々と教えてくれる。それも親身になって。

火星 ↑ ↓ 水星
海王星 ↑ ↓ 土星
木星 ↑ ↓ 金星
天王星 ↑ ↓ 地球

これが一般常識である。

木は雷に打たれる。

光はエネルギーを包み込む。

そういうことで反対なのである。

ちょっとだけ難しかったけどね。

あまり納得できない部分はゲーム状の設定だと思ったことにした。

食事を食べ終わるとまた行軍が始まった。

それから六時間が経ち、夜中の六時になろうとしていた。

俺たちはアイテムボックスからテント組み立て式を取り出して組み立てていった。

みんなそれぞれ床の間に眠りについた。

朝の三時にみんなが目ざめると、また行軍が始まった。

まだ太陽が昇っていない朝はそれなりに綺麗だった。

見張りは交代しながらやった。

みんな気を張り詰めていた。

俺たちはひたすら行軍を続ける。

それから六時間後に雨が降り始めた。みんなアイテムボックスから自作の傘を取り出した。傘は普通に作ることが出来る。

傘セットを買えば組み立ててプラモデルのように製作できる。

雨は地面をぬらしていく。

ドロまみれになった靴がかわいそうであった。

ルミがるんると呟きながら歩き続ける。

俺はというと暖かい風を感じていた。

雨雲は通り過ぎて雨が止んだ。

かくして巨大な草原にたどり着いた。

沢山の草花が広がっている。

「クルブシの草原よ」

ルミが呟くと、全員が止まった。

「ではみなさんパーティーを組んでください」

俺の呟きにあらかじめ決められたパーティーが結成されていく。

紙に名前とパーティー表が書かれてあるものを事前に配ってあったのである。

みんながこちらを見ている。

「いいですかクルブシの草原に入ったら。無制限にキャットモンキーが出てきます。それをあなたたちのスポーツパラメーターで倒してください。キャットモンキーは無属性です。たまに肉を落とします。彼等が狩った肉です。その肉は大抵がレアモンスターの食べるとステータスがあがります。肉を回収したら回収班に渡してください、二時間倒し続けたら一度草原から出て休憩すること、回収班は二つ用意します。もちろん回収班も修行しないといけないので回収班も交代します。わかりましたか？ 質問あるかどうかどうぞ」

「キャットモンキーは無制限に出るといいましたけど、どのくらいなんですか？」

「一度に百匹ずつ出てきます。一匹倒すごとに一匹増えます」

青年がため息をついた。

「なんで無制限なんですか？」

「そうですね、ここはキャットモンキーの巣なんです」

「ああなるほど」

老人みたいな男が頷いた。

巣という場所は大抵のモンスターが無制限に出てくる。

理由はそこが沸きポイントだからである。

大抵は沸きポイントでモンスターを倒すことはないだろう。

だけど修行場所として活用されることが多いのである。

こういった情報は情報誌、つまり新聞師たちが情報を掴み編集している。

たまにこう言った場所に紛れ込んで無制限に倒し続けて強くなるものもいれば。逆にとどめをさされて死ぬ人もいる。

知識は重要である。

ここに一人で紛れ込み死んだ人は恐らくいるだろう。

一度に百匹も現れるのだから。死んでもおかしくない。

俺はちよつとだけさびしい気持ちにさせられながら。囁いた。

ルミの説明はウマかった。

次は俺の説明だ。

「みなさん聞いてくださいスポーツパラメーターは恐らくリアルでのスポーツに影響しています。サッカーボールなら蹴ること、バトミントンなら玉を出して叩くこと。武器として使おうとせずスポーツをするように使用してください」

みんなが頷いた。

「よし第一から第十部隊まで先行してください」

俺が叫んだ。

全部で第五十部隊まである。俺とルミとセイコブ、ブロッコ、ブルコックも含めると。

第五十一部隊だけだね。

猫みたいな猿が現れた。

みんなが必至になって走る。

それぞれがスポーツパラメーターを使用する。

あるものはボーリング球を投げ、ある物はハンマー投げ、あるものはバスケットボール、あるものはサッカーボール。どうやら一人だけのオリジナルではなく二人で同じものも存在するようだ。

色んなスポーツが活用された。

不思議だったのは足が光っている人たちだ。

どうやら陸上の力が出たらしい。陸上部に入っていたのだろう。とてつもないスピードで走り敵を蹴り上げていた。

みんながとてつもない形相で闘っている。

俺もそこに登場してサッカーボールを蹴り飛ばした。

キヤットモンキーにヒットして一撃で粉碎した。

ルミも同じようにして敵をほふっている。

俺はひたすら無制限に出てくるキャットモンキーをサッカーボールでドリブルしながら追い越しては蹴り上げボールを当てた。

まるでサッカーをしているみたいだ。

これは試合なんだ。キャットモンキーとの。

沢山の仲間たちをドリブルで追い越すと敵が見えてきた。

敵に向かってサッカーボールを叩き落とすと次はバックステップでドリブルして敵の攻撃をよける。

右まわりにくるりと回転してボールを上にあげるとヘディングしてキャットモンキーにボールをあててエフェクト光にさせる。肉が落ちたので拾った。アイテムボックスにしまってまたドリブルを繰り返す。

二時間後、俺たち全員撤退した。回収班が変わりに攻め込んだ。たった二つのパーティーだが精鋭ぞろいである。

回収班に肉をわたしているため。

みんな疲れた顔であたりを見渡し、息をすいあげてはため息をついてきた。

みんなそれぞれスポーツパラメーターの強さを知ったはずである。

それでも何か不に落ちない表情をしている。

「みんな何か勘違いしているようだ」

俺の叫び声にみんながびくりと動いた。

「お前たちは心に思った。守りたいものを守ると、それは強くなることだ」

「だがお前たちは楽しんでいない、強くなるためには楽しむことが重要だ」

「なぜならスポーツとは楽しむことだ。もっと思いつけお前たちがスポーツをしていたときの気持ちを。思い出すんだ」

俺は思い出している。だからこんなに楽しい。
ルミも同じである。

セイコブとブルコック、ブロツコは思い出したようだ。

そして三十分が経過して、俺たちも侵入したのである。回収班を二組残して。

クルブシの草原で俺たちは戦い続ける。成長するため強くなるために。

みんなが必至の形相で死と隣あわせで闘っている。

かくして俺たちの修行は終わった。

すべての修行を終えて、みんながほのぼのしている。

二十時間。

それがクルブシの草原で戦い続けた時間である。

みんなが草原の入り口で肉を焼いて食べている。

ドロップアイテムである。

それは美味でありウマかった。千個くらいは取れたので一人二個はあたる。

俺たちはひたすら食事を続けた。

みんなが目にしたに限をつくりため息をついていたのだが。皆の目には確かな生気が宿っていた。ちゃんと感じているのである。

スポーツパラメーターが楽しむことにより強くなることを。

ほとんどのプレイヤーが敵を一撃で倒すまでに五時間はかかった。

次に敵の攻撃をよけながらスポーツパラメーターを使用するのに三時間はかかった。

みんながそれぞれの時間をかけて成長した。

かくして修行は終わった。

みんながレッドプレイヤー並みの強さを持っている。

あとはスキルを覚えるだけである。

スキルを覚えれば、一人一人の個性が生まれてくる。

俺はそれを望んでいる。

そして何よりもみんなが同時に強くなり、みんなで支えあうことを祈っている。

だから俺たちはひたすら前に突き進むのである。

みんなが眠りについたとき俺とブロッコは見張りについていた。

「やっぱりすごいですシンベイさんは」

「俺はすごくないよ」

「いえいえ充分すごいです。なぜかってみんなをあつという間に一つにしてしまうんですから」

「俺は助言を与えたただけだ。どうやったら楽しめるかをな」

― 敵を対戦者だと思え。

― 敵は果物だ。

― 敵は単なる生き物だ。

― 敵は俺たちを殺す気だ。お前たちは敵を殺すだろう？

― 敵はスポーツの対戦相手だとしたらお前たちはどうする？

が俺の呟きであつた。

弱ったプレイヤーに活をいれたのは俺であった。

ルミも叫んでいた。

みんなが一致団結になって戦った。

俺たちの明日はここでの修行に掛かっている。

だから皆必至で修行した。

「明日はいよいよ『大和の洞窟』ですね」

「そうだな」

「何か情報はありませんか？」

「あるとしたら上級モンスターがうようよいるということだけだよ」

「はあ誰も死なないことを祈ってます」

「そりゃ俺たちも同じだろう？」

「まったくです」

ブロッコが笑った。

「交代しよう」

セイコブとブルコックがやってきた。

俺はテントに戻ってすやすやと眠っているルミを見つめて苦笑した。

かくして俺たちは次の修行のための睡眠をとることにした。

闇は俺たちを包み込み。そして何よりも暖かさ、温もりを奪っていく。

闇は危険である。

だから俺たちは見張りを置く。

それが身を守る方法だと唯一知っているのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2853x/>

STARWORLDONLINE—スターワールドオンライン—

2011年10月26日14時58分発行